

ポケットモンスターJ

ユンク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本でごく普通の生活を送っていたポケモン好き青年。ある日、謎の空間である生物に異世界へと転生することを告げられる。しかし、その異世界とは平行世界とも呼べる場所で青年が暮らす日本と些細な違いはあれど大きな違いはなかった。ポケモンの概念が存在しないこと以外は。

平行世界に転生し、風見海飛として第二の人生を前世の知識のお蔭で少し有利に生きつつも珍しい模様の愛犬レアと平凡な生活を送っていた。その愛犬は海飛が十歳の時に死んでしまうが……

2020年、日本はポケモンと共に歩みだす。

本作に登場する人物名、団体名、地域名等の固有名詞は全てフィクションです。

目次

神の気まぐれ

プロローグ

相棒

ポケットモンスターJ

初陣

市役所

試練

お金の話

ポケモンバトル

進化

仲間

お仕事

75 65 59 51 45 39 32 24 18 8 1

ポケモントレーナー講座

初ピカチュウ

お誘い

スイーツ

日本の苦難

停電

会議

会議2

脅威

脅威2

戦争

パートナー選び

レッド

151 145 139 133 126 120 113 106 99 92 86 81

旅の仲間	228
ヒノアラシは嫉妬深い	223
仲間とお仲間さん	217
大きな相棒	211
小さな相棒	204
掲示板	196
進捗	190
波乱の幕開け	
特訓	183
創生神話	177
炎天下	170
襲撃	163
救助	156

お手並み拝見	234
地震、津波、○○○○○	242
神託	248

神の気まぐれ

プロローグ

異質な空間で向かい合う者たちがいた。

一方は日本にならどこにでもいそうな普通の青年。

もう一方はこの異質な空間の主であり、圧倒的な存在感を放っていた。

異質な空間の主はごく普通の青年に対して何かを語りかける。

その言葉を聞いた青年は驚くような表情をする。

青年は異質な空間の主を知っているように名を呼ぶ。

青年は困ったように話しかけるが主は微かに笑うだけ。

やがて、主は口を開くと何かをいい、青年は光に包まれた。

「精々私を楽しませてくれ」

主は微かに笑うと消えた。

「ワン！」

「ちよつと待ててっ！」

「ワンッワン！」

黄色に近い毛色の地毛に黒い線の様な模様が入ったなんとも珍しい犬が俺の前を走る。

時々振り返りながらワンワン吠えるので少しイラつくがこつちを心配している様なので怒りをぶつける事はできない。

心配するならスピードを落とせと言いたいが。

こいつは賢いのでこつちの言う事は何となくだが分かってくれる。

「はあはあ、今日はちよつとテンション高いな」

「クウーン」

尻尾を振りながら、息を切らしている俺のところまで来ると心配そうにこつちを見上げる。

「大丈夫……もう少し走るか！」

「ワンッ！」

少し遅れたが紹介しよう。

この黄色の毛並みに黒い線の模様が入っている特徴的すぎる犬はレア。珍しいからレア。実に安直だと思ふ。

レアは俺が産まれる3年前から飼われているので名前は両親が付けた。

そして俺は風見海飛かぜみかいとだ。

今年で8歳になる。

中身は30歳越えているけど。

どういうことかというのと、こことは別の日本で大学をでて社会人になってという普通の人生を歩んでいたのだが、気付いたら今いるこの日本で赤ん坊から再スタートである。

こことは別の日本と言ったのは、今いる日本とはどこどころ違うからだ。

まず、俺は前の世界では1992年生まれで最後の記憶では25歳だったのだが、こつちの世界に産まれて来た時は2008年と時間がずれていたのだ。

世界がずれているのに些細なことかもしれないけど。

そして、前の世界とは違うところも多い、お菓子の名前が違っていたり、総理大臣が違ったり、教科書も前世界とは少し違っていた。

しかし、大まかな歴史は変わっていないように江戸時代には鎖国しており、ヘンリーが黒船を率いて開国をせまり、なんやかんやあって太平洋戦争を経験しぼろぼろの状態

から高度経済成長期を経て、今の日本がある。

ヘンリーってだれやねんと思わず突っ込んでしまったが。

なによりもポケットモンスターが無かった。

これには衝撃を受けた。どうして、他の有名なゲームやアニメなんかは前世界と殆ど変わらないのに、ポケモンがないのか。

ポケモンは小学校のころからやっていて大人になってからもやっていた。

三値を知り、厳選を始め、ダメ計をし……面倒だったから殆どしてないけど。というかもう忘れてしまったが、とにかく大人になっても飽きる事は無かった。廃人っていうほどでも無かったけど。

とにかくショックだったのだ。

この平行世界の日本で前世の知識があるので周りよりも少し有利に生きているが、特にこれと言った目立った物は無い。

前が平凡だった為にこちらでも平凡な暮らしを送っていた。

「わ……しの……ま……しのた……お……えを別……世……に……る……02……ね……が……ター……だ。精々私を楽しませてくれ」

またこの夢か。初めて見たのは8歳の時、あれ以来日に日にこの夢を見る回数が増え
てきている様な気がする。

「んあ、ふああ、眠い」

俺は今年で10歳になる。

今日、小学校は休みですっかり老いぼれてしまったレアのそばにいてやる事にした。

「随分と老けたな、レア」

「クウーン」

レアからは弱弱しい鳴き声が返って来る。

犬を飼っている以上は別れの時は必ずやって来る。

いつも傍にいたこいつにもだ。

「最後まで一緒にいてやるからな」

そういうと、レアがすり寄ってくる。

俺の気持ちを感じたのだろうか。

2019年12月31日

レアのいない2度目の年越しを迎える。

「5、4、3、2、1、0！」

テレビ番組で恒例のカウントダウンをしていた。

「明けておめでとう海飛」

「明けておめでとう海飛ちゃん」

「明けておめでとう、父さん、母さん」

そして、また一年が過ぎたよ……

「……レア」

「ワン！」

「え!?!」

今レアの声がした気がする。

俺は急いで、玄関に向かう。

「海飛？」

「どうしたの?」

父さん達の声を背に、玄関までたどり着いた俺は玄関扉を開けた。

するとそこにいたのは黄色の毛並みに黒い線の模様が入った犬に近い生き物だった。

「ガウ！」

「うわ！」

犬に似た生き物は俺を見ると一直線に飛び込んできて、俺を押し倒した。

「いった……おもいって」

「クウーン」

俺を押し倒したそいつは心配そうに俺を見下ろす。

この反応に、この毛色に黒い線の模様。

「もしかして……レア、なのか？」

「ガウガウ！」

正解だと言わんばかりに尻尾を激しく振り、俺の顔をなめてくる。

どうしてレアが……いや、こうしてまた逢えたんだ。深くは考えないでおこう。

それにしてもだ。

「どうして、お前、ガーディにそっくりなんだ？」

「ガウ？」

そう、レアはガーディになって帰ってきた。

それも色違いのガーディとして。

2020年、日本はポケモンと共に歩み出す。

相棒

「レア、ひのこ」

「ガウ」

あの後家の中にレアを入れて、久々の再開を喜び、容姿がガーディに似ている事から、ひのこを使ってみてもらったのだが……

「出来てしまった……」

「おい！ 母さん、レアが火はいたで！」

傍にいた父さんは大慌て、レアは少し得意げな顔をしていた。

それにしてもポケモンが存在していなかった世界にいきなり現実にポケモンが現れるというのはどういう事なのだろう。

「ガウガ」

「うん？ なんだ？」

レアは思い出したように前よりもモフモフになった毛の中に首を突っ込むと、二つの石を取り出した。

「これは……うん、うん？ まさか！」

目の前に転がる石は見たことがない筈なのに見覚えがあるものだった。

石の真ん中にはDNAの螺旋に似たものが描かれている。

もう一方の石は白が赤に挟まれた模様が入っている。

「こっちはキーストーンに、これがメガストーンか!」

「ガウ」

正解という風に頷くレア。

「でもこれはなんのメガストーンなんだ? 赤となると、バシャーモか、リザードンか?」

「グア」

今度は不正解の様で首を横に振る。

「ガアガア!」

レアは前足でメガストーンを抑えると自分の前に引き寄せる。

「まさか!?! ウインディナイトなのか?」

「ガア!」

レアからは正解という返事が返ってくる。

「まじか……ウインディのメガシンカなんて聞いた事ないけど……」

「ガアン」

胸を張って出来ると言っている様だった。

とりあえず、どういう訳かキーストーンとメガストーンを手に入れることが出来たので内心凄くワクワクしていた。

憧れた、ポケモンが今、目の前にいるのだ。

「レア、おかえり。そして……モフモフさせて」

「ガウ」

レアが気持ちよさそうに目を細めながら暫く俺にもふられていると、俺の耳にニュースのアナウンサーの声が入って来た。

「新種の生き物でしょうか!? 見たこともない鳥が空を飛んでいます!」

「うん? はああああ!?! なんてやねん!」

思わず大声を出してしまった。

なんせ、夜にもかかわらず電気を纏いながら空を飛ぶサンダーがテレビに映っていたのだ。

「なんや? 海飛」

「い、いや、なんでも」

ニュースの画面はスタジオに切り替わり、専門家にアナウンサーが見たことあるかと

質問するが、見た事ないと即答。

そりやそうだろう、この世界にポケットモンスターは存在していなかったのだから。

「みたところ、電気を纏っている様でしたが……こんな生物は見たことありませんね」

何故生物の専門家が都合よくいるのかツツコミたいが、俺だつて電気を纏つて飛ぶ鳥なんて見た事ねえよ。

画面がまた切り替わり、今度は街の中を映している様だった。

「東京にこんな大きなネズミがいるのでしょうか!？」

アナウンサーは驚きながら実況をする。

カメラはしつかりと紫色のネズミ……コラツタを映していた。

そして次から次へとポケモンが映し出されていく。

ポツポ、マメパト、ヤミカラスなど……

「俺、ポケモンマスターになる」

「へ?」

こんな状況なら一度言ってみたかったセリフを言つてもいいだろう。

若干、現実逃避しているようにも見えるが。

父さんの間の抜けた声は無視して、俺は東京に行く事に決めた。

「父さん、俺、東京に行くことにした」

「はあ、はあ!？」

父さんは何を急に言い出すんだとか言っているけど、もう決めた事だ仕方ない。

そして、俺はこの世界で最初のポケモントレーナーになる。

何故東京に行くのかというと総理大臣に会うためだ。何故かって？ ポケモンに自衛隊が出動して銃を向けられているところなんて想像、したくもないからだ。

前世でポケモンが現実に現れたらいいなあと妄想していたので、こうなつた場合は取り敢えず政府に取り合わないとは色々手遅れなことが出て来てしまうのではと考えていた。

因みに俺がいるのはゲームで言うジョウト地方コガネシティ、大阪府である。

「レア、よろしくな」

「ガウ」

もちろん、レアも連れて行く。

レアもやるきみたいだ。

東京まで旅をして、レアを強くして、仲間を増やす、先ずそこから……

「あ、モンスターボールがねええ!!」

「ガウ?」

「海飛!？」

レアは首を傾げ、父さんはいきなり大声を出したので驚いていた。

「ポケモンいるのにモンスターボールないとか……どうしよ」

とりあえず、夜も遅いので寝る事にして、自分の部屋に戻ったのだが、自分の机の上にモンスターボールが10個置かれていた。

「え？　なんで？」

俺は机の上に置かれたモンスターボールを手取る。

大きさはソフトボールくらいで、俺の手には少し大きい。

「たしか……ここを押せば」

俺はモンスターボールの中心、ボタンになっているところを押した。

「うおー！」

すると、モンスターボールは小さくなり、ピンポン玉サイズになった。

俺は残りのボールも小さくすると、机の上に手紙が置かれているのが目に入った。

「なんだ？　これ」

誰からのものか分からなかったが俺の名前が書かれていたので洋封筒を開け、手紙を読む。

手紙には、

「これは私からのこの世界を楽しむための贈り物だ。有効活用したまえ。モンスターボールやその他のアイテムなどは、そちらに出現する様にしておいたから見つけて拾うといい。そして、ポケモン図鑑などの機能が使えるアプリをネットに流しておいた、自分だけで使うもよし、他人に教えて使える様にするもよしだ。『ポケモン』と検索しスマホのストアからダウンロードできる。

因みにお前のガーデイも私からの贈り物だ。魂を引き継いでおるから、犬だった頃の記憶もある。

これは私の暇つぶしだ。精々私を楽しませてくれ」

俺はその手紙を読み、思い出した。

最近よく見た夢の内容。

霧が掛かったように思い出せなかった夢が、今ハッキリと思い出した。

そう、異質な空間にアイツと俺の二人。

アイツに平行世界の日本に転生してもらおうと告げられ、困惑する。

そして、その世界にポケモンを召喚すると言うのだ。

それに驚くが、同時にポケモンという存在と触れ合えることが出来ると言う事に嬉しくも思った。

今日の前にポケモンがいるのだが……。

どういう事だ、と聞いてみるが特にこれをしろという理由とかは無いようだった。

ただ、お前は不確定要素だといわれた。

そして、アイツは「私の暇つぶしの為にお前を異世界に送る。2020年がスタートだ。精々私を楽しませてくれ」と一方的に言い終えると俺をこの世界へと送ったのだ。

ポケモンという概念が存在しない世界、けれどもポケモンの存在が身近になる世界へと。

「ガウ」

「レア、いつの間に」

いつの間にか俺の部屋へと入って来ていたレアはモンスターボールに向かって吠える。

「モンスターボール……レア、付いて来てくれるか？」

「ガウ！」

当たり前だと言うように力強く吠える。

「ありがとう、いくぞ、モンスターボール！」

「ガウー！」

俺はモンスターボールを宙に投げた。

すると、レアはジャンプしてモンスターボールに触れる。

レアはモンスターボールに吸い込まれ、モンスターボールは床に落ちると、カチツと音を鳴らした。

「出てこい、相棒！」

「ガウー！」

「ぐふっ」

モンスターボールからレア、俺の相棒が出てくると嬉しいのかとびかかって来て押し倒された。

本日二度目だ。

「まったく……明日からよろしくな、俺の相棒」

「ガウガウー！」

レアは元気よく返事をしてくれた。

明日からこいつとの冒険が始まる。

ワクワクが、ドキドキが収まらず、思わず口元が緩んでしまうが。

「レア、どいてくれ」

「ガ、ガウ」

申し訳なさそうにしている姿がかわいかったので撫でて許してあげた。

ポケットモンスターJ

「さて、ポケモンのアプリでもダウンロードするか」

俺は最近買って貰ったスマホからストアを開き、ポケモンで検索してみた。

すると、一件だけヒットした。

前世では何件も出て来たというのに、この世界にポケモンという概念は存在しないんだと一っだけポツンとあるアプリに寂寥感が込み上げてくる。

「ポケットモンスターJ?」

一っだけ表示されているアプリはアイコンがモンスターボールのポケットモンスターJというアプリだった。

Jってなんだ? と思いながらダウンロード画面へと進む。

特にこれといった紹介文などは無かった。

「ダウンロード完了っつと」

そう時間がかからずにダウンロードを終えると、インストールが終了。

早速、モンスターボールのアイコンをタッチしてアプリを起動させた。

シンプルなモンスターボールの壁紙に、名前の入力欄がある。

「名前って本名……じゃなくてもよさそうだな」

ゲームの時の様にひらがながカタカナかアルファベットでしか打てなくなっている。文字数も6文字までのようだ。

「うーん、ま、カイトでいつか」

ゲームの主人公の名前を打ってみようかとも思ったがやめておいた。

名前の入力が終わると、いくつかの項目が出てきた。

ポケモン、ポケモン図鑑、ポケモンセンター、ショップ、バッグ、トレーナーパス、メールとある。

「ポケモンは手持ちのポケモンの状態を見れるのか、レアが表示されてるな」

レアのレベルは10と少し高かった。

特性はもらいび。

性格はやんちゃだった。

そして覚えている技は、かみくだく、あさのひざし、ほのおのうず、フレアドライブ、もえつきる……ひのこ。

「おまえ、どうしたんだ？」

思わずレアに聞いてしまった。

だって、技を6つも覚えているし、レベルにあつてない技を覚えているとなると合計

5つも遺伝技を覚えていることになるし、最後のひのこだけまともなはずなのに浮いているし。

「ガア?」

「まあ、強いからいつか」

不思議そうに見てくるレアを取り敢えず撫でておく。

次にポケモン図鑑を開くと、みつけた数1、捕まえた数1と表示されている。

レアのことだろう。

次にバッグを見てみると中には何も入っていないかった。

「バッグの中にはどうやって入れるんだろうか」

モンスターボールを手にとってバッグの画面にかざしてみる。

すると、モンスターボールが淡く光ると、消えてしまった。

「おおー!」

その後、モンスターボールを9個収納した。

ポケモンセンターはポケモンたちの体力を回復してくれるようだったが、回復には1時間程、時間が掛かるらしい。

シヨップはモンスターボールなどをポケマイルで買えるようだった。

次はトレーナーパス。

名前はさつき入力したカイトの文字が表示されている。

名前の下にはIDNo. 0000001と表示されている。

IDは登録した順番で決まるのだろうか。

図鑑は1匹

おこづかいは0円

今手に持ってないから0円なんだろうけど、見てると悲しくなる。

試しに財布を持ってみると2000円になった。

どうやって認識しているのだろうか。

おこづかいは下にはポケマイルが0と表示されている。

ポケマイルは100歩、歩くと1マイル溜まるようだ。

モンスターボールの値段が100マイルと考えるとモンスターボールを買うのに1

万歩歩かなくてはならない計算になる。

「結構大変だな」

ここから東京までどれくらいの歩数を稼げるだろうか。

そんなことを考えながらスマホの画面を消すと、明日に備えて寝ようとしたが遠足前のワクワクしたような浮ついた気分になりなかなか寝付けなかつたのでリビングに降りてニュースを見る事にした。

どの番組も新年あけてそうそうにパニックになっていた。

「お、海飛。なんか大変なことになってるで」

「ニュース見てみ、新種の生物発見報告が続々と、やって」

「そうやな。お？ ピカチュウじゃん」

父さんと母さんがテレビに釘付けになっていた。ニュースにはどこからともなく現れたポケモンたちが映されていてあの代表的なポケモンであるピカチュウも映っていた。

その一方で。

「大変です！ 線路の上を牛の様な生物が走っています！」

「うわあ、ケンタロス……危ないなあ。もしかして交通機関マヒするんじゃないか」

交通機関がマヒするのは予想済みだったがやはり使えないとなると山を越えたりするのはきつそうだ。これじゃあ東京まで行くのに一週間はかかるんじゃないだろうか。

「つて、市役所にいけばいいのか！」

うん。わざわざ東京に行く必要もなかった。市役所に行けば話は国のトップに伝わらるだろう。

しかし、直接話した方が良い気もするので東京にはいくつもりだった。

問題は旅費なのだ。

「お父様。お母様。旅費を頂きたいのです」

「なんや。いきなり。本気で東京行く気なんか?」

「はい。今ニュースに映っているのはポケモンという生き物で、レアもガーディという種類のポケモンになって帰って来たんだよ」

「ぼけもん?　なんでそんな事知ってんねん」

「それは、かくかくしかじかで」

取り敢えず前世の話をしてみた。

「信じられへんやけど」

「海飛ちゃんそれほんま?」

「うん、だから、ポケモンの事は詳しいから取り敢えず偉い人に話をすることにした」

「偉い人って言うってもなあ。分かった。お父さんもついて行くわ」

「ありがとう」

そういう訳で理解あるお父さんとお母さんのお蔭で無事に旅に出れそうだった。

それにしても、理解が良すぎるよな。

初陣

眠い。眠い。浮かれすぎて昨夜はほとんど眠れなかった。空が白みはじめたのがカーテンの隙間から窺えるようになる。目が覚めきってしまった。

一方、レアは俺の布団の中でぐっすり眠っている。

「レア、起きろー、朝だぞ」

「グア、アーウ」

大きな欠伸をして、レアはベッドから飛び降りる。俺も欠伸がつかれて出てしまい、背伸びをして体のある程度ほぐすと二階の自分の部屋から階段を下りてリビングへと向かった。

「おはよう」

「おはよー、そこにあるパンでも食べといて」

「分かった」

チヨココクワツサンを迷わず選ぶと袋を開けて頬張る。

「ガウー」

レアが俺の脚の周りを回りはじめたのでお腹が空いているサインだと分かったが、

ドッグフードは家にはないしどうしたものか。

「ん〜、お、あった」

例のアプリのポケモンセンターを選択するとポケモンフーズが購入できるようだったが、ポケマイルが5必要と書かれている。

「少し散歩しようか。悪いけど飯は散歩の後な」

「ガウツ」

残念といった風にレアは鳴くが早速玄関に向かつて走っていった。

慌ててクロワツサンを詰め込み、服を着替えると玄関に向かう。そこでは遅いと少々不機嫌にレアが尻尾を揺らしていた。

「悪い悪い」

レアに謝りつつずっと保管していたリードをつけようとするが……あれ？ リードする必要ない気がするな。だってモンスターボールあるし。

という事で、リードはなしで散歩に出かける事にした。

「あんまり離れるなよー」

「ガアー！」

元氣よく返事をするレアに遅れないようついて行きつつ、街の様子をしてみる。

空を見上げればポツポヤオニスズメが飛んでいる。道路沿いにはジグザグマやヤブ

クロンにデルビルなんかがいる。

得体のしれないものが闊歩している事に恐怖しているのか人の姿は少なく、すれ違う人も足早だ。

「もうたまったかな」

アプリを開き、マイルを確認すると8マイル溜まっていたので、ポケセン画面に移動し、ポケモンフーズを購入。バッグの画面に移動しポケモンフーズを選択すると飛び出してきた。

「おっと、これがポケモンフーズか。容器は貸し出してくれるみたいだし、飯にしようか」

「ガウー！ ガウー！」

嬉しそうに俺の周りを跳ねるレアにお座りといえ、素直に座る。

ポケセンの画面にある貸出品の中から容器を選んで容器を出現させるとそのなかに先ほどのポケモンフーズを袋から取り出して入れる。

「待て………よし」

「ガウ、ハウ、アウ」

がつついて食べる様子を見るに相当お腹が空いていたようだ。悪い事をしたなど思
い、一撫で。

ポケモンフーズは一日分あるようであと2食分は大丈夫そうだった。ポケモンフーズをスマホホのバッグ画面に翳せばぱっと消える。

当たり前のように使っているが一体どうなっているのやら。アイツが作ったということはアレが関わっているんだろうか。

「ガウー！」

「食べ終わったか？ レア、ちょっとバトルしてみないか？」

「ガウー！」

「お、じゃあ、早速ジグザグマとしてみようぜ」

レアはやる気満々の様なので小道に居たジグザグマの前に出る。

「いけ！ レア！」

「ガウー！」

「グッ！」

レアが吠えるとジグザグマも戦闘態勢に入った。

それをみて、取り敢えず無難な技で攻める事にした。

「ひのこー！」

レアはひのこをジグザグマに放つが避けられてしまう。

「避けてかみくだく！」

「ガアア！」

ジグザグマが体当たりをしてきたのでレアは避けてジグザグマの横っ腹にかみくだくを命中させた。

ジグザグマは瀕死のダメージを負ったようで、そのまま逃げて行った。これで戦闘は終わりなのだろうか。ゲームだと野生のポケモンと闘った後どうなるかまでは分からないから多分これで勝ったのだと思う。

「よくやった！」

「ガウガウ！」

やっぱり強力な遺伝技を覚えているお蔭で大分戦闘が楽な気がする。それにレアの元々の動きもいいからこのレベル帯では無敵じゃないだろうか。

「もう少し戦ってみるか？」

「ガウ！」

今度はデルビルを発見した。おそらくこの街で見たポケモンのなかで一番強いのがデルビルだろう。

デルビルはあく、ほのおで、特性にはもらいびがあつたはず。

「レア、いけ！」

「ガウ！」

「グルルル、グルアー!」

ん? 今のはもしかして技か?

「レア、かみくだくだ」

「ガウ!」

「グア!」

レアがかみくだくを当てるために近づこうとしたところに霧のようなものが放たれた。ええと、あれはスモッグか。マイナーすぎて分かりにくい。

「離れろ!」

間一髪で避けてスモッグが晴れたところを見計らい再度かみくだくをあてる。今度は上手くあたったが耐えられてしまう。

耐えきったデルビルはたいあたりで反撃してきた。たいあたりの割に威力が高くレアが足元まで飛ばされてくる。

「レア! 大丈夫か!」

「ガウ」

「よし、デルビルの手前にほのおのうず!」

デルビルとレアの間にほのおのうずを作り、視界を遮る。

「レア、あさのひざし」

視界が遮られてデルビルが動かない間にあさのひざしを使って回復をしておく。体力が回復し元気になったところで攻撃に移る。

「ほのおのうずを突っ切ってかみくだくだ！」

レアはほのおのうずに飛び込んでいく。俺からはほのおのうずがいまだに邪魔をして視界が遮られているがデルビルの驚いたような声と悲鳴が聞こえたので、レアは上手くやったようだ。

「ガウー！」

「よくやったなー！」

ほのおのうずが消えると、レアが駆け寄ってくる。その向こうにはデルビルは既にいなかった。多少苦戦したが無事勝利出来たので、うりうりと撫でまわしてやる。

嬉しそうに尻尾を振る姿はやっぱりかわいい。

「いったん家に帰ろうか」

「ガウー」

バトルを終えて家へ帰る途中にステータスを確認したところレベルが11に上がっていた。

この調子でどんどんレベルを上げていきたいし、あるのか分からないがほのおのいしが欲しいところだ。

「あつた」

アプリのシヨップにほのおのいしありました。五千マイルかよ……

市役所

朝の九時。

父さんが運転する自動車に乗って市役所へと移動中。

俺が住んでいる瀬都市は大阪市の北にあるところで前世だと摂津というところだった場所とほぼ同じだ。

このあたりの旧国名がこの世界では瀬都^{せつ}らしく、そこからきている。人口は結構多く、9万人ほどだ。

市の南側には澱川が流れており、レアが犬の時代にはよく澱川に沿って散歩したものだ。こちらも前世とは漢字が違って淀川ではなく、澱川になっている。

こういつた風にところどころが微妙に違うのだ。

「ほらついたぞ」

「ありがたい、父さん。……役所って初めてなんだけど」

「ついて行ったるから。それで、ポケモンの事を話すなら環境課か？」

前世で行ったことあるから初めてじゃないんだが、やっぱり子どもが一人で役所に行くのっておかしいし。そもそも取り合ってくれるかが分からない。

それに父さんも行くつもりだったみたいだ。

「知らん」

「だよな、まあ、聞いてみるか」

ということでは早速、市役所の中に入って……人がやけに多いな。

取り敢えず父さんに丸投げしてみた。

するとどうだろう、あれよあれよという間に一般人が滅多に入る事のないだろう部屋に通された。

父さんにしたの。

ふかふかで高そうなソファに座りながら案内された部屋で緊張して人が来るのを待っていたら、父さんは呑気に出された茶を啜りだったので俺は出されたお菓子を頬張った。

これ、美味しい奴じゃん。

暫くすると扉がノックされる。

「初めまして、環境課の霧島轟きりしまこうと申します」

「同じく島風進しまかぜしんいちと申します」

「同じく大和望やまとのぞむと申します」

環境課に相応しくない様な気がする名前の三人が部屋に入ってきた。

あれかな、三人で艦隊でも組んでるのかな。

そして、もう一人。

「戦場武蔵せんばむさしと言います。この瀬都市市長です」

瀬都市市長の攻撃は急所に当たった！

知ってたけど。市長の名前が武蔵って。

父さんが立ちあがって名乗ったので、俺も名乗る。

そんな市役所艦隊組は俺と父さんの対面に来るとソファに腰掛けた。

「それで、昨日急にあらわれた生物について詳しい事を知っていると聞いたのですが」

俺は緊張で手に汗を握りつつも頷いた。

市長が出てくるという事はそれだけ今回の事態は大変なことなのだろう。

「あれは、ポケットモンスター、縮めてポケモンです」

「ぼけもん？」

「はい、ポケモンたちは人間の言葉は理解できますし、火をだしたり水をだしたり、強力な力を持つていたりします」

「火を、出せるのか……」

市長は驚いていたが、直ぐに思考モードへと入ってしまった。恐らくその危険性などを考えているに違いない。

「百聞は一見にしかずです。見てみますか？」

「どういうことだね？ 確かに見てみたいが」

「分かりました。レア、出ておいで！」

「ガウ！」

「うおっ!？」

なんで父さんが声出してるの！

艦隊組は声すら出てないけどね。固まっていた。

ボールから質量保存の法則など知らんぷりという風に中型犬くらいの生物が飛び出してきたのだ。驚くなどというのが無理な話だろう。

「ガウ、ガウ、ウーン」

「よしよし、こいつはレアといいます。ガーディという種族のポケモンです」

再起を果たした艦隊組に説明する。レアは色違いで黄色だが本来は赤い色だという説明も一応しておく。色違いとは遺伝子の突然変異だとか適当に言っておいた。ほら、ホワイトタイガーとかいるしね。

「レア、ひのこだ」

「ガウ！」

レアは一吠えすると口から火をはきだし、直ぐに弾けさせた。

「お、おお、これは……こんなことが出来るほけもんが、何匹もいるのかね？」

「ええ、今のは一番弱い技ですから、強力なポケモンが強力な技を使うと、正直、ビル一棟破壊できてしまうと思います」

剣舞積んだガブリアスが地震なんか使ったら……ビル一棟じゃ済まんだらうな。

まあ、もつとヤバいのもいるんだが。

「そ、それは、本当、なのか？」

「ええ、この際、ハッキリ申し上げておくと、ポケモンは人の言葉を理解できるので共に歩む、共存の道を探るしかないと思います。動物とはわけが違いますから」

ライオンが襲ってきたなら銃を撃てば簡単に殺せてしまうが、バンギラスに襲われて銃で撃退できるとは到底思えない。なにより伝説の存在もあるのだから。

「君はどこからその情報を手に入れたんだ？」

「それはお応えしかねますが、あるアプリの事でしたらお教えしますよ」

そう言つて、俺はアプリを開いて市長に見せた。

流石にアプリの事を話しておかない事にはモンスターボールを入手することも困難だし、話したところで俺が損することもない。むしろ、ポケモンを所持する人が増えればポケモンに対する理解も深まって今までの平穏な日常が戻って来るだろう。

「これはどんなアプリなんだ？」

「一言で言うと、神様が作ったアプリです」

「か、神?」

「はい、ポケモンの神様です。情報提供しに来た以上、この事も話しておいた方が良いでしょう。伝説と呼ばれるポケモンもいるんですよ」

「その伝説のポケモンの一体が神様だと?」

「ええ、宇宙すらない空間で生まれ、宇宙を創造した真正銘の神様です。その名はアルセウスといえます。アルセウスは時間と空間、反物質の世界を司るポケモンを生み出します。この神様と三体のポケモンはビルとかそんなちやつちい問題じゃないです。世界そのものに関わるものです」

市長の顔がどんどん青くなつていくのが面白い。もう少し脅しをかけてみるか。

「しかし、この四体は危険度は低めです。逆鱗に触れるようなことが無ければね。まあ、ポケモンを現れるようにしたのはこの神様なんですけど人間に協力的ですし。ただ、問題としては、九州地方に居るはずのグラードンとカイオーガですね」

「グラードン? カイオーガ?」

「今は眠りについていてる筈ですが、起きると九州が沈没してしまうかもしれないです。それか九州は中国や韓国と陸続きになるかも」

グラードンとカイオーガはヤバい奴なのだ。何がヤバいかつて二体ともが喧嘩し

合っていて人間の聞く耳を持たない可能性が大なのだ。レックウザが現れなければどうにもならない。

まさか、伝説のポケモンにその辺のポケモンがたいあたりでもしてゲームの様にダメージを与えられるわけがあるまいし。

市長は容量オーバーなのか思考が停止したようだった。

試練

日本沈没の危機!?

という吹き出しが出ていそうなくらい思考丸見えの市長が再起を果たすと、声は落ちていた。

「情報の提供を感謝します。まだまだ知っている事はあると思うのでよければ教えて頂けないでしょうか」

「もちろん賃金も出させていただきます」

環境課の霧島さんが後ろからそう言ってきた。

金出すから知ってること全部吐けや！ という事か。だってノーマルモードなんだろうけど顔が怖いもん。

構わないけどね。むしろ賃金貰えるなら喜んでしますとも。

「是非やらせてください」

もちろん快諾した。

それを聞いて父さんはどうしようかと呟っていた。

「父さん仕事は？」

「それがな、謎の生物が出現したので安全が確認されるまでは出勤するなと」

なんというホワイト企業でしょう！ 台風の日でも配達させるピザ屋とは大違い！

父さんは俺が今から情報を喋っている間は暇になるという事か。

あれ？ 元旦なのに仕事あったんだ。去年は家に居たのに。

「そうだ、ポケモン捕まえてきたら？ レアを貸してあげるから。いいよな？」

「ガウ」

「おお、レア、おいで。捕まえるって言ってもどうするんや？」

「このボールを貸してあげる。あと、アプリもとっておいて」

俺と父さんのやり取りを聞いていた優しいお兄さん風の大和さんがなにやらメモをとりはじめた。

「今から記録をしてもいいでしょうか？ ポケモンを捕まえるという事に関して是非

我々も同行したいのですが」

「構いませんよ。海飛はすることとしてき、父さんも頑張つて来るわ」

「うん、ガンバレ。捕まえ方とか教えるね」

アプリを取り、捕まえ方をレクチャーし、レアにも父さんを助けるように言った。伝える事を伝え終えると父さんと大和さんに島風さんが部屋から出ていった。

俺は残った霧島さんに連れられ、霧島さんの仕事机であろうところまで来た。

机の上は綺麗に整頓されていて几帳面な事が窺える。隣の机の人の悲惨な事、悲惨な事。

「あはは、隣りの人は少々がさつでね」

「でしようね」

「まあ、仕事は出来るやつだから。それじゃ、早速知ってることを教えて欲しいです」

こんな机で仕事出来るのだろうか。ああ、外で仕事でもしてるのかな。でもな、整理整頓できない奴は大体仕事できない奴だぞ、俺の経験上は。

霧島さんはノートパソコンを開いて文書ソフトを立ち上げていた。

「えっと、まずは……」

色々話しました。ポケモンの事についてね。三値の事とかは話さなかったけど、威力がある技や有名な技とか、こんなポケモンがいるよとか、市役所の方でも既に情報を集めていたみたいで写真を見せられてこいつはどんなポケモンなのかとか。

あとは伝説ポケモンとかいう日本の危機に関わってきそうなポケモンの話もした。

話すことは山ほどあるため五時間じゃ時間は足りず気付けば夕方になっていた。昼飯はおいしいの頂きましたとも、霧島さんのおごりで。

一時間ほど前に父さんと島風さん、大和さんも帰って来ており、父さんはジグザグマを捕まえたらしい。レアと仲よく遊んでおり、早速チクと名付けたらしい。なんでチク

? 毛がチクチクしているから、らしい。

レアもそうだが安直すぎる気がする。

本人は気に入っている様子だからいいけども。

「お疲れ様でした。今日はこれぐらいで、明日もお願いします」

「はい、お疲れ様です」

島風さんと大和さんは父さんのポケモン捕獲の様子をまとめる作業に入っていて、霧島さんも俺が話したことはまとめたりして報告しないとイケないだろうから定時には帰れなさそうだ。

公務員は大変だよな、こういう時。興味本位で聞いてみたら夜の一時に呼び出されて一睡もしてないらしい。そしてこれからの残業である。死なないよな？ 台風の日も配達させるピザ屋も真っ青だわ。

さいみんじゆつ掛けて欲しくなったら言うてね。さっきムンナいたから。目を閉じたら秒で寝そうだけでも。

自宅へ帰宅した俺はテレビを見ていた。

本日二度目の記者会見だ。一度目は朝の7時くらいに行われたが、その時はまだ対応

が出来ないのでなるべく危険を避けて自宅で待機するような事しか言っていないなかった。そして、今会見が始まったのだが。

「昨日、突然出現した生物について現存するなどの生物とも異なる事が分かりました。そこで、大きな枠組みとして新生物をポケットモンスターと呼称することにしました。略称としてこれからはポケモンと呼ばせて頂きます」

報道陣がフラッシュを一齐に焚く。

俺が話した内容が早速伝わっていたらしくどんどんと話されていく。

結局、記者会見の九割は俺が話したことだった。しかし、強力な技があり危険な一面があるということは伝えられたが伝説のポケモンの様な明らかに国民の不安を煽るような事は公表されなかった。

記者会見の中では記者からの質問に、「海外ではポケモンなる生物は発生しておらず、諸外国から研究等の申し出があるという事を聞きましたが」というのがあった。

それに対しては、「自国内で調査を進めるのでお断りしています」とのことだった。本件は俺が話した内容が重要視されたらしくポケモンをまさしく生物兵器に利用されるのを恐れた政府が日本としては強気の姿勢で断ったのだ。

それでもポケモンを手に入れようとする輩はいるようで、隣の国へと密輸しようとした船が沖合で謎の現象によって大破、航行不能により日本の最寄港に助けを求めるとし

なくなり事件が発覚した。その周辺では謎の赤いオーロラが観測されたそうだ。

仕事の速さには感心するがアルセウスの事だからその手の対策はしているという事なのだろう。神様の目を盗むことはそうそう出来る事じゃない。

会見が終了し、スマホのストアを開いてみると早速おすすめのアプリにポケットモンスターJの文字が。ダウンロード数は既に500万を超えていた。

「すげえ」

世界初のポケモントレーナーは俺だけだな。

お金の話

今日も今日とてお話しタイム……

「それで、これはどういう機能でしょう?」

「それはですね」

眼の下にクマを作り、満身創痍の霧島さん。あの日から4日がたち俺は変わらず情報を搾り取られていた。

もたもたしている内に死者がでてしまったり、自衛隊が出動したりとポケモンに対する感情がマイナスに振れかけているのが気がかりだ。

しかし、暗い話題だけではなく、ポケモンが人を助けたという話題やアイドルのマスコットの様になっているポケモンが居たりする。ヒメグマという見事なチョイスをしていた。進化した時が見ものだな。

「進化というものは現在確認されていないのですが、本当にそのようなことが起こるのですか?」

「ええまあ、ダーウィンの進化論みたいな、自然に適應するため、とかじゃなくて一定のレベルに達したり特定の条件を達成すると姿かたちが大きく変わりますし、ほとんどの

ポケモンが強力になります」

「学者にその話をしたのですが、ありえないと言われました。しかし、そのような事が起こるのならば興味はある。是非その現場に立ち会わせてくれと」

「うーん、良いですよ。もう直ぐ進化できそうですし」

「ほんとですか!?! ありがとうございます」

実は車で家から市役所までの道のりを往復していたところポケマイルがたまっていたので、どうやら徒歩である必要はなさそうだった。

一步を一メートルの移動に換算している様で、家から市役所まで往復約6キロそれを三日分と朝の分で、二百十マイル溜まっている。それにプラスして車で適当に走ってもらった分とレアとの散歩やバトルするポケモン探しに歩いた分を足すと、四千五百マイル溜まっている。

一日大体百キロほどを車で移動してもらっているので父さんには苦勞を掛けているが、燃料に規制が掛かっている今、俺の為に優先的に回してもらっているお蔭で好きなドライブが出来て満足そうだった。愛車はシルビアである。走り屋ではないが。

レアのレベルは現在15レベル。進化させるとしんそくしか覚えられないので、普通はガーディで四十五レベルまであげてフレアドライブを覚えさせたいのでウインディに進化させるのが望ましいのだが……レアは既にフレアドライブを覚えているため、進

化させても問題ない。げきりんは、まあいつか。

「電車が動いてたらなあ」

「すみません。安全上の問題で再開できないんです。地下鉄にもポケモンが発生してしまつて、全国の鉄道はマヒ状態ですね」

「うまいこと言いますね」

「はい？」

「いえ、なんでも」

マヒ状態ね。まひなおし使つても治りそうになさそうだな。

小学校は丁度冬休みだし、この調子じゃ、暫くは休校だろうけど、俺が頑張れば頑張るほど再開が早くなるというジレンマ。

「それではお昼にしましょうか」

「はい。今日は何食べようかな」

「海飛君は重要人物ですからね。食費は下りてるので高い物食べた方がお得ですよ」

「よし、お寿司にします」

ちよつと高めの食費代ぐらいで日本全体に関わる情報が手に入るのなら安いもんか。

霧島さんに俺の情報の価値を教えて貰うと、この国の経済活動の滞りが解決される時

間が一日早まるごとに100億くらいの報酬があつても政府は損しないんじゃないかといつていた。俺の情報は専門機関が調べるよりも半年は早いだろうから、ざつと見積もつて一兆八千億円かな。だとよ。一兆八千億だとよ。

日本のGDPは最近600兆超えたからもつと吹っかけても大丈夫だと思うよ。と怖い事も言つていた。そんな事したら印象は悪くなるけどね、とも。

そりゃ、食費に高い物頼んで一万円かかっても、痛くもかゆくもないわな。

因みに賃金は日給二十万です。はい、日給二十万です。前世で苦労して一ヶ月働いた時よりも多いです。今世は天国だ！ ありがとう神様、アルセウス様。

「うんま」

「おいしそうですね」

「ふむ。大将、同じのを後二貫」

「はいお待ち」

霧島さんの食費は下りないので遠目に横でお茶を啜っていた。それを見かねた俺は自分の食費代から霧島さんに寿司を食べてもらう事にした。

「悪いですよ」

「いいいえ、最近働き詰めらしいですし。ちよつとくらい高い物食べてもバチは当たりません」

「では、頂きます」

昨日までは丼ものとか安いもの、といっても少し良い奴だったが、それで済ましていたのだ。食費が下りるようになったので寿司屋に来たが、霧島さんは付添いで来ても自費なので高すぎて食べる事が出来ずにいた。さすがにそれはかわいそうなので食べてもらう。

それにしても、いくら市役所の中の食堂とは言え、寿司が食べれるという事はこの中を働いている人がいるんだよな。感謝しないと。

まぐろの中トロを口に運ぶ。うまい。大トロはあまり好きじゃないからな。あぶりカマトロを口に運ぶ。たまらん。トロサーモン。とろける。穴子。ふわふわ。いくら。ほたて……はっ！ レアの食事忘れてた。

お腹いっぱい食べた俺は会計を霧島さんに任せて急いでレアのご飯を用意し、レアをモンスターボールから出した。

「グウア」

「ごめんなさい」

「ガウ！」

「はい。もうしません」

「ガッ」

「どうぞ、お食べ下さい」

「ガウ、ハツハウ」

「レア様。お許しいただきありがとうございます」

「何をしているんですか……」

「ご飯を一生懸命に食べるレアの傍で土下座している俺を見て霧島さんは呆れたような声を出していた。」

俺が悪いからね。許しを乞わないと今レアが怒ると丸焦げにされるんだよ？ 俺マサラ人じゃないから死んじゃう。

ポケモンバトル

俺たちは今、市役所の中庭に出ている。

「いけ、レア！」

「ガウ！」

「ズバツ！」

やる気満々のレアに対峙するのはズバツだ。

「ほのおのうず！」

ほのおのうずは正確にズバツを捉えて閉じ込めた。

「決める！ かみくだく!!」

「グア！」

ほのおのうずにレアは突っ込むとズバツの翼を噛んだまま反対側からほのおのうずを抜け出してきた。

「ズバツ戦闘不能！ 勝者カイト！」

「やったな、レア！」

「ガウ！」

レアとハイタッチをすると、対戦相手に向き直る。

「全く敵わないですね」

「ズバットは空を飛ぶことが出来るアドバンテージがあるんですから、ほのおのうずみに閉じ込められてしまっただめですよ」

「なるほど、勉強になります」

霧島さんはズバットをモンスターボールに戻し労わると、スマホを操作してポケットモンスターJのアプリにあるポケモンセンターに預ける。

審判役兼撮影の大和さんと島風さんは今の様子をバツチリと撮っていた。

「カメッ！ カメカメ！」

「スバツ」

大和さんのゼニガメと島風さんのスバメは何やら興奮した様子で話し合っていた。

霧島さんのポケモンたちは、俺が協力して捕まえたポケモンで、霧島さんのズバットと島風さんのスバメはレアとバトルして弱ったところをボールで捕まえた。

大和さんのゼニガメは河原の石に躓いてこけていたところを優男全開で介抱。謎のコミュニケーション能力を発揮し、いつの間にか仲良くなっていて、ゲットしていた。こんなこともあるのかね。

「かめきち勝負したいのか？」

「カメカメ！」

「そうかそうか、海飛君、勝負してもらってもいいですか？」

「いいですよ」

「かめきち良かったな、勝負してくれるって」

「カメカメツ！」

「ははは、あんまり張り切ると空ぶるぞ」

「カメカメ、カメツ！」

「むっ、僕はちゃんと勉強したからね、指示はちゃんとですよ」

会話成立してるよ。この人たち。

かめきちというネーミングセンスにはあまり触れないで上げて欲しい。

「あの、今度、どうやって会話しているのか教えて貰ってもいいですか？」

「気持ちですよ、気持ち」

「分かりました。いけ！ レア！」

「ガア！」

気持ちなら、絆なら俺たちだって負けてないからな！

「行くよ、かめきち」

「カメツ！」

霧島さんが審判の位置に着く。

「これよりノゾム対カイトの勝負を始める。……始め！」

「もえつきる！」

「アクアジェット！」

炎と水がぶつかり合い水蒸気が生まれる。お互いの視界が遮られた中で指示を出さなければならぬ。

「レア、待機だ」

「かめきち！ あわ！ こうそくスピーン！」

「なっ！ 目の前にほのおのうず！」

マジですか!? あわをこうそくスピーンで飛ばしてきやがった。天才ってこういう人
のことを言うんだろうな……

こうそくスピーンのお蔭で視界は晴れた。

「次はあてろ！ ほのおのうず！」

「こうそくスピーン！」

「ジャンプして上からフレアドライブだ!!」

「ガウッ!!」

こうそくスピーンは直ぐに止まることが出来ない、そして横からぶつかれば弾かれるが

真上から攻撃すればダメージは最小限で済み、地面に叩き付けることも出来る。

「カッ、カメ〜」

「かめきち!」

「ゼニガメ戦闘不能! 勝者カイト!」

「あ、あつぶね〜」

初心者トレーナーに負けるところだった。これだから天才は……

「カメー、カメー!」

「かめきち?」

「この光って……」

ポケモンの世界では見慣れた光景。そして、この世界ではまだ見られていない光景。

「カッメー!」

「おお! かめきち! でかくなったな!」

「このタイミングで進化なの? でも、こうそくスピル覚えるの進化レベルの後だった気がするな」

カメールになったかめきちと大和さんは抱き合って喜んでいた。まさかの進化に霧島さんと島風さんも驚きを隠せないようだ。

それもそうだが、今日、やっとレアの進化をお披露目する予定だったのだから。

学者が進化を見たいと言ってから二日が経った今日、昨日には進化できたのだが、お披露目する関係上今日に取っておいたのだ。

それまでの間、少し空いた時間を使ってズバット、スバメ、ゼニガメを捕まえたのが昨日の事。まさか一回バートルしただけで進化するとはな。

「今のが進化です。撮りました？」

「ああ、なんとか撮れました」

「言ったとおりでしょう？ 姿かたちが大きく、一瞬で変わるんです」

「神秘的と言いますか……」

「そうですね」

実際、生で進化を見るのは俺も初めてなので興奮は隠せなかった。というか、通りで強かったわけだ。レベルじゃあ18レベルのレアと同じくらいじゃんか。

「かめきちのレベルって幾つなんです？」

「えっと、20レベルですね」

「たつか……」

いきなり強いポケモンゲットしてるじゃないですか。しかもゲット方法が仲良くなったからというこれからの関係も心配ないくらいに理想的。これだから天才は……もうよそう。

「それで、バトル、することに何か意味があるんでしょうか？ ポケモンが傷ついてしましますし、この行為自体ポケモンの調査の名目で許可は貰っていますが決闘罪にあたります」

「もちろん意味はありますよ。ポケモンはどうして多彩な、強力な技を覚えると思えますか？」

決闘罪なんて初めて聞いたが、許可は貰っているので問題ない。俺もポケモンが戦う意味なんて考えた事もなかったがバトル中のポケモンたちを見れば火を見るよりも明らかだ。

「分かりません」

「簡単ですよ。バトルするためです。ポケモンバトルはポケモンどうしのコミュニケーションシジョンであり、トレーナーとの絆を深める重要な役割を持っています」

「そんな事が、あるのでしょうか」

「ええ、それにバトルした後のレアとかめきちを見てみてくださいよ、お互いを認め合っている。ボクシングなんかの格闘技に似た物もあるのかもしれないです」

「なるほど、そのように報告しましょう。それに、ポケモンバトルはポケモンの強さや技の威力を知るのいいツールになりますし、見ている方も白熱したバトルには燃えますからね。観光業にもなりそうです」

ポケモンバトルの観光化、政府がそれを進めてくれるのなら願ってもない事だ。ポケモンバトルの大会が開かれれば、俺のポケモンマスターへの道も開ける！

進化

「カメ〜」

「スバ」

「ガウー！」

「ズバツ」

俺たちは市役所にあるベンチに座って弁当を食べていた。

そばではレアたちがポケモンフーズを食べている。

「昼からは京都府大学、畿内大学、大阪府大学、東京都大学、東北山大学、基礎生物学研究所、などなど様々な所から研究者が来ていますので、その研究者の方々に進化するところを見せて欲しいのです」

「結構、多いですね」

「大体五十名ほどと聞いています」

聞き覚えのある大学ばかりで、この国のそれこそ最前線の研究者たち相手に進化を見せるとか、既に緊張してきた。

「それと、内閣からも御一人視察に来られます」

「ええ、聞いてないです」

「すみません。急な事でしたので」

内閣からつて、つまりは大臣が来るつて事だよな？

大丈夫かよ、でもそれだけ俺がしようとしている事は価値があるというか重要つて事か。

弁当を平らげると、市役所にある中庭へと向かった。

そこには既に研究者であろう人たちが集まっていた。中にはザ・研究者な白衣を纏つた人までいる。

そして、数人の人に囲まれている人が一人。テレビでもちらつと見たことある顔の人がいた。名前は知らんがな！

その人は俺に気付くと近づいてきた。

「初めまして。環境大臣の蔵部初義くらべはつよしといいます」

「初めまして、風見海飛です」

名刺貰つたよ。大臣の名刺を貰つちやつたよ。俺は名刺なんてないけど。

「この度は情報提供に感謝します。おかげで初動を誤る事なく迅速な対処をする事が出

来ました。本当にありがとうございます」

「いえ、お役に立てたのなら良かったです。ポケモンには思い入れがありました、人もポケモンも、悲しむような事、にはなつて欲しくありませんから、こちらとしても、出来る限りは、協力させていただきます」

悲しむような事と、出来る限りは、をなるべく強調しておいた。ブラツクな事はしたくないし、ポケモン達を悲しませるようなことをすれば、協力はできない。

「はい、ありがとうございます」

大臣にもその辺は伝わったようだ。ただの子どもだと侮られることはなさそうだ。

「これは東京のお菓子です。お受け取りください」

「どうも……」

人の良さそうな笑みで袋を渡してくる大臣。本当に伝わったよな？ 伝わった？

もしやこのお菓子にも意味があるのか!? 分からん……

単純に差し入れだな。うん。

大臣との挨拶も終わったので、今度は研究者の人達に軽く自己紹介することになっている。

「初めまして、風見海飛といいます。ポケモントレーナーをしまして、今日はポケモンの進化を実際に、皆さんに見せたいと思います」

五十人以上を前にして言うのは緊張したけど噛むことなく完璧に言えた。

研究者さんたちは興味を持ってくれているのかざわつく。

「では、早速ですが、進化させたいと思います。レア」

「ガウ」

レアをボールからだすと、それだけで歓声が上がる。ちよつとした演出も必要なのだ。少し気持ちがいい。

スマホをつけ、ポケットモンスターのアプリを開くと、交換しておいた『ほのおのいし』をバッグからとりだす。

研究者の人達にも見やすいように掲げてみせる。

「これが進化する為の条件を満たす石です。他にも様々な石や、レベル、環境の変化など進化への条件は様々ですが、今日は『ほのおのいし』を使って進化をさせたいと思います」

石の真ん中にはゆらゆらと揺れていると錯覚しそうな炎の紋様が秘められていた。

神秘的な石を、レアの元へと近づける。

「レア、『ほのおのいし』だ。立派になれよ」

「ガウ」

掌に乗せた『ほのおのいし』にレアは前足をポンと置いた。僅かなレアの手の重みは

眩い光に包まれた後、ずっしりと重くなった。

「グルアウ」

「レア！ おめでどう！」

立派な毛並みをそよ風になびかせる、俺よりもでかくなったレアがそこにいた。抱きつけば、モフモフの毛が包み込んでくれて、幸せすぎる。

ちらりと研究者たちを見てみると、嘩然としていた。中型犬サイズが人の身長を超える超大型犬になったんだから、そりゃ驚くよ。

俺だってニメートル近くになったレアに驚いてるのに。それにしてもウインディってこんなデカかったつけ。

「おおきど大木戸君、あれは、どういう原理だと思う？」

「興味深いが……生憎と分野が違うんで。こういうのは七ななかまど竈さんの分野じゃろ」

「そうだがな。さっぱり見当がつかない」

「儂もじゃ。ポケモンの調査をしているが種類だけで今のところ150匹は越えておるしのお……まだデータとして芋環君から送られてきていてる分が確認できてないからそ

れも合わせれば、倍、3倍、もつとかのお」

「そんなにいるのか!! こちらも今回の進化するところを見れたのは大きいな。研究を始めることが出来る。プラターヌ君も働かせないと」

「フランスから来たんじゃないか。助手だったかの？」

「そんなところだ」

「それにしても……」

「研究者冥利に尽きるな」

「そうじゃな！」

俺は研究者達のざわめきを気にすることなく、モフモフを暫く堪能していた。

仲間

今日はウインディに進化したレアに乗って颯爽と……という事はしないで欲しいと言われたので、しかたなくボールに入れて、存分に遊べるちよつとした山まで遊びに来ていた。

「出てこい、レア」

「グワウ」

「背中に乗せてくれないか？」

「グウア」

「よしよし、ありがとな」

レアは俺が乗りやすいように伏せてくれた。乗っていいらしい。

伏せてくれたのは良いんだが、それでも少し身長が足りないせいで乗りにくい。レアのふさふさな毛並みを踏みつけたくもないしなあ。

「せいのおつ、うわっ！」

勢いをつければ乗れると思った時期が僕にもありました。

「いったあ」

「ワウ」

「もういい、どうせ汚れるんだ。家に帰ったらシャワーしてやるから」

勢い余ってレアを通り越して落ちてしまった。

心配そうにみてるレアが別に汚れても構わないという意志表示だろうか、右手で土を搔いて左手に掛けていた。レアの汚れた手を見たら後で綺麗にすれば問題なしと思いき至った。

ということ、レアの毛に足を掛けて背に上がる。

「レア、痛くなかったか」

「グア」

踏みつけた時に力を入れるために踏ん張ったので痛くないか心配になったが大丈夫そう。そもそも、ポケモンは頑丈だからな。

「父さんはどうすればええねん」

「うくん。待つてて」

「はあ、はいはい、好きだけ遊んで来たらええから」

「ありがと、じゃあね」

車で送ってきて貰った父さんをほったらかしてレアは颯爽と駆けはじめた。

俺が落ちないように気遣って走ってくれているんだろうけど、レアの毛を両手でがっ

しり掴んでないと振り落とされそうだ。

でも、

「きもちいい！ レア凄いな！」

「グルア！」

獣道を自動車並みのスピードで走るので次々に景色が流れてゆく。

流石はでんせつポケモンと言われるだけの事はあるな。

途中には、くさタイプやむしタイプのポケモンも多く見かけた。

「レア、止まってくれ」

レアは俺の声に反応してスピードを緩めると止まる。

そこは森の中でも少し開けているところだった。

「早速だけど、メガシンカ試してみようよ」

「グルウ」

「お、やる気満々だな」

レアは一吠えすると一歩前に出る。

俺はスマホを取り出し、今現在のレアのステータスを記録しておく。

レベル20

ほのおタイプ

HP : 76

攻撃 : 61

防御 : 47

特攻 : 55

特防 : 42

素早さ : 51

性格 : やんちゃ

特性 : もらいび

こんな感じかな。

母さんに作って貰った、キーストーンを入れたブレスレットを掲げる。

「行くぞレア！ メガシンカ！」

「グルウ、オオーン」

レアの首に掛けられたネックレスにはめたウインディナイトが輝き、メガシンカの特徴的なDNAのような文様がレアを包んだ白い光の上に浮かび上がる。

そして、光が収まると、そこには毛量増し増しのモフモフ天国が……じゃなくてかっこいいです。

「レア」

「スツゲー、モフモフ」

頭からは二本の鹿の様な角が生え、口元には龍のような二本の長い髭が生えている。足や、尻尾には渦巻いたような火がゆらゆらと揺らめいていた。

なんといつても胸元や、足、その他あらゆる毛が増量されていて、座れば堂々とした神獣の様だ。

中国の伝説にある麒麟に似ているかも。ほら、ビールとかのあれ。

「幸せー」

「グア、グルウ」

あ、そうだった。ステータスを記録しないと。

レベル20

ほのおタイプ

HP : 86

攻撃 : 82

防御 : 67

特攻 : 55

特防 : 48

素早さ : 41

性格：やんちゃ

特性：しんじゅうのころえ

素早さが下がってるな……特性の『しんじゅうのころえ』は聞いた事がないぞ。

ええと……自分の使う物理技の優先度がプラスーされる!?

それ強すぎないか!? 物理技全部先制とれるって事だよな……攻撃も高くなってる

し、厨ポケ確定じゃないか。

でもここは現実だから数値だけで動いているゲームとは違う。つまり、物理攻撃に限って言えば素早さが圧倒的になるので敵に攻撃をさせる暇すら与えずに連続攻撃が出来るという事だ。おそろしや……

「お前、ヤバいな」

「グア〜」

時間が来たのか、レアが自ら解いたのか、メガシンカが終了し元の姿に戻った。

よし、帰ろう。

「ん?」

「グア?」

地面が揺れてる? 地震か!

「イワーク!」

「うそお!？」

「グアー！」

直ぐ近くにイワークが飛び出してきて、その衝撃で俺は体勢を崩して尻もちを着く。そんな俺を庇うようにレアは前に立つ。

それにしてもデカすぎる。

「っー、くそ、レア、ほのおのうずだ！」

「グアー！」

イワークは突然ほのおのうずに包まれて混乱しているようで、その隙を突いてレアの背に跨るとその場を逃げ出した。

イワークのレベルが分からないし、イワークへの有効打がないレアには戦うのは厳しい……いや、『きしかいせい』があったか。

兎に角、ほのおのうず超便利。イワークさんマジこええ。

「ちよつと、休憩……」

「グアー」

「マジ怖かった。凄く怖かった。死んだと思った」

「グアン」

「ふはっ、くすぐったい。ありがとな、レア。助かったよ」

レアがいなけりや死んでたな。そう思えるほどの恐怖が襲った。もしレアを出していなければ、恐怖で足が竦んで、思考が停止して……。

レアが前に立つてくれたおかげであの状況を切り抜けられたんだ。ありがとう。

「レア」

「ん？ まさか……」

レアが振り向いた方向を凝視すると、木が倒れて土煙が上がっているのが見えた。

怒らせてしまったようだ。

「仕方が無い。やるか。このままだと父さんを巻添いにしてしまうし」

「グルアー！」

よし、先ずは弱点を消さなければ。

「レア、イワークにもえつきる」

レアがもえつきるを使えば、体内にある炎が放出され、それがイワークに直撃して爆音と煙が立ち上がる。これでレアの弱点は消えた。

「レア、メガシンカ！」

「グルウ、オオーン」

立派な毛並み、角、髭、その風格。そして、確かな絆が俺を安心させてくれる。勇気づけてくれる。

「しんそくで回り込んできしかいせい！」

「グルア！」

一瞬だった。そう、一瞬。レアが動いたことによる一陣の風に瞬きする間、その僅かな時間でレアはイワークの背後に現れ、きしかいせいを叩きこんだ。

しかし、イワークは耐えきる。もともと物理耐久は高いうえに、きしかいせいはHPが減れば減るほど威力が上がる技だ。今のレアはHP満タンだから威力もでない。

しかし、一撃で削りきる必要などない。

「しんそくで攪乱！ 隙を見てきしかいせいだ！」

イワークは防戦一方。遂に五回目のきしかいせいでダウンした。街で戦った時の様に逃げるのではなく気絶したのだ。

「やったな！ よくやった！ レア！」

「グルア！」

当然だという風に、メガシンカを解くと歩み寄ってくる。

暫くレアを撫でて、褒めていた。気絶したイワークを見てどうするものかと悩むが。

「ゲットしようか」

「ガア」

どうやらレアも賛成してくれてるみたいだ。

モンスターボールを取り出すと、イワークのその巨体には小さなボールをコツンと当てた。

ボールから赤いレーザーが出るというイワークを吸い込み、数回揺れた後にカチンとボールに収まる。

「イワーク、ゲットだぜ！」

「グア！」

お仕事

『本日未明、茨城県筑波山にて、ポケモン的一种であるスピアーに襲われ病院に運ばれる事件がありました。命に別状はありませんでしたが、スピアーというポケモンに二回さされると即死する可能性が高いとの事です。政府は戦えるポケモンを所持している、または所持している者の同行があるうえでの入山のみを許可しています。また、全国各地の山や海、河などにもポケモンを所持していない場合は近づかないようにとの事です』

スピアーはこれで何件目だろうな。害虫駆除の名目でこいつだけ排除されそうな気がするよ。

『次のニュースです。昨日行われました、三人組みアイドルグループ「シャイン」のライブにて、ナナミさんと、ハルカさんが新しくポケモンをゲットしたとの事でお披露目が行われました。ナナミさんはミニリュウをハルカさんはアチャモというポケモンをゲットしたそうです。リーダーであるヒカリさんはポッチャマというポケモンを既にゲットしています』

原稿を読み終えると、聞いた事があるような名前に組み合わせという。いや、そのまんまだな、その三人とポケモンの映像がスタジオへと切り替わった。

『アチャモでしたか、可愛らしいですね』

『ほのおタイプだそうで、火を吐くそうですね』

『それは凄いですね。ポケモンには未知の力がありますからね』

『ナナミさんのミニリュウはかわいさの中にも美しさがあつて……ナナミさんにお似合いですっ！』

『あはは、皆さんはポケモンを捕まえたりされましたか？』

アイドルの手持ちポケモンの話でスタジオは盛り上がりつつあった。

ポケモンのゲット方法はテレビでもよくやっていて、それを見た人がどんどんポケモンを捕まえて行っている。

捕まえ方とは、まず、自分のペットがポケモンになってしまったパターンだ。おそらく日本から原種生物は消え去って絶滅種になってしまっているとの事。その生物たちがポケモンに変わった事で、動物園や水族館は動物や魚たちがポケモンに変わり大参事。ペットとして飼っていた動物たちも何かしらのポケモンになっていた。

ペットとして飼っていた動物たちは飼い主になっている場合、モンスタールボールに入ってもらうだけ。実に簡単だ。

一方、なつかれていないと、ポケモンになったことで知能も力も格段に上がっているので逃げ出したり、余程嫌われていたのか飼い主に攻撃するポケモンまで現れた。

人に危害を加えるようなポケモン達は自然に返されることになっている。捕まえたところで、今までの動物の様に管理できないのが問題点だ。

ずっとモンスターボールに入れたままなど、人の倫理感に背く行為だ。

後は、バトルしてゲットする方法だが、これはポケモンを所持している人だけに進められていて、ポケモンをゲットした場合は双方の合意があればポケモンを持つていない人に渡してもいいとなっている。もちろんそこにはポケモンの意志も反映される。

残りは大和さんがやったように、仲良くなつてゲットする方法だ。これが今のところペットの二番目に多い捕獲方法だ。ハトに餌やつていた人や猫に餌をやつていた人が懐かれてゲットしている人が多い。本来なら迷惑行為にあたるものだがこの状況下ではプラスになっていた。

結局は何が言いたいかというところ、ポケモンの問題に対処しきれないのが現状なのだ。早急にポケモントレーナーの育成が求められている。そのポケモントレーナー育成の第一段階として、役所や警察、消防、救急、自衛隊、民間の警備会社などから生徒を募り、俺が講師をする事になった。

その数、大阪府内だけで取り敢えず五百人。それを47都道府県分。死にそう。

最初に教えるのはまず、百人だ。その百人から筋のいい人を何人か選んで、残りの四百人に教え、さらにその中から優秀な人を選び他の県への繰り返しだ。

俺は最初だけ頑張れば後は教え子たちが頑張ってくれるシステムなので、これくらいなら引き受けようと言ったら、早速明日からお願ひしますと言われた。

後、ポケモントレーナーには政府が免許の様なものを発行した方がいいと言うと、そちらも取り掛かるようだった。

最近は何会でもポケットモンスターに関する法律が粗はあるがどんどんと作られているので、その中にしれつとポケモントレーナーの免許制が明記される事だろう。他にもポケモン関連の保険が出来ていたりする。

相変わらず公務員の方々は死にそうな毎日を送っていらつしやる。

学校は全国で無期限休校となっているので、平日の今日でも市役所に向かう。

冬休みの宿題したのになー。してるよ？ 半分だけど。

今日は父さんが会社の様子見に言っているからレアに乗って通勤だ。ちゃんと許可証を発行してもらいました。無免許ライドだめ、絶対。

その君、動画を取るな。肖像権の侵害だぞ。

「おはようございます」

「おはようございます。なんというか、凄い光景ですね。窓から見えましたよ」

「あはは、それはどうも」

霧島さんが苦笑いしながら挨拶をしてくる。

2メートル弱の犬に乗って通勤なんてありえないからなあ。

「早速ですが、今日は10時に瀬都市立総合体育館で講演してもらいます。内容は海飛君のポケモントレーナーになる上で必要だと思いう知識です。昼休憩を挟んで午後四時までを予定しています」

「うん、まあ、問題ないと思います。一週間で大方の知識を、一週間で一人ずつにポケモンをと言ったところでしょうか」

「ありがとうございます。随分と早いのですね」

「最低限度の知識だけですけどね。全部終わってからもう少し詳しい内容を話す講演会でも不定期に開催しましょう」

「助かります。車でいきますか？」

「いえ、レアに乗って行きます」

「分かりました。今回の参加者名簿がこちらです。資料はこちら。一応、国として、対処法の分かるものと分からない物を纏めて、それらの対処法も教えて頂けると助かります」

「分かりました……これ全部ですか？」

随分と分厚い資料がダンボールに詰め込まれていた。

「今日一日でする必要はないので、今回の講座が終わるまでにして頂ければ」

「善処します」

努めて笑顔を作ったが引き攣っていたかもしれない。

ポケモントレーナー講座

レアに乗って颯爽と街なかを駆け抜け抜け瀬都市立総合体育館へとやって来た。

総合体育館というだけあって結構な広さだ。一般的な小学校の体育館2つか3つ分くらい。

ここで百人ほどを相手に講演するのだ。緊張しかない。

舞台の設置に掛かっている人が何人かいた。俺は体育館を見ると、関係者に案内され控室へとやって来た。

そこには芸能人の様に、テーブルの上にお茶やお菓子が置かれていた。しかもどれも高そうなもの。

「美味しいな。これ高級和菓子の店の奴じゃん。こっちは高級洋菓子店の……まいつか」

気後れして口に入れないのは損だ。そうだ、あるのだから食べても何も問題ない。寧ろ食べないともったいない。

「レア、これ食べてみるか？」

「グア……グア！ ワン！」

「お前、美味すぎて犬に戻っただろ」

「どうやら、レアの好きな味だったらしい。ポケモンには性格に合わせて好みがあるからな。ポケモン用のお菓子とか作って貰う事は可能だろうか。」

「レアは尻尾をブンブン振って、わさびで作られた和菓子を食べていた。攻撃補正性格は辛い物好きだったからな。」

「意外とおいしいな。わさびの」

「お気に召していただけましたか」

「はい。おいしいです。資料の方、今から確認してもいいですか？」

「もちろんです。今日は少し触れるだけだと思いましたが、参加者名簿や参加者の資料の方を優先して頂こうかと」

「はい、まずは、そこからですね」

「俺は参加者名簿に目を通すが……なんと、10歳の子どもが混じっていた。」

「この子は？」

「この子は……大阪府警警視監のお子様ですね。噂を聞きつけたらしくて、流石の警視監も子どもには敵わないのでしようかね。やはり問題がありますか？」

「いえ、子どもの方が興味を持ってきているのなら吸収も早いでしょうし、これからの世代を考えていくと十代のポケモントレーナーも必要でしょう。ただ……」

「ただ？」

「性格に難がある場合は、参加は諦めてもらいます。子どもでも、精神面でしつかりしている子なら問題ないと思います」

「それについては問題ないと思いますよ。既に傷ついたポケモンを保護して、そのままゲットなされたようで、それがきっかけで今回の講座に興味を持たれたのでしょうか」

「そうでしたか……」

真白紅斗君か、捕まえたポケモンは……なるほどね。写真には優しそうな、ストレート黒髪のほんの少し、ほんの少し、決して嫉妬している訳ではないがイケメンの少年が映っていた。

「仲良く出来そうな気がするな……それじゃあ、始まるまでに全部目を通しておきますね」

「はい。私は準備の方に行ってきます」

「分かりました」

始まるまでは後一時間だ、急いで目を通さないとな。

「レア、もうお菓子無いから邪魔をしないでくれよ」

「クウーン」

「そんな声出して無理だ」

なんとか一通り資料に目を通して見たが、五分の一も覚えられてないな。

とりあえず、ポケモンを持ってきている人が五人いた事と、その人たちの事は頭に入れた。
いた。

そして、今は広い体育館の四分の一ほどを使って講演を始めようとしていた。

床にはシートが引かれ、その上に椅子が百席ほどきれいに並べられており、その前には台が設置されて周りから一メートルほど高くなっている。

その台の上に、ざわつく席を見下ろすように上った。

「初めまして、今日から約二週間程ですが、皆さんにポケモントレナーに関する知識や心構えなどを教える、風見海飛といいます。よろしくお願いします」

俺が一礼をすると拍手が起こった。少し気分がいいかも。

取り敢えず自己紹介をしてもらうか。資料には掛かれていないことを一つ知りたかったしな。

「それじゃあ、二週間も同じ空間で学ぶのですし、隣の人の名前くらいは知っておいた方が話しやすいでしょうし、困った事があれば聞けると思いますので、左端のあなたから縦に順番に自己紹介をお願いします。名前、年齢、職業、好きな食べ物をもっとポケモンを捕まえていたらそのポケモンの種族名をお願いします」

俺が聞きたかったのは好きな食べ物だ。さつき気付いたのだが、好きな食べ物がポケモンと一緒にそれだけで仲が良くなりそうな気がしたのだ。もちろん、それだけで決まる訳じゃないが一つの参考にだ。好きな食べ物を、からい、すっぱい、しぶい、にがい、あまいに分けて名簿にメモすることにした。

「布勢美琴です。二十六歳で海上自衛隊に所属しています。好きな食べ物はカレーです。捕まえたポケモンはいません。よろしくお願いします」

最初の人は海上自衛隊の人だった。カレーか、からいものかな。

二十人目で彼の番が来た。一番後ろで大丈夫か？

「真白紅斗まさしろくれとです。十歳です。小学校に通っています。好きな食べ物は、ケーキ、です。捕まえたポケモンはピカチュウです。よろしくお願いします」

小学生がいる事とポケモンを持っている事にか、少しざわつき混じりの拍手が送られた。あまいものとメモをしておく。今度、お勧めのスイーツ店にでも誘ってみるかな。

流石に百人の自己紹介は長く、四十分も掛かってしまった。

次はポケモントレーナーになるうえで心の構え、かな。

初ピカチュウ

「紅斗君、そこじゃあ、見にくいでしょ？ 前の席で誰か変わってくれる人はいませんか？」

「私が変わりましょう」

「ありがとうございます」

名乗りを上げてくれたのは最初に自己紹介してくれた海上自衛隊の人だ。背が高く、180センチ位はありそうだ。

紅斗君と美琴さんが席に着いたのを確認する。紅斗君が軽く頭を下げてくれたので笑顔を返しておく。

「まずは、心構えね。心構えと言っても何と言えればいいのやら。」

「まずはポケモントレーナーになる上で大切な事ですが、ポケモンは普通の動物たちとは違い、意思疎通がある程度できます。例えば、レア出てこい」

「レア」

「ジャンプ、右に回って、左に回って、しんそくで皆の後ろに」

俺が指示を出せば、レアはその通りに動いてくれる。犬であれば動きをつけて指示を

出すことで理解してくれるが、ポケモンたちは言葉だけで理解する。

しんそくで後ろに瞬間移動したので場はざわつく。

「戻っておいで」

次の瞬間には俺の隣にレアが現れる。実際にはちゃんと皆をよけて迂回ルートを通っているんだけど、速すぎて静かすぎて気付かないのだ。

「今のであれば、ハンドサインでジャンプとか、回転するとかは犬でも出来るかもしれないけど、しかし、この子は人間の言葉だけで指示を聞きました。それに……レア、お前、昨日の夜ボールからでてこっそりおやつ食っただろ」

「グア!? グア! ワウ、クウーン」

「はあ、まあいい、後で買ってやるから」

「ワフツ!」

「ね? 人の言葉を、理解しているでしょう?」

人でない生物が、人の言葉を理解しているという事に混乱しているのかざわめきが大きくなる。俺はモフモフを堪能しながら続ける。

「だから、ポケモンとの関係はペットとの関係じゃない。パートナー、相棒として、良き理解者としてそばに寄り添い合っているいい関係を持つてほしいんです」

何人も領いてくれているのが見える。紅斗君もピカチュウとの実体験があるからか、

よく分かるといったような表情で頷いていた。

取り敢えずこれだけは守ってほしいな。

「質問はありませんか？ よし、それじゃあ、ポケモンのタイプ相性について話していきます」

タイプ相性について話していく。これは基本中の基本だから覚えて貰わないと困るな。

タイプの相性を解説するのに三十分、質問に答えるのに三十分。ここに来ているのは大人たちが殆どなので、小学校みたいに分からなくても面倒だから質問しないなんて事はない。

さつきは、呆気にとられていたみたいだが、調子を取り戻した今はどんどんと質問されて気付いたら三十分たっていた。

次にタイプごとの代表的な技を話すのに一時間ほど、質問に三十分。それで取り敢えず昼休憩とした。疲れる……。

弁当がみんなに配られ、俺も弁当を食べようと控室に戻ろうとするが、あまり馴染めていない紅斗君が目に入った。まあ、そりやそうだよな、大人の中に一人小学生じゃ、気後れするし話題も合わないだろう。

俺は急いで控室に弁当を取りいき、紅斗君のそばへと行った。

「一緒に食べてもいいかな？」

「え？ うん、うん」

「ありがとう」

紅斗君は椅子に座っていたが俺はないので床に座ると慌てて椅子から降りて床に座った。そういう優しさには感心する。

「いただきます。ポケモン、もう捕まえたんだね」

「うん、けがをしているところを助けたらね、居つかれて、テレビを見ていた時にモンスターボールを指さすからモンスターボールを出してあげたら自分から入っちゃったんだ」

あはは、と乾いた笑い声を漏らしていた。随分と懐かれたようだな。

「先生のポケモンもカッコいいね」

「先生って……海飛って呼んでくれたらいいから」

「うくん、海飛、さん」

先生とか呼ばれるは嫌だな。なんかこう、むず痒いっていうか、恥ずかしいっていうか。

さん付けなのも納得いかないが。先生よりはマシか。

徐々に友人のような関係になればいいや。

「それでいいや。レア、カッコいいでしょ」
「うん！」

キラキラと輝く好奇心に満ちた子どもの目、眩しいな。

「そうだ、レアと紅斗君のピカチュウも一緒にご飯食べない？」

「いいね！ 出ておいで、ピカチュウ！」

「ピッカ！」

「レアも出ておいで」

「グア」

「ピカピイカ」

「グルウ」

生ピカチュウだあ！ 感激。

「紅斗君はピカチュウに名前を付けないの？」

「うん、名前を付けようとしたら嫌がられてね」

「どんな名前を付けようとしたの？」

「ピカ助とか、ピカ次郎、後はピカ衛門！」

「ピイカピ……」

「あはは、やめた方が良くもね……」

ピカチュウが呆れて首を横に振ってるし、俺もそれはないと思うな。

「そうかな……」

「ポケモンフーズ、ピカチュウの分も分けてあげるよ」

「そんな、悪いよ。僕はちゃんと持ってるし」

「いいのいいの」

俺はポケモンフーズと皿を取り出してピカチュウとレアの前に置く。律儀にお座りしているレアによし、と合図を出すと食べ始めた。

「それよりも、甘いもの、好きなの？」

「うん、チョコレートケーキとかショートケーキとか好きだよ」

「そっか、今度おいしいスイーツ食べにでも行かない？ 紅斗君とは話が合いそうだし」

「いいの？ 僕も海飛さんと、もっと話したい」

スイーツで釣る作戦は大成功だな。

それにしても、寡黙な所は似てないんだな。それもそうか、被るところがあるだけで全くの別人なんだし。

お誘い

「次は、ポケットモンスターJのアプリについて話していきます」

紅斗君との楽しい昼食もピカチュウを愛でる休憩時間も終わり、授業を再開した。

今度はアルセウスが作ったアプリについてだ。これは話すことが多すぎて、質問を挟みながら、二回の休憩を挟みながら進めていたのだが、気付いた時には後十分となっていた。

「まだ、このアプリについて話すことはあるのですが、今日はここで一旦終わりにします」

後五分。腕時計を見て呟く。

「宿題、と言ってはなんですけど、このアプリを触って疑問に思ったことや分からない事などを纏めて、明日質問して下さい。そこから明日は始めましょう」

「こんな感じの締め方でいいかな。
」では、ありがとうございます」

時間の五分前に終了し、俺は控室へと戻った。

喧騒が戻って来たのを控室に行く途中に感じて、紅斗君はまだいるかなと、ふと思っ

た。

俺がこんなにも彼の事を考えているのはある人物と似ているからだ。

控室でお茶を一口、口に含むと帰宅の列に混じっているであろう紅斗君を探した。

「あ、いたいた、紅斗君」

「海飛さん、今日はありがとうございます。明日もよろしくお願いします」

「まあ、仕事だからね」

「僕とあまり変わらないのに凄いね」

「まあ、成り行きというかなんというか。さつき、今度スイーツ食べに行こうって約束したでしょ？ でも、連絡先を聞き忘れたなって」

「あ、ほんとだね。LINEでいい？」

「うん……よし、ありがと、また家帰ったら連絡するよ」

「うん。ふふっ」

「どうしたの？」

「あんまり、こんな風に誰かと遊びに行く約束なんてしないんだ。なんだか楽しくて」

「ご期待に添えるように、おいしいスイーツを用意しておくよ」

「ありがとう。楽しみにしてるね」

楽しそうに笑う紅斗君はシルバーのBMWを視界に入れると迎えが来たみたいと

言った。そういえば警視監の息子だったな。

「じゃあね。また明日」

「また明日」

窓を開けて車から手を振る紅斗君に手を振りかえして見送ると控室に戻った。

よくよく考えたらおいしいスイーツでも食べに行かない？ とか、そのために連絡先

交換しようとか、まるで俺が口説いてるみたいじゃないか。実際そうなんだろうけど。

ま、いいか。それよりもレアのおやつ買いに行かないと。

カラムツチョコでも買って帰るか。

「ただいま」

「おかえり。先生をしてるんだっけ？」

「まあ、そんなところかな」

「大変やね。それにしても海飛ちゃんの自立が早くてお母さん寂しいねんで」

「そんなこと言われてもな」

その辺のサラリーマンより稼いでるからな。今だけは。講師を引き受けたら十萬上乗せされたし、日給三十万とか年収一億超える計算だからな。その辺の社長並みだよ。

でも、それもこの騒動が収まるまでだから。収まったら収まったでのんびりするもよし、政府への貸しを使って何かするもよしだな。

どっかの競技場とか使ってポケモンバトル大会を開きたいとは思ってるけど。

「レア、出てこい」

「ガウ」

「ほら、おやつ」

「グアー」

食いつきいいな。人間の食べるものだけどポケモンだから大丈夫だろ。あげ過ぎないようにはしないと。

「それにしても、お前アカいから部屋が三分の一くらい埋まるんだよな。モフモフだから許すけど」

俺はカラムツチョにがつついていてるレアにもたれかかると枕代わりにした。

スマホを取り出すと紅斗君に家に着いた事と、いついけるかの予定を聞いておく。

早速返信が来た。どうやらいつでも空いてるらしいので講座が休みになる日曜日に
行こうと伝えた。

了解のスタンプが押されたのを確認すると画面を閉じる。

「毛繕いでもしてあげようか？」

「グルウ」

カラムツチョで汚れた口周りを拭いてやり、毛繕いを始める。

いかんせん毛量が多いので疲れるが同時に癒されるので三十分くらいしてやった。レアは気持ちよかったよう目で目がとろんとしている。暫く寝ておいていいぞと言うと直ぐに眠ってしまった。

「お母さん、風呂入ってくる」

「まだ沸かして無いから、少しだけ待って」

「はい」

十分程、風呂が沸くまでの時間をテレビを見て潰すことにした。

『依然、ポケモンによる混乱は続いており、営業を再開する店や疎らながら出勤する人もいるなか、公共交通機関はバス、タクシーを除いて未だ運行できておりません。鉄道は線路上にポケモンが飛び出してくる事例が頻発している事から運休。航空便はポケモンが縄張りを作っている空域が出来てしまい、ポケモンからの攻撃を受ける事件が起きたため現在安全を考慮して欠航しているとの事。船舶に關しても同様で、縄張りを作ったポケモンに攻撃される事件が起きたため、全国各地で欠航となっています』

大変だあ。

アニメのポケモンだと船とか飛行機とか電車とか普通に運行できていたけどあれは

何故だろうな。

ポケモンの縄張りを侵さない様に考えて運航していたのだろうか。

暫くは問題が解決することはなさそうだな。

「お風呂、沸いたで」

「うん、入ってくる」

レアが小さい時なら風呂と一緒に入ったりもしたんだが、今じゃあいつだけで風呂場が埋まってしまうな。

だから最近ではレアを洗うのは外でなんだよな。

「気持ちいい……」

さっさと解決していかないと、水道とか止まり出したらヤバいな。もう少し頑張らな
いと。

「俺、もう少し鍛えた方が良いか？」

腹筋を触ってみるが筋肉というより程よい肉が指を押し返してくる。

レアに乗って山を駆けていた時に思ったんだけど、思ったより体力も筋力も使うんだ
よね。

次の日は筋肉痛になってしまったからな。

今日だって、遅めに走ってもらってはいたけど結構疲れたし、ポケモンだけじゃなく

てトレーナーも鍛えた方がよさそうだな。
マサラ人になるつもりは毛頭ないが。

スイーツ

今日は珍しく雪が降ってきた。

「おはよ！」

「おはよう」

ポケモントレーナー講座は順調に進み、必要最低限の事を教えて行っている。月曜から始まった講座は、土曜日で一区切りをつけた。次週はポケモンを一人一匹ゲットする、パートナーを見つける大事な週だ。

まだまだ忙しい日が続くが、今日に限っては息を抜かないとな。

「大阪市内にいいところがあるんだ。こんな中だから営業中の店を探すのに苦労したよ」

「そうだね。やっている店の数も随分と少ないし、外に出る人も少ないから店を開けてもお客さんは来なさそうだよね」

「まあね。それじゃあ、行こうか……何で行く？」

カッコ悪すぎる。お勧めの店が営業してなくて、店見つけるのに精一杯になって移動手段考えてなかった。お父さんは会社に用事があるっていうし、紅斗君の家は意外と近

かったようで自転車で集合場所まで来たからな。

自転車で行くには遠い、かといって自動車は使えない。となると……

「出てこい、レア」

こうなったらレアに頼むしかないな。

「レア、背中に紅斗君と一緒に乗せてくれないか？　お願いします」

「グウ、グア」

「ありがとうございます。紅斗君、レアが乗せてくれるって」

レアに感謝を述べて、伏せてくれたレアに跨ると紅斗君に手を伸ばす。俺よりも身長低いから一人じゃ乗れないだろうし。

「い、いいの?」

「いいのいいの。ほら」

「うん。えっと、失礼します。うわっ」

手を掴んだ紅斗君を一気に引き上げるとレアの背に乗せる。俺たちが乗った事を確認するとレアが立ち上がり、紅斗君は驚いていた。

「俺の腰にちゃんと捕まってね。落ちたら危ないから」

「う、うん。僕、怖いので少し苦手なんだ」

「だって、レア、今日は安全運転でな」

「グルウ」

紅斗君が俺の腰に抱きついたのでをしつかりと確認するとレアの毛を束にして握った。こんなど何か乗る用の装備を考えないとな。馬用のじゃかわいそうだしなあ。

「グアー！」

「う、うわっ」

「大丈夫だから、落ち着いて」

それにしても、イケメンな顔の割に行動がかわいいな。こんな弟がいたらなあ。

いつもは時速60キロの所を今日は時速50キロほどで走ってる。信号はちゃんと守ってるよ。ちなみにレアは車道で走るようにと言われてるから車道しか走らない。歩道だと歩きだな。当たり前だが。

車の中からビックリして見ている人たちに手を振りながら大阪市内を目指した。

俺を乗せるのにも慣れて最初に比べれば大分安定しているんだけど、紅斗君は終始目を瞑っていた。

目的地の洋菓子店について。レアが止まったにもかかわらずしがみついてくる紅斗君を宥めて、店内に入る。

店内はスイーツを並べるショーケースと、奥には飲食が出来るように席が設けられている。ショーケースも席もがらがらで本当に営業しているのか疑ってしまう。

「すみません、二人、ここで食べたんですけど」

「はい、生憎と今はこんな状態なので、種類は少ないですけどゆつくりとしていつてくださーい」

女性の店員さんが出てきて席に案内され、メニューを渡されるが、頼めないものはシールで隠されていた。

それも結構な数が消えて、スイーツは四種類、飲み物は三種類になっていた。仕方が無いか。

「何食べたい？」

「うーん、シヨートケーキ、かな」

「飲み物は？」

「オレンジジュースにするよ」

「すみません、シヨートケーキとイチゴのタルト、オレンジジュース二つお願いします」
「分かりました。少々お待ちください」

俺はイチゴのタルトにした。ケーキよりもタルトのほうが俺は好きなんだよね。

「紅斗君は家で普段なにしてるの？」

「ゲームしてたかな。後は読書と、嫌々だけど勉強も。でも最近ピカチュウとよく遊んでる」

「へえ、何して遊んでるの?」

「frisbeeとか、ボール投げとか、積み木で遊んだり。ピカチュウかわいいんだよ。ほら」

「ふふつ、ほんとだ」

「これも」

「ぶつ、ふはは、なにそれ、凄い事になってる」

紅斗君はピカチュウの写真を次々に見せてくるがその中でも、思ったよりも頑丈な積み木でベッドを作りぶかぶかのサングラスをかけて、カメラに向かってポーズを決めて寝転んでいるピカチュウは傑作だった。紅斗君がパラソルを写真に合成するもんだからビーチで寝ているようにしか見えない。ああ、腹いてえ。

「お待たせしました。ショートケーキとイチゴタルト、オレンジジュースです」

「お、来た来た」

「おいしそう」

ショートケーキはシンプルにイチゴとクリームで仕上げられたもの、イチゴのタルトはタルト生地の上にたくさんさんのイチゴがのって、ゼリーとジャムでコーティングされていて輝いている。

紅斗君はフォークでショートケーキの先を掬い上げると口に運んでおいしそうに頬

張る。

俺もタルトの先にフォークを入れて、サクツという生地音を楽しみながら口に運んだ。イチゴは甘酸っぱくて、タルト生地はサクサク、カスタードクリームの甘さがイチゴのジャムとよく合っていておいしい。

「おいしいね」

「うん、おいしい。ねえ、ショートケーキはどんな味？」

「クリームが濃厚で、イチゴが甘酸っぱくて、おいしいよ。食べる？」

「いいの？」

「いいよ。はい、あーん」

「く、紅斗君、自分で食べられるから」

「そう？ お母さんはこうやって食べさせてくれるけど」

紅斗君は世間知らずなのかもしれない。知っていたなら男相手にあーんなんてまかり間違ってもしない。

「それは、お母さんだからでしょ？ 友達とかにはしないんだよ」

「そ、そうなの？」

「うん。おいしいね」

余程衝撃を受けたのか固まっている紅斗君の皿から一掬いし、食べた。確かに濃厚な

クリームだ。

お返しにイチゴタルトあげないとな。

「紅斗君、イチゴタルトいる？」

「うん、食べてみたい」

「はい、あーん」

「あーん……つて、からかわないですよ！」

「く、ふふつ、いや、つい」

途中まで違和感なく口を近づけるからそのまま食べるんじゃないかと思った。けど、途中で気付いて頬を膨らまして怒るとか笑うしかない。

少し怒った紅斗君はザクツとタルトを掬うと口に運んだ。次の瞬間にはもう機嫌は直っていたみたいだけど。おいしかったようだなにより。

しかし、こんな楽しい時間に水を差す奴もいるもんだ。

「えっ？ 電気が消えた？」

「停電か？ 今日は晴れてるし……まさかポケモン？」

恐れていた事態が起こったようだ。電気が止まるなんて冗談じゃない。

日本の苦難

停電

年が明ける。

2020年はオリンピックピックもあるし忙しくなるなど、テレビのカウントダウンがゼロになったのを見てワインを一口飲もうとする。

「ん？」

しかし口に運ぼうとしたワインは手になかった。

そして目の前に広がるのは長閑な風景に見た事もないような生き物たち。

私は混乱する頭でどうなっているんだと考えるが、なるほど、これは夢だなと早々に結論付けた。

長閑な風景は都会へと一変し、そこでも見た事のない生き物たちが人々の暮らしに溶け込んでいた。

そして、この世の終わりとはこうなのかと、私は次の光景にただただ恐怖した。星が散るその様はとて残酷な美しさだった。

「やはり、夢か」

いつの間にか眠っていたようで先ほどのやけに鮮明な夢を思い出して記憶に留めておこうとする。忘れてはいけなげな気がしたからだ。

ソファから体を起こして目の前のガラステーブルに置かれた赤ワインを口に運ぼうとして、取り落としてしまった。

目の前のテレビに映るのはカウントダウンではなく、新年を祝うテロップでも、歌番組でも、バラエティでもない。臨時のニュースに全く見た事のない、けれど見覚えのある生き物たちが映っていた。

「まだ、夢の中なのか」

割れたグラスの破片は私を何人も映し出し、毀れた赤ワインの冷たさが足裏を蝕んでいた。

「紅斗君、乗って」

「え、う、うん」

俺たちはスイーツを堪能していたが突然停電したので会計をすぐに済ませて慌ててレアに乗った。

「はい、はい、分かりました。今すぐ行きます」

霧島さんに電話したところ、近畿電力の本町変電所もとまちで異常が起きたらしい。瀬都市は問題ないとの事。

取り敢えず変電所に向かう事にして、スマホで場所を調べるとレアに急いでもらった。紅斗君には悪いけど。

「いやあああー！」

「ごめんね！ 直ぐに着くから！」

必死にしがみつくと紅斗君を離さないように気を配りつつ時速90キロくらいで走っている。ここまで来ると息をするのも前を見るのも苦しくなってくるからフルフェイスのヘルメットでも買おうかな。

車をジャンプで越えて交差点を赤信号なのに突っ切る訳にはいかないからこれまたジャンプで。すげえことしてる。俺、後で怒られそう。

「ああ……」

「大丈夫……じゃないよね……あはは」

放心している紅斗君の頬をペチペチと叩いて気をしっかりさせると、変電所の職員に事情を説明、そして、なぜ停電したのか聞いた。

どうやら予想は正しかったようでポケモンが原因なのだという。

「こちらです」

様々な機械が太い電線で結ばれている中を歩いて進むと、少し先にバチバチと火花が散っているのが見えた。そして今回の事件の犯人も。

「レアコイルか」

レアコイル。でんきはがねタイプでその見た目からも解るように体が磁石になっている。これだけの機械がある中をレアコイルが移動すればそれだけで磁力により不調を来すだろう。

「レレレレ、レレツ？」

「なあ、レアコイル、そこにいると困る人がいるんだ。そこから離れてくれないか？」

「レレレ、レレ、レレツ」

「あー、なんて言ってると思う？」

「僕に聞かれても分からないよ」

紅斗君完全に拗ねてるなあ。

レアコイルは退こうとしてくれないし、何言ってるか分からないからどうしたものか。

「レレツ！」

「ああ！ ちょっとタンマー！」

いきなり機械にたいあたりしだして、でんきショックまでし始めた。一体何がしたい

のやら。

「あの、レアコイルはここで何をしていたんですか？」

「さつきまでも同じように機械にぶつかったりしてました。危ないので電力の供給は止めたんですが」

職員の人に聞いても何かは分からない。どうしたものか。最悪ポケモンバトルでゲットする事になるが、何か伝えたいことがあるようだし無理やりゲットしたくもない。

「出てきて、ピカチュウ、何かわかる？」

「ピカ、ピカピカ？ ピカッチュ」

ナイス紅斗君。でんきタイプ同士だし何か話分かるかも。

ピカチュウはレアコイルに一生懸命話をしてくれた結果、機械と機械の間を指さした。

「ピーカ、ピカピ、ピカ！」

どうやら機械の間に何か挟まっているらしい。

「この先に入れます？」

「危険なのでやめた方が……私が見てきます」

職員の方がピカチュウの案内に従って先に進んで行った。暫くすると腕にコイルを

抱えて戻って来た。

「どうやらこの子が挟まっていたようです」

「リリッ」

「レレレ、レレツ」

「ピカツチュウ」

「よかつたな」

レアコイルとコイルはピカチュウの周りをぐるぐると嬉しそうに回っていた。

レアコイルとコイルを返してやり、俺たちも変電所を後にする。

「解決できてよかつたです。でも、機械があのままじゃ、まだ、難しそうですね」

「いえ、あそこだけなら、まだ何とかあります。本日はありがとうございました」

職員の方に見送られ、レアに乗って瀬都市まで帰って来た。

帰りは比較的ゆっくりで、紅斗君も周りを見るくらいには余裕があった。

「えっと、今日はごめんね。楽しんでもらおうと思っただけど怖い思いさせたし、事件に巻き込んだじゃったし」

「別に。いいよ。でも、またどこか連れて行って欲しいな」

「よろこんで、次の希望でも考えておいて」

「うん。今日は楽しかったよ。またね！」

「また！」

紅斗君は自転車に乗ると帰って行った。俺もレアに乗ろうとしたが。

「イタツ!?!」

「グルウ」

え？　なんで？　もしかして乗り物代わりにした事怒ってる？

「えつと、ごめんなさい。お菓子買って帰りますので、許してくださいませ」

「グル」

「すみませんでした」

「ガウ」

「ありがとうございます」

なんか、最近レアが偉そうになってる気がする。俺もレアを乗り物みたいに使ったから、強く言えないんだけど。

会議

「それで、どうなっている？」

「見た事もない生物が街で溢れ返っています。犬や猫に似ているが全くの別種や、三十センチを超える芋虫に巨大な蜂型の生物もいます」

「それで？」

「街中がパニックです。謎の生物が車道に飛び出すなどして事故も起きており、生物の毒を貰ったと思われる人も何名か病院に運ばれています」

「新年早々、なんだというのだ……」

私は頭を抱えた。あの光景が脳裏に焼きついたまま離れようとはしない。そこにいた生物が今この日本に出現したのだ。

あれは、夢なのか？

「この生物たちは日本に現存していた生物と入れ替わるようにして現れたようなのです。私の飼っている犬が全く別の見た目になりましたから。ただ、記憶は引き継がれている様です」

「そう言う事か」

「それで、ですね。何と言いますか。普通の生物ではないんですよ」
「とうとうと？」

「電気を発生させることが出来たんです。私の飼っている犬が」

「はあ？」

「他にも火を吐いたり、水を出したりと、凡そ地球の生物ではありえないことが出来るものもいるとの事です」

「勘弁してくれ……取り敢えず全員集めてくれ」

「はい」

胃薬を飲むと椅子に凭れかかって天を仰いだ。全く、これが夢ならさっさと覚めてくれ。

「あ、あと」

「なんです？」

「これは現実か？」

「頬を掴ってみたらどうですか？ 少なくとも私が試した結果は夢ではありませんでしたよ」

苦笑して出ていく秘書の背中に溜め息を吐いて、頬を掴るが覚めない夢に苛立つしかない。

いや、もう認めよう。これは現実なんだ。

新年一発目の閣僚会議が緊急の閣僚会議とは全くめでたくないな。

「早速ですが、在来種と入れ替わるように現れたこれらの生物について現時点で分かっている事を纏めた資料を配布します」

補佐官がこの二時間程度で資料を作り上げたのだが、それだけしか時間が経っていないのだから分かっている事などが知れている。しかし、たった一部であろうその部分だけでも十分な話し合いになるほどの危険性が含まれていた。

「毒の成分が分からない？ 生物毒であれば毒の成分は分かるんじゃないか？」

「照会した結果、不明との事です」

「となると、治療も出来ない」と

「はい」

農林水産大臣の川端^{かわばた}大臣の発言には無理があるだろう。なんせ、地球の生物かどうか怪しい、というか地球の生物ではないだろうからな。

虫型の生物に毒は含まれているようだな。この資料を見る限り。

「次に、火、水、電気といったものを発生させることのできる生物も存在が確認されてい

ます」

「仮にその生物が暴れ出したりしたら一般市民どころか警察官も手が付けられないんじゃないのかね？」

「その可能性は高いと思われます」

「そうだな、自衛隊には災害派遣、の名目で対処にあたつてもらう事になるか」

「災害ですか。総理はこれを災害と？」

「災害以外に思い浮かばんからな」

「災害以外になんというのだ。この生物たちのお蔭で日本中が混乱しているのだから十分に災害だろう。それも一過性の台風や豪雨、豪雪にくらべて更に質が悪い。」

防衛大臣の柵木大臣は忙ませしくなるだろうな。いや、ここに居る全員が忙しくなるか。

「次なんです、人型の生物も確認されていとの事です」

「人型!？」

「はい、しかし言語は持ち合わせていない様子です」

「それはやつかいだな。人型だが人ではないか……」

人は人が動物か、美しいか醜いか、有益か有害かで主に判別している。それも、人型となつてくれば人々の倫理が嫌悪感を抱きにくくさせる。

つまり、暴れるような生き物だった場合に処分ににくくなるということだ。仮に処分

したとしても世間の目は厳しくなる。

「次は……幽霊です」

「何を言っているんだ？ 馬鹿な事は言わないでもらいたい」

「それが、幽霊に似たような生物が確認されているんです。実態は全く持つて不明ですが一生命体として確立している様なのです」

「という事は何か？ 神出鬼没で壁でもすり抜けて人を襲うのか？」

「壁をすり抜けているところは目撃されています」

「なんとということだ……」

場が静まり返る。日本の未来が危ぶまれる事態かつその対処法に見当がつかない。当然こんな事態に対するマニュアルなどないし、想像すらしていた人物はいないだろう。と思っていたが案外そう言う人はいるもんだ。

「こういう事態の場合は情報収集が先決じゃないか？ 国民には外出を控えるように会见を開く。生物学の専門家を大学や研究機関から招集して有識者会議を開き、各々に協力を求めたらどうだ？」

「阿戸副総理の言う通りで取り敢えずは行こうか」

阿戸副総理は冷静だなと感心していたが……その後に「こういうの漫画とかラノベとかの展開みたいでワクワクしてしまった。この状況に似た妄想をしておいて良かった」

という言葉聞いて何とも言えなくなった。

あなたの妄想の中で何回日本は危機にさらされているんだろな。

朝の七時に記者会見を行う事を決定し、情報を出来る限り集めたが公表できるような内容はたいしてなかった。

しかし、昼飯を掻きこんでいる最中に希望の光が見えた。

「総理、先程大阪府瀬都市役所からこの生物たちに詳しい少年を見つけた。という報告が来ました」

「少年？」

「はい、年は12歳で小学生です。我々でも把握していない様な内容が書かれていたのでもしかしたらと思います」

「直ぐに報告書を見せろ」

「はい、こちらです」

……この生物はポケットモンスター、略称をポケモンと少年は呼んでいる。アプリ、伝説、神話、種族名、技、タイプ……

「この少年を最重要人とする。最大限の待遇をし、最大限の協力を得るんだ」

「はい！ 今すぐ伝えてきます」

私はこれを少年の妄想だ、などと言って一蹴するような無能ではない。いったい何者なんだ、この少年は。しかし、これで情報がもつと集まる。

会議2

希望が見えても忙しさは変わらない。寧ろ提供される情報量が多くて、情報の纏め、どれを公表するか、これらの情報をどのようにして対策に活かすか等、更に忙しくなった。

各省庁はポケモンによる被害の算出と対策、取り敢えず、日本で一番長い一日になったような気がする。

THE LONGEST DAY OF JAPAN なんちゃって……はあ。こんな事言ったら余裕ありそうですね。もっと頑張ってください。なんて言われるから絶対に言わないけど。

「総理、アメリカから支援及び共同調査の申し出が来ていますが」

「今回ばかりは断らないと大変な事になる予感がするんだ」

「そうですか、では、そのように」

「ああ、他の国は？」

「中国、ロシア、フランス、イギリス、韓国、ドイツ、スペイン、イタリアの八か国が同じような申し出を……」

「随分と多いな……国連から圧力がかかる可能性もあるか……」

これは外務省で死人が出るぞ。仮にあの少年の言う事が本当だとすればこの生物が他国に渡るのがどれだけ危険な事か。それに、今この世界には神と呼ばれるポケモンがいる可能性が高く、見張られている可能性も高いという。つまり、神の機嫌を損ねるようなことをすればどうなるかも分からん。

さわらぬ神にたたりなしってか？ 十分に崇られているよ、この状況は。

「やあ、ミスター明賀^{あけが}。今回の件、ステイツは協力を惜しまないつもりだが、再考の余地はないかね？」

「スペインサー大統領、すみませんが、自国内で解決しますので」

「そうはいつても早くに解決しないと日本の経済が回らないだろう？ そうなると世界の経済も回らなくなる」

「承知していますよ。ですから、早期の解決を図っているとこです」

「そうかい、いつでも相談に乗るから、決まったら教えて欲しい」

「ええ」

電話を切ると溜め息を吐く。タイムリミットはどれくらいか。恐らく半年と言った

ところか、いや、もう少し短いかも知れない。とにかく早くに終わらせないと介入してくることは間違いないだろうな。

それがアメリカだけなのか、それとも国連を使つての介入なのか。国連の場合もつと厄介なことになる。暫くは休めそうにないな。

何度目かの閣僚会議。

例の少年が危惧していた事が起きてしまったか。

「昨日、銀行がポケモンによる攻撃を受けました。幸いにも、職員もポケモンを所持していたため、犯人のポケモンを戦闘不能にすることで事なきを得ましたが、このような事態が頻発することは避けなければなりません」

少年の危惧していた事、それはポケモンによる犯罪だ。正直言つて、銃を所持するよりもポケモンを所持するというのは危険な事だ。銃よりも威力があり、多彩な技を使用することが出来る生物を人間の命令でいう事を聞かせる。もちろんそこにポケモンの意志が挟まれるために、出来ない事もあるだろうが、大抵の事は聞いてしまうだろう。

ポケモンは確かに人の言葉を理解できる知能はあるが、人間社会での法律やこれをすれば犯罪になると言つたことは知らない。人を殺すということに関してはいけないと

いうことは分かっているだろうが……いや、それも怪しいか。

それも含めて建物を壊す、物を盗む、といったことはしてはいけないという事を教えてやらなければ、平気でしてしまう。

「警察官にもポケモンの所持が必要になって来るな」

「はい、銃では対抗できないポケモンも多数いることを考慮するとその必要性は出てきます。それに、ポケモンの能力を十全に引き出す、例の少年の言葉を借りるならポケモントレーナーになる必要があると思います」

「そうだな。ポケモントレーナーの育成を彼に頼むか」

「では、私は人選を担当しますか」

「ああ、頼んだ」

「自衛隊の中から何名か選出してもいいですかね？」

「構わん。官民問わずに選んでくれ」

「承知しました」

各大臣は私の言葉を聞いて誰が良いだろうかと少なくとも、数人の顔は思い浮かべているだろうな。だが、それは後にして貰おう。

まだまだ議題が残っているのだから。

「くつくつく、どうなる事かと思っておったが、存外うまくいくものだな。この無法地帯ともいえる宇宙に住む人間にはその代償を払ってもらわなければならない。それにあ奴には特別な力を貸したのだから精々頑張ってくれ。これもポケモン達の、我が子たちの繁栄のためだ」

「しかし、まだ上手くない事も多いの。ここは自然が生み出した自然の法則によつてできているからか法則の書き換えが上手くないのが難点だ。しかし、最近までこの宇宙の膨張を止めていたことを考えると気が楽なものだな。まだこれは第一段階なのだから、最後までこの星には世話になるから大事に扱わんといかん」

「風見海飛、ポケモンと人の共存を目指すがいい、それが私の望む世界だ……おお、お前達、システムの調子はどうか？」

「問題ありませんよ。調整には手こずりましたが」

「こちら問題ないっす」

「我も問題はない。上手く機能している」

「そうか、これから忙しくなると思うが頑張ってくれよ。ま、あんなのに比べればましだと思うがの」

「そうですね」

「あれはもう勘弁してほしいです
うむ。御免被りたいな」

脅威

私は一週間ぶり？ 十日ぶり？ に自宅へと帰つて来た。

自宅と言つても仕事を行う官邸のすぐ隣にある公邸にだが。隣接しているにもかかわらず帰ることすら出来ないのが今の忙しさを物語っている。

「ふう、久しぶりに寛げる……」

「……………」

「誰だ!？」

背後に気配を感じて振り向くが誰もいない。背筋が凍りつくような思いをしながら残っていた酒を一気に流し込むと寝室へと急いだ。風呂に入る余裕すらない。こういう不気味な日には早く寝るに限る。この前、呑気に風呂へ入っている間に人の声が聞こえて来たのだ。誰もいない筈なのに。

この公邸は昔、官邸として使われていて、五・一五事件や二・二六事件の舞台になった場所であり、幽霊騒ぎが噂される場所でもある。私は体験済みなのでここに住む前にバカにしていたのが嘘の様で今ではいちいちビビりながら暮らしている。自宅に帰つて来て休むことも出来ないとは……私邸に住むことも検討しようかな。

ザツザツザツザツ

「勘弁してくれ……」

私は布団に包まりながら耳を塞いだ。ここまでの強烈な現象は初めてだ。

軍靴の音が廊下を響かせてやってくる。誰もいやしないのに。

始めは葉が風に揺られて擦れるほどの音しかなかったものが、次第に耳を塞いでいて

も聞こえるほど大きくなってくる。その足音は扉の前に来ると忽然と消え失せた。

仕事と心霊現象に精神をすり減らされて、明日からどうにかなりそうだ。

「ガッ……」

「ひ、誰かいるのか？」

「ガ……」

掠れた音が部屋に響き渡るので問いたただせば、掠れた返事が返って来る。流石にこのまま無視して寝る訳にもいかないので、豆電球が照らす暗い部屋の中を見渡す。

「ひッ」

見なかつたことにしよう。

私は珍しく寝過ごしてしまった。というより気を失っていたという方が正しいかも

しれない。

朝7時に目を覚ますと、未だにそれは部屋の中に居た。何故か、こんな時間になれば起こしに来るであろう秘書も補佐官も来ない。

「ガ……」

「生き物なのか？」

「ガッ……」

不気味な黄色く何かを模した被り物を被っている得体のしれない生物は少しずつ近づいてくる。

私の少し手前で止まったUMAはただ私を見ていた。恐らくポケモンではないだろうか。これに似たような画像を資料で見た事がある。

「えつと、なんなんだ？」

「ガッ……」

どうやら何か用がある訳でもないらしく、部屋をぐるりと一周すると消え失せた。なんなんだ。

気を失っていたお蔭か十分に睡眠はとれていたので支度をして官邸へと向かう。今日もやる事が多い。

航空自衛隊百里基地にて緊急スクランブルが発生していた。

「……高度49000ftフット(15000m)、速度800ktノット(時速1500km)、銚子から約600kmの地点を飛行中。太平洋上を依然西上中。およそ25分で本土に上陸し、30分以内に東京上空へ到達します」

航空自衛隊の入間基地にある中部航空方面隊司令部では未確認飛行物体が太平洋上を飛行している事が確認されていた。

この情報は百里基地に直ちに送られ、スクランブルの指示をだした。また、首都へ進行するルートであるために、第一高射群第一高射隊のいる習志野分屯基地へも情報が送られた。

防空識別圏A^AD^DI^IZ^Zを未確認飛行物体が通過したことを受け、対領空侵犯任務にあたっている第301飛行隊のF-15Jは百里基地からスクランブルで二機がアフターバーナーを吹かせ飛び立った。

「Lizard, this is Dragon 01.

Now, maintain altitude 49000ft.

Dragon 01, this is Lizard.

You are under my control. Steer 090,

方位⁰ | 9 | 0 (磁北を基準に九十度 [東] へ)
 「Roger」

F115Jへオペレーターからの指示が出される。どちらの声も緊張は見られない。

「Dragon 01, target position 0-9-5.
 距離⁶ | 5 | 海里 高度⁴ | 9 | 0 | 0 | 0 | 0 | ft
 Range 65. Altitude 49」

目標との距離も縮まり、残り125kmとなる。パイロットは若干の緊張の中、まだ見えない目標を晴れた青空の中で睨むように探す。

「Target dead ahead 20.
 目標^正 | 面^{距離² | 0 | 海里}
 Dragon 01.

「How about contact?」
 レーダー^{探知に成功した} | 探知^{はどうか?} | どうか?

「Radar contact」

遂にレーダーへと未確認飛行物体を捉える事に成功した二機は更に距離を詰めて行く。

「もうそろそろ目視も出来る距離か?」

パイロットがキャノピー越しに青空を睨みつけるとそれは明らかになる。

「おいおい、Lizard, This is Dragon 01.
 リザード、こちらドラゴン01.

Visual contact.しかし、目の前に見ているのは飛行機ではな

く、生物だ」

「This is Lizard それはどういう事ですか？」

「そのままですよ。本物の龍だ。今そちらに画像を送ります」

中部航空方面隊司令部に送られてきた画像。そこには緑色の巨大な龍に酷似した生物が写っていた。

「This is Lizard. 確認した。その生物を今現在の進路から逸らせますか？」

「分からないが、やってみ、ツ、攻撃を受けた！ 幸い僚機ともに損害なし。これより機

銃による威嚇射撃を行う」

「Roger」

緑の龍、レックウザは先ほどから纏わりついてくる灰色の虫に苛立っていた。ここはレックウザの縄張りではないのでこの虫たちの縄張りなのだろうと当たりをつけるが、鬱陶しい事に変わりはない。

空の王を自負しているレックウザにとっては、纏わりつかれるだけで自尊心を傷つけられる。

試しに、はかいこうせんをわざと外すように撃つてやれば驚いたのか離れて行く。い

い気味だと思っていたのも束の間。今度は虫が攻撃をしてきた。

見た事のない技に驚くが、あの程度であれば傷もつけられる事はないだろうと、余裕の態度で空を飛び続ける。しかし、縄張りを犯しているのはこちらなのだから素直に退散しようかと、追いかけてこよろしく付いてこられるなら付いて来いと、速度を上げて急上昇してやった。

流石にあの虫どもも付いてこれなかったようで、黒い空と青い星の境目で満足げに島を見下ろした。

「ルオオオオオ！」

脅威2

「マツハ1・5で飛ぶ龍がF-15を威嚇、その後、F-15を推定マツハ10近くで振り切つて急上昇し成層圏まで離脱……」

私は頭を抱えるしかなかった。仮に戦闘機を易々と撃墜しうる生物がいたのなら安全保障に大きく関わってくる。

「そもそも成層圏までマツハ10程度で行けるのかね？ 少なくともマツハ25くらいは必要だったと思うが」

「成層圏まではマツハ10でもいけますよ。マツハ10で飛行する生物というのも異常ですが。マツハ26は成層圏外に行くための必要な速度です」

「そ、そうか。その生物が成層圏まで行けたとするならば、衛星軌道上に到達できるのか？」

「成層圏というのは希薄ですが空気は存在しています。その上に中間圏、熱圏と続き、ここまでが成層圏となります。衛星軌道は最低でも熱圏からですから、まず不可能かと」

「常識的に考えればな」

幽霊ですら存在するのだから、不可能とは断言できない。今は例の龍、恐らくポケモ

ンだろうから例の少年に画像を見せて詳細を聴取中だ。

それが今の話の様な、まだ常識の範囲内のものであればいいのだが。

仮に衛星軌道上行く事が出来たのなら、厄介なことになる。今は各国の調査を退けているが、どの国家の領域でもない宇宙を犯しうる生物がいるという事が公になれば、こちらも断りきれなくなる。

何も分かっていない現段階では、ポケットモンスターと大きく分類されているこの生物たちと同じである以上は、他のポケモンを調査することで、宇宙空間で生息可能な生物の手がかりを掴むという、もっともらしい事を言われたらそれまでだ。

衛星軌道中には各国の民間企業や、軍事の衛星が飛び交っているのだから、それらがその生物に破壊された場合、調査を断つたままだと、賠償を請求されかねない。まあ、そんな馬鹿な話はないと願いたい、少なくとも非難は免れないだろう。

「少年に話を聞いたところ、このポケモンはレックウザと言うそうです。なんでも伝説のポケモンなのですか」

「伝説と言うと、天候を操ったり、空間、時間すら操るといって、あれか……」

私はきりりと痛む胃を抑えながら辛うじて反応を示した。

「はい、レックウザと呼ばれるポケモンは天候を操るタイプなようで、宇宙空間も生息可能域……との事です。他に宇宙空間で活動可能な生物を聞いてみたところ、アルセウ

ス、ディアルガ、パールキア、ギラティナの神話級と、ジラーチ、ミュウの幻級、デオキシス、レシラム、ゼクロム、ビクティニ、ルナアーラ、ソルガレオという伝説級ポケモンは可能だろうとの事です。他にも可能なポケモンはいたかもしれないが、今のところは思い出せない」と

「そうか。そうだろうな」

私は乾いた笑いを堪える事もせず、頷く。どうやら、最悪な事態になったらしい。この情報は最重要機密に指定しないといけない。未だ混乱の収まっていない国内に調査団なんか派遣されても新たな混乱を生むだけだ。

第一、情報提供者である少年がいるからこそその調査の進みようだというのに、他国がでしゃばったところで進み具合が変わるとは到底思えない。あまつさえ、米国ならばこちらに情報開示を求めてくるだろうな。それも機密まで。

「この情報は最重要機密だ。分かっているな」

「はい。それと、他にも国家の安全に関わる情報は一旦すべてを機密扱いにした方がよろしいかと。大陸が沈むというような内容も含まれていますし、それが公表されても信じられはしないでしょうが問題にはなりません」

「そうだな。今すぐ起こる事でもないだろうし、そうした方がいいかもな。無用な混乱は避けるべきだ」

私が頷くと補佐官は執務室を出て行く。テーブルの上の冷めたコーヒーを口に含んで一呼吸すると、手元の書類に目を通していく。

これだけの混乱があるとはいえ、遅しい人たちは仕事を再開している者もいる。特に食糧に関わる仕事をしている人には頑張ってもらわなければならない。物流の滞りによつて餓死者が出るなんて事は御免だ。大型のスーパーなんかでは品切れが起きていて、わざわざ直売所にまで買いに行く人も出てきているくらいだから、物流関係は最優先だな。

物事には優先順位というものがあるから暫くは娯楽施設や、商業施設の大半は営業出来ないだろうな。

そんな思考を遮るように少々強めのノックがされる。許可を出せば慌てた様子の補佐官が……また何か面倒なことが起きたらしい。

「報告します。尖閣諸島沖にて中国軍の戦闘機三機が防空識別圏内に侵入してきたため、スクランブルで那覇基地からF-15が六機出撃したのですが、到着する五分前に中国軍機がレーダーから消失。到着した時には三機ともが墜落していました」

「それは、中国軍機の整備不良かなんかでの墜落ではないのかね」

韓国程酷くはないが、中国の戦闘機も稼働率は低いと聞く。整備不良による墜落であつてもおかしくはない。

「それが、電子機器へのジャミングによって操作不能に陥り墜落したと、救助できた一人が語っています」

「では、日本がジャミングを行ったと捉えられるわけか？」

「はい。しかし日本が中国軍機にジャミングを行ったという事実は御座いません。また、一つ不可思議な現象が観測されているのです。なんでも、赤いオーロラが観測されたとか」

「それはどういことだね？」

「その赤いオーロラは以前にも中国へポケモンを密輸しようとした船が見かけており、その直後に電子機器が不具合を起こしたとの事です。関連は今のところ不明ですが、今回の墜落もその赤いオーロラが関係しているかと」

「オーロラが沖縄で観測されるというのはおかしな話だが、一つだけ可能性が思い浮かぶ。」

「赤いオーロラの正体は？」

「分かりかねます」

「ポケモンである可能性は？」

「否定できません」

「はあ」

厄介なことになったぞ。戦闘機を撃墜できるポケモンがいると知られる可能性が
高まりそうだ。

戦争

中国軍戦闘機三機が日本の戦闘機に撃墜か!?

そんな見出しで始まる新聞が中国国内で溢れかえっていた。日本はそれどころではないのだが、日本国内でも嗅ぎ付けた一部メディアは大々的に報じている。

これが宣戦布告と捉えられる事を止めなければならぬため、外務省から中国へと今回の件を説明する者を大使館やらに派遣している。

もちろんパイロットの証言と、現場で起きた現象への説明もして、その上で日本は関わっていない事、ポケモンの可能性を提示する事になる……のだが

「信じてくれないじゃなくて、信じさせろ。こうなったらこの前の龍の動画をインターネット上に上げてもいいからどうかしろ!」

戦争する余裕なんて日本にない。戦争する可能性が出てくる時点で、私の心の余裕がもうない。

そもそも、日本の攻撃ではないのだから。

「衛星からの通信によりますと、その、人民解放軍の東海艦隊が寧波、舟山、福鼎に集結しつつあるようです」

「はあ!?　いくらなんでも動きが早すぎるだろう!?　昨日だぞ?　昨日の朝の事なんだぞ!」

「落ち着いてください。こういう事を想定して常に準備していたのかもしれない。それよりも今は一刻も早く疑いを晴らさないと」

「当たり前だ。外務省の連中はチンタラしてるから、私が会見を行う」

「準備します」

補佐官は急いで出て行った。私も会見で話す内容を纏める為の会議の準備を進める。

それにしても早すぎる。何かこれ以外にも中国が動く原因があるんじゃないか?

今そんな事を考えたところで何も分かる訳ないか。とにかく、事を大きくしない様にしたが、もう無理だろうな。

「中国軍の戦闘機を撃墜したのは日本ではありません。これは自衛隊の記録からも解る事かと思えます。では、何が原因だったのかと言いますと、パイロットの証言もありますように電子機器の故障が原因です。これは中国側の不備、という訳でもないようにして、もちろん日本側が電子對抗手段^Mを用いた事実はありません。不確定な情報ではありませんが、戦闘機を墜落させた原因はポケモンにあるとみています。防衛省のホームページ

ジにポケモンと自衛隊の空戦の映像を載せてあります。この事からも、ポケモンは常識を超えており、マツハで空を飛ぶ生物もいるのです」

その事に会場はどよめきに包まれる。常識が通用しない生物だからな。

これで少しは中国も躊躇ってもらえればいいのだが。証拠映像ではないが、可能性のある動画まで上げて自衛隊の記録まで出したのだからこれでも信じないというのは如何にかしてほしい。

会見終了後は、もちろん新聞紙にも載ったし、テレビにも取り上げられた。しかし、中国の新聞には載る事はなかった。

つまり、中国側は日本の弁解を聞き入れなかったという事だ。そして、戦争を仕掛けてくる可能性が依然として高いままで。

国際社会は日本側の主張を聞いて、中立の立場を一応はとるらしい。しかし、日本の主張の荒唐無稽さが、一部で敵を作っているようでもある。アメリカはと言えば今回は助けを借りれそうにない。後方での支援はしてくるだろうか。韓国は言わずもがな。友好国とか疑いたくなる。

2020年1月28日

戦争は始まった。僅か一週間で準備を終えた人民解放軍の東海艦隊は日本の領海へと侵入。自衛隊はそんな短期間で準備が出来る筈もなく離島の住民を避難させるのがやっとだった。

日本は無抵抗で与那国島、西表島、石垣島、宮古島を占領された。

日本側に死傷者は出なかったが、日本最西端碑は折られ、一気に領土、領海は狭まった。

これに国民は一部狂人的な反戦団体を除いて、一気に主戦派が多くなった。

しかし、憲法九条は改憲出来ておらず、いくら領土を実効支配されたからといって防衛出動は躊躇われた。というか、自衛隊の準備が全く出来ていないのだ。

2020年1月29日

しかし、この戦争は唐突に終わりを告げた。

人民解放軍、東海艦隊の艦艇と上陸部隊、その殆どが壊滅したためである。

この時の映像がどこからか流出した。

牛のトーテムポールが駆逐艦や輸送艦、最新鋭の空母をハンマーで圧壊し、鳥のトーテムポールが電気を放出することで電子機器を破壊。至る所で爆発が起きる。人魚のトーテムポールが陸の人間を海へと膨大な水を使って引き摺りこみ、少女のトーテムポールは無邪気に人間を強力な念力で引きちぎっている。

阿鼻叫喚の映像はモザイク処理もされるような有様になっており、映像を見た者は絶句した。ポケモンの残酷さが世界中に知れ渡った瞬間である。

中国では謎の四体の攻撃者を、その姿形から悪魔のトータムボールと呼んだ。

2020年1月30日

中国は日本への宣戦布告を取り下げた。東海艦隊の実に三割が被害を受けたためである。それと、寧波、舟山が悪魔のトータムボールに襲われ、港の機能が壊滅的な被害を被った事も大きい。それで基地機能を喪失し、援軍として出撃予定だった駆逐艦や潜水艦含め9隻が中破、もしくは大破し東海艦隊は五割の戦力を失った。

日本の戦後初の戦争はあっけなく終わりを迎えた。

この日、映像に写った悪魔のトータムボールからも推測できるようにポケモンの危険性が指摘されたため、国連にてポケモンの調査を行う事をアメリカが発議。

2020年2月1日

国連で常任理事国が満場一致の賛成。日本は各国から調査機関を受け容れなければならなくなった。

明賀総理は頭を抱えていたという。

2020年2月6日

ポケモンを密輸しようとした中国、アメリカ、ロシアの船が原因不明の故障により航

行不能に。日本へ引き返す事案が発生した。

2020年2月8日

同じく密輸に失敗したイギリスの船が……以下略。

2020年2月10日

再度密輸しようとしたアメリカの航空機が墜落。

2020年2月11日

再度密輸しようとした中国以下略。

2020年2月12日

ロシアが以下略。

2020年2月13日

原因を究明するためにアメリカから極秘で学者が来日。

密輸は諦めないらしい。

パートナー選び

今日からはパートナー選びか。

実は既にポケモンを持っていた五人の他に、講座中に三人がポケモンをゲットしているから、参加者105名の内、パートナー選びに参加するのは97人だ。そのため、16人ずつを六日間に分けて行う。

何処でポケモンを捕まえるのかと言うと、川と、森と、岩場もある高月市高ヶ尾^{たかつぎしたかがおやま}山である。

芥川が近くに流れており、山に入れば森はあるし、採石場もあるのでポケモン探しにももってこいな場所だ。

「えっと、先ずは、三つくらいの会社で使ってる採石場と砕石場、採るのと粉碎の方ね。そこに向かつて、いわ、じめん、はがね、といったタイプのポケモンを探します。このタイプの希望者はいます？」

たぶん国が用意したマイクロバスに揺られながら五人が手を上げる。因みに俺が話している横では紅斗君が車窓を眺めていた。付いて来たいというので付いてくるか？と言ったらありがとう！ となって、付いてきた。二匹目のポケモンを考えているの

だとか。

手を挙げた三人の内、自衛官の人が一人。自衛隊はタイプの違いでポケモンで揃えて、様々な事態に対処できるようにとの事だから、タイプを被らせる事が無いようにこちらも配慮しないといけない。

それに、今回の行先は俺にとつてもありがたい。なんせ、イワークを捕まえてからまだ一度しかモンスターボールから出せていないのだ。図体はデカいし、最近講習して家帰って寝るといふ繰り返して忙しかったからな。

イワークを一回出した時は大人しかった。俺がいきなり攻撃したことを誤れば許してくれたし、あのゴツゴツとした頭の上にも乗せて貰った。そんなイワークだから、外に出してやれないことをすまなく思っていた。

今日は存分に遊ばせてやるつもりだ。

約4、50分間車に揺られ、今は無人となっている採石場にやってきた。人間の代わりに居たのは、いわ、じめん、はがね、なんかのタイプである。山が近いからかむしろくさタイプのポケモンもちらほらと居る。

パートナーを捕まえに来たと言うが、野生のポケモンであるためにこの子がいい！
といって簡単に捕まえられるわけじゃない。

バトルする必要がある場合は俺か、紅斗君にさせるつもりだ。紅斗君にはバトルの経

験も積んでももらいたいし。

剥き出しになった山肌の麓でポケモン達を刺激しないようにバスから降りて話をする。

「捕まえたいポケモンをここから目視で探してください。野生のポケモンなので危険ですからくれぐれも近づかないくださいね。講習で分かっていると思いますが、ちっちゃいポケモンでもライオンとかトラより強いですから」

「この場にいるポケモントレーナーは俺と紅斗君だけである。ばらけられたらカバーが出来ない。」

「あと、俺のポケモンを紹介しておきますね。出てこい」

「があゝ」

「イワー」

「ウインディのレアは知っているとありますが、こっちはイワークの……名前は考え中です」

「イワ」

落ち込まないでくれよ。ちゃんと考えるからさ！

バスから降りて並んでいた皆はイワークを見上げて固まっている。そりやそうだよ、なんせデカイもん。

手を叩いて皆を正気に戻すと、見える範囲でどのポケモンに、パートナーとなつて欲しいかを決めてもらう事にする。

ポケモンたちはこちらを警戒しているのか遠巻きに見ている。五分程見ているとひとりが手を挙げた。

「あのポケモンがいいです」

自衛隊の人が指を差した先に居たのは……ヨーギラス!?

寧ろ俺が欲しいくらいだわ。

「わ、わかった」

ヨーギラスがいる事に動揺しつつもレアとヨーギラスの元へ行く。因みにイワークは剥き出しの山肌をクライムして遊んでいる。

「そのヨーギラス、少しバトルをして貰うよ。しんそく」

通り魔もいいところだが、仕方ない。一応声かけたから戦闘態勢には入っていたけど、しんそくからのきしかいせいであっさり撃沈。モンスターボールを投げてゲットした。

「はい、ヨーギラスです。捕まえるまでは俺がしましたが、さっきも言った通り、捕まえた後の関係は自分たちで築いてください」

「ありがとうございます」

俺がするのはあくまでも捕まえる事だけ。良好な関係を築くことが出来るかはその人次第だ。万が一、ポケモンがトレーナーに危害を加えるようなことがあれば、俺が止めて、野生へ返すことにはなっている。

結局、後四人がそれぞれ、ダンゴロ、サンド、サイホーン、ディグダを選んだ。どれも進化前のポケモンなので問題なく捕まえられた。俺の捕獲劇を見ていた野生のポケモンたちは臆病なものは逃げ、呑気な奴は遊び、戦いたそうなやつは爛々とこちらを見ている。

俺は今回のパートナー探しで一つ計画していたことがある。

「紅斗君、バトル、しよっか」

「えっ?」

「座学はしたけど実技はしてないでしょ? 皆にもポケモンバトルを見てもらいますね」

「今ここでするの?」

「そうだよ。急にごめんね。イワーク、出番だよ」

「イワーク」

「分かったよ。出ておいで、ピカチュウ!」

「ピッカ!」

崖を登ったり下りたりして遊んでいたイワークを呼び戻し、紅斗君はボールからピカチュウを出す。両者が出そろい、空気が変わる。

急な展開について行けない人も中にはいたが、ドッキリだとも思っただけで見てほしい。

「誰か審判お願いします」

「では、私が」

自衛隊の人が名乗り出て、審判の位置に着いた。

「手加減はしないよ」

「僕だって。ピカチュウと特訓していたから、絶対に勝つよ！」

「ピイカ！」

どうやらやる気満々のようだ。審判に目配せすると、一つ頷く。

「それでは、クレト対カイトのポケモンバトルを行います……バトルスタート！」

レッド

ピカチュウは合図と同時に駆けだす。素早さはもちろんピカチュウの方が上なので、まずは近づかれないようにしないといけない。ピカチュウはでんき技以外は基本物理だし。

「ステルスロックで進路を塞げ、動きの鈍ったところにがんせきふうじ」

まずはピカチュウの長所を潰して、こちらに有利になるように進める。

ステルスロックはピカチュウの動きを見事に阻害したが、がんせきふうじは躲された。

「エレキボールで攪乱して！ アイアンテールで打ち上げるよ！」

「えっ？」

資料を見た時からゲームの登場人物と重なる部分があるとは思っていた。けれど、実際に話してみると性格は似ても似つかないし、結構裕福な家庭だから重ならない部分も多々あった。けれど、今この瞬間に確信した。

紅斗君は、レッド……

「あはは、まさか負けるとは思わなかったよ」

「ふふつ、一杯技の練習したもんねー」

「ピカ！」

ピカチュウの放ったエレキボールは寸分の狂いなくイワークの顔面に直撃。ゲームであればダメージは無効であり、影響は無い筈だった。実際イワークはダメージを負ったようには見えなかった。しかし、エレキボールが直撃したことによる爆発で一時的に視界が奪われ、ひるんだ隙にアイアンテールでイワークを空中に打ち上げた。空中にいるイワークへエレキボールを再び当てる事で体勢を崩して受け身が取れない状態になる。

そして不格好に落下してきたイワークへと合わせるように5メートルほどピカチュウがジャンプし、アイアンテールを地面へと叩き付けるようにヒットさせた。衝撃で舞い上がった粉塵が晴れると、地面に体を半分めり込ませたイワークが気絶していた。

なぜ教え技のアイアンテールを覚えていたのかは気になるが、完敗だ。

俺ならじめんタイプのイワークにでんき技を使うなんて発想はしなかつただろうな。

「やっぱり、紅斗君はすごいな」

「へへ、そうかな？ ピカチュウが凄いんだよ」

「いや、あんな戦法俺じゃ思いつかないからな。もつと自信を持っていいよ」

「ありがとう」

照れくさそうに笑う紅斗君と抱えられているピカチュウは嬉しそうだ。

俺はイワークを労わるとアプリのポケモンセンターに預けた。

そして俺は観戦者一同へと振り向く。講師の立場である俺が負けたのでなんとモ格好悪いものではあるが、そこは……仕方ない。結構悔しいな。

「えっと、そういう訳で、ポケモンバトルはこんな感じですよ。相性は悪いように思えたと思いますけど、戦術でいくらでも戦況を変えられる事ができます。まあ、負けるとは思いませんでしたけど、紅斗君は才能あるので俺だけでなく紅斗君にも質問していただくかい」

負けた事に対するちよつとした意趣返しである。我ながら大人気ないと思う。せいぜい、質問攻めにあつてね。

次の場所へと向かうバスの中では紅斗君は人気者になっていた。質問を誰かがすると紅斗君は気を悪くするでもなく答えていく。分からない部分は議論になったりもしていた。全く意趣返しになっていないじゃないか……あまり拗らせるのも良くないな。

俺も途中から交じた。それなりに楽しめたから陰鬱とした気分も吹き飛んだ。気分を変えて次の目的地はゴルフ場だ。

ゴルフ場には草原、森、砂場、水場、これらが揃っている。だから多様なポケモン達を見ることが出来る。

ここでは九人分のポケモンを捕まえた。紅斗君とピカチュウにも協力してもらい、アメタマ、チェリンボ、ラルトス、スポミー、ムツクル、キヤタピー、キノココ、ラクライ、マリルを捕まえた。

キヤタピーを欲しいと言う人もいるもんだなと思ったが、リアルな虫に比べれば、まだ愛嬌があるので大丈夫なんだろうなと思った。バタフリーになれば補助役で活躍するだろうし。

あと、進化すればアタッカーとして申し分ないポケモンもいる事だし、結構いいかんじにパートナー選びは進んでいるかな。残り二名は最後の場所になる芥川でパートナー探しだな。

芥川のわりと上流の方に到着した俺たちは大き目の石が転がる河原へと降りた。そこにはゴルフ場の様な水場にはいないポケモン達もおり、森からは水を飲みに来たポケモン達もいる。

川を優雅に泳ぐトサキントやケイコウオ、水を飲みに来たマツスグマやポチエナにポツポ。とても賑やかな光景が広がっていた。

ここでもパートナー探し。残っていた二人は水タイプが狙いだったようで、ウパーとハイガニを捕まえた。これで一日目の十六人は終了した。

捕まえた中には俺も欲しいなと思ったポケモンもいたが、俺は取り敢えずレアとい

ワークが居るのでやめておいた。

そして、次の日も、そのまた次の日も、百人近くのパートナーを探すために同じルートを何回も巡った。二匹目も探している紅斗君と一緒に。

そして最終日、芥川の上流付近に着いて最後のパートナー探しをしていたところ、小雨が降り始めたので早く終わらせて帰ろうとした。最後のポケモン、ヤドンを捕まえてバスに乗り込もうとしたとき、紅斗君がいきなり走り出した。

「海飛さん！　ちよつと急用が出来たからバスで待つててー！」

「ちよつと！　紅斗君どこいくの!?!」

紅斗君は軽快に石の上を進んでどんどんバスから離れていく。その先に見えたものを確かめに行ったようだ。赤い何かが見える気がするが、本降りになって来た雨で視界が悪い。

「紅斗君こけるから！　ゆっくり歩いて！」

何を見つけたんだろう。

救助

意外と運動神経のいい紅斗君はひよいひよいと岩の上を飛び移り、川の対岸へと辿り着いてしまった。俺もそれを追いかけるように岩の上を飛び移るが、雨のせいで滑りそうになったり、川の流れが急になったりと、かなりひやひやした。

なんとか対岸に辿り着いた時には茂みの中でぐったりとしているポケモンを抱き抱えている紅斗君がいた。腕の中のポケモンを覗き込むと、それはヒトカゲだった。

「ヒトカゲ……尻尾の炎が弱くなってきた。紅斗君、雨が当たらないようにしてあげて」

「海飛さん、分かった」

「出てこい、イワーク」

「イワ」

「イワーク、川に跨って道を作ってくれ」

川幅は、かなり上流の為に五メートル程と短い。しかし、その分流れも急で足場の岩は尖った物が多いのでイワークに足場となってもらう。

イワークが岩を支えにして川の上に跨ると、その上を紅斗君と渡っていく。雨が強く

打ちつけて滑りやすいが、なんとか持ちこたえる。

慎重にわたりきるとイワークをボールに戻して、いそいでバスへと向かった。

バスの中では先に戻っていた人たちがざわざわとしているが、気にせずヒトカゲを座席へと寝かせる。

「大分弱ってるな。何かとバトルした後みたいだ。そんで雨が降って来て余計に弱ったと」

「海飛さん、助けてあげて！」

「大丈夫、必ず助けるよ」

俺はアプリからキズぐすりを取り出して使う。しかし、体力は余り回復していないようだった。俺はどうしたものかと思案する。回復出来ないわけじゃないけど、本来の効能を発揮していない様な……

「そうか、瀕死か。なら……」

俺はアプリを開いてあるものをショップで購入する。ごつそりとマイルをもつて行かれたが、背に腹は代えられない。

「頼む、回復してくれよ……」

俺はそれを、げんきのかけらをヒトカゲへと与えた。

少しすると、弱弱しかった呼吸がだんだんとしつかりとしたものへと戻ってくる。尻

尾の炎も勢いが戻って来ていた。

「ふう、窮地はこれで脱したみたいだな」

「ありがとう、ありがとう！ 海飛さん！」

「落ち着けよ、しかし、よく分かったな」

抱きついてくる紅斗君を宥めつつ、疑問をぶつける。急に走り出したかと思えば、倒れているヒトカゲを見つけるなんて。

「うん、声が聞こえた気がしたの」

「声？」

「そう、多分この子の、助けてって声」

「そうか……」

俺には全く聞こえなかったが、不思議な事もあるものだ。これ以上聞いても何もなさそうなので、この辺りでやめとくか。

「皆さん、ご迷惑をおかけしました。弱っているポケモンを見つけたので、本日は街に着いたら解散という事で。運転手さん、お願いします」

帰りはずっと雨が降っていたが、膝の上でヒトカゲを大事そうに抱えている紅斗君を見てみると温かい気持ちになれた。

ヒトカゲはもうすっかり落ち着いたようで、気持ちよさそうに眠っている。

さて、紅斗君の手持ちになるのかな。

あの後、ヒトカゲを看病する場所が必要だな、と呟いたら既に迎えに来ていた紅斗君家の高級車に乗せられて、家まで来ていた。高層マンションの一室が紅斗君の家の様で、部屋に案内されるまでのマンションの内装だけで既に気後れしていた。

エレベーターの中で迎えに来た人が押したボタンは25だった。結構上だよ。うん。眩暈がしてきた。

あ、でも俺ってこのマンションの一室買えるくらい、金貰えるんだ。やっぱり眩暈してきた。

「着いたよ。ここが僕の家」

紅斗君はそう言つて、エレベーターを出てすぐの所にある扉の鍵を開ける。迎えに来た人はどうやらここまでが仕事の様で、一声かけると去つて行った。

どうやら両親はいないようで、紅斗君に続いて家にお邪魔すれば、俺の家よりも広そうな玄関に、リビングダイニング、キッチンがカウンターを挟んで繋がっている。L型のシステムキッチンは調理スペースが広くて使いやすそうだ。

部屋は五部屋あるそうで、ヒトカゲを寝かすために案内された紅斗君の部屋は、シン

ブルな家具やカーテンで纏められた、小学生と言うよりは大学生くらいの部屋の印象を受けた。それに、明らかに俺の部屋より広いだろ。

「カゲッ!？」

「大丈夫だよ。落ち着いて」

紅斗君がヒトカゲをベッドに寝かそうとしたときに、目が覚めてしまった。全く知らない場所に居る事に気付いたのか俺たちを警戒していた。紅斗君が宥めようとするがヒトカゲは部屋の隅でこちらを睨んでいる。

「大丈夫だよ」

大丈夫と、紅斗君は何回も繰り返しながら、ヒトカゲに視線を合わせて近づいていく。

「いつっ!」

手を伸ばせば、ヒトカゲは紅斗君の指に噛みついて出血していた。

「大丈夫!？」

「うん。ちよつと痛いけど」

紅斗君は噛まれている右手とは反対の左手を、ヒトカゲの頭へともって行くと優しく撫でた。それが効いたのか、徐々にヒトカゲは噛む力を弱めて紅斗君を離れた。完全に離れると、今度は申し訳なさそうに紅斗君を見ていた。

「大丈夫だよ。これくらいすぐ直るから」

苦笑いするともう一度ヒトカゲを優しく撫でていた。どうやら今のやり取りで懐か
れたらしく、ヒトカゲは紅斗君に近づくと血がポタポタとたれている指をなめていた。

「くすぐつたいよ」

「バンドエイドってどこにある？」

「バンドエイドって？」

「絆創膏だよ」

「ああ、それならリビングにあったかな。茶色い棚の上にある救急箱の中」

「とつてくるよ」

「ありがとう」

俺はリビングに戻って、バンドエイドを取り出すと、紅斗君の部屋へと戻る。チラッ
と見えた廊下の先には絵画が飾ってあったけどあれも高いのかな。

「指出して」

「は、」

「……これでよし、と」

指の形に合うように、バンドエイドに切り込みを入れて貼ってあげる。直ぐに血が滲
んでいたが、大したことはなさそうだ。

「おいで、ヒトカゲ」

「カゲ！」

すっかりと懐いてしまったようで、紅斗君の膝の上で撫でられて幸せそうにしているヒトカゲ。

まあ、紅斗君らしいやりかただよね。ピカチュウの時も怪我しているところを助けたっていうし。

襲撃

仲良くなったヒトカゲに、紅斗君はピカチュウと一緒に尋問中。どうして倒れていたのかを聞いていた。

俺はそれを傍で見守っていた。

「ピカ、ピカ、ピカッ！」

「うーん、友達を助けた？」

「ピカッ！ ピーカ、ピッ！」

「カゲカゲ」

「スピアー、かな？ に襲われたの？」

「ピカ！」

「カゲ！」

ピカチュウとヒトカゲはジェスチャーを交えて紅斗君に教えていた。

俺にもなんとなくスピアーに襲われたことは分かったけど、まるで会話しているようだよな。

俺もレア相手に会話してみるかな。

「それで、友達を逃がした？ スピアーと闘って時間稼ぎをしたの？」

「カゲ！」

「ピカ、ピーカ、ピカツチュ、ピカピ」

「それで自分もなんとか逃げ切ったけど、その時にはボロボロだったんだね」

「カゲカゲ」

「ピカ」

尚も会話は続く。ピカチュウと紅斗君の高レベルなコミュニケーションスキルによつて、全容はあらかた把握することが出来た。

要は、おやつとして仲の良いミツハニーから蜂蜜を分けて貰っていたんだけど、そこにスピアーが五匹やってきたと。どうやらスピアーは新しい巣を探していたようで、ミツハニー達の巣をよこせと言ってきた。それに怒ったピークインがスピアー達に戦いを挑んで、それを手助けする形でヒトカゲも参戦。ピークインはなかなか強かったそうで、スピアー四匹を相手取り辛勝だったそうだ。ヒトカゲもタイプ相性は良かった為に、飛び回るスピアー相手に苦戦しつつもひのこを一発当てることに成功し、そのあと追い打ちのひのこを二発当てて勝つたのだとか。

しかし、そこからが問題だった。スピアーがいつの間にか呼んだ増援、その数約二十匹。流石に勝てないと判断したピークインはミツハニー達を逃がし、殿を務める事に

なった。それにヒトカゲも参戦し、結果、今に至ると。

逃げている途中にビークインとは逸れてしまい、どうなったのかは分からないそう
だ。

よくもまあ、こんなにも細かく分かったな。紅斗君ってエスパーだったりする？ 俺
は一割くらいしか分からなかった。

「ビークインとミツハニー達が心配だよね」

「カゲ……」

「ヒトカゲ、僕も付いて行ってあげるから、ミツハニーたちが元気にしている事を祈
う。ね？」

「ピーカ」

「カゲ！」

紅斗君たちで話は纏まったみたい……

「紅斗君、もしかしてヒトカゲ連れてあそこに行くつもり？」

「うん。ミツハニーたちが心配だから」

「分かったよ。俺もついて行く」

「海飛さんまで来なくても……」

「紅斗君を一人にすると無茶しそうだし、それに、俺は先生だよ？ もっと頼ってくれ」

「……お願いします」

なんか、物凄くキラキラした目で見つめられてる。これが憧憬の眼差しってやつか……大言吐いてしまったけど大丈夫かな、俺。

という訳で、居ても立っても居られないと言った様子のヒトカゲを連れて、再び芥川上流へともどってきた。

雨は幸い止んでいたの、川を渡るとヒトカゲの案内を頼りに森の中を進んでいく。ミツハニー達の巢に辿り着いた時には、そこはもぬけの殻になっていた。てつきりスピアー達が占拠している物だと思っていたのだが。

そこから、ミツハニー達が逃げたと思われる方向に足を進めていく。起伏が激しい隘路を二十分程進んだ先に、ミツハニーが一匹いた。ヒトカゲが大声で呼びかけると、ミツハニーはそれに気づいて寄ってくる。

「カゲー！」

「ハニハー」

なんというか、おっとりしているのは種族柄なのだろうか。間延びのした返事が返ってくる、ヒトカゲは少しの会話をして、ミツハニー達の新しい巢に案内してもらった。

案内された場所にあった巣は、さっきの巣もそうだったけれども、直径五、六メートルはありそうなほどに巨大だった。そこにはビークインもいて、ビークインのスカートのような巣からはミツハニーの子どもの様な小さい虫たちが出入りしていた。

ビークインがヒトカゲに気付いて一言声を掛けた後にこちらへと視線を向ける。俺と紅斗君は自己紹介すると、ビークインも一つ、お辞儀をしてくれた。

どうやら、スピーアーからは逃げ切れたようで、ミツハニー達の蜜のお蔭で回復もしたそう。あれ、密にそんな効果ってあったっけ？

安心した俺たちはヒトカゲによかったな、といって帰る事にした。帰る際に、ヒトカゲとミツハニーで何か話したのか、俺たちに蜜を分けてくれることになった。丁度水筒を持っていたのでそこに入れて貰った。

ヒトカゲは帰りも俺たちの案内をしてくれた。そうして今は帰っている途中なのだが。

「なんとというか、胸騒ぎと言うか……」

「どうしたの？」

「いや、気のせいかな」

俺はなぜか不安に駆られるようなそんな気持ちを抑えつつ、歩みを進める。しかし、少し開けた場所へと出た瞬間、俺は紅斗君を突き飛ばした。

「いたた、海飛さん？」

「ごめん、大丈夫？　しかし、スピアーがこんなところで出て来るとは」

「う、そ……」

俺は紅斗君を突き飛ばしたことを謝って、周囲に目をやる。先ほど、紅斗君を狙ってスピアーが攻撃をしてきたのだが、他にも大勢のお仲間がいたようだ。

俺たちがどうするかと迷っている内にどんどんと数は増えていく。十、二十、三十、四十、五十……

「か、海飛さん」

「カゲ……」

紅斗君とヒトカゲは俺にひつついて震えていた。そりやそうだよな、俺だつて手が震えてるもん。

「「スピッツ！」「」

どうやら威嚇をしてきているようで、正直、これだけの大きなスズメバチに囲まれて、気が可笑しくなりそうだ。

「はは、クッハッハッハ！　いいねえ、ええやん。前も！　後ろも！　右も左も！　上にまで！　最高だよ……本当に最高だよ！　お前らほんまに最高やわ。いけ、レア。焼き尽くしたれ！」

「グルウオオオオオオオン！」

炎天下

モンスターボールから出てきたレアはその光を散らす前に、更に光へとつつまれてその姿を変えた。

「メガシンカ。お前ら纏めて相手したるわ。少しは楽しませてくれへんと、アカンぞ？
フレアドライブ」

メガシンカ状態のレアは物理技の優先度が上がる。それはこの現実世界において単純に速度が上がる事を意味する。いくらスピアーがすばしっこいゆうても、レアからしたら兎戯に等しいわ。

「しんそく」

前方の敵をフレアドライブで焼き尽くす。その圧倒的な光景に他のスピアーも呆けていたが、流石に動きはじめ、レアではなく俺らを狙ってきたのでしんそくで叩き潰す。

「ほのおのうず」

固まっていた左の敵をほのおのうずで纏めて攻撃し、戦闘不能へと追いやる。

「ほらほらほらア！ どうしたんや？ こんなもんで俺らを襲ったんけ？ 失望させんなや！ しんそく！ フレアドライブ！」

足りないな。数じゃなくて個の強さが。

「群れたからといって自分が強くなったとでも勘違いしとったんか？ 雑魚共が！ か

えんほうしゃ！」

レアの体力は残り三割といったところか。フレアドライブは体力が削れるのが難点やなあ。

かえんほうしゃで後方の雑魚を燃やした。これで残るは右と上の奴らのみ。

「手ごたえのある奴はおれへんの？ このままじゃ消化不良やわー。しんそく、かえんほうしゃ」

これで右も片した。残りは上のスピアーたちだけ。俺たちの周囲では残火が燻っていた。

あれだけの数が居たのに、殆どが丸焦げになって地面でひっくり返っている。殺虫剤のCMに出れると思うよ、君たち。

「しんそくで跳躍しろ」

「グルアー！」

しんそくで使われる加速エネルギーを後脚部に集中させ、それをジャンプするためのエネルギーに変える。そうすることでレアは空中に跳び上がる。不運なスピアー一匹が飛び上がったレアにぶつかって飛んでいったが、気にすることなく、空中で反転して

落下してきたレアに最後の指示を出す。

「オーバーヒート」

「グルウウアア！」

直上に花火が咲いた。

「なんや、あつけないやん」

「あ、あの、海飛、さん」

「どうした？」

「その、ありがとうございます」

「どうして敬語？ ま、怪我無かったからよかったよ」

何にもよくねえよ！

どうしよ!?! 気がふれておかしくなったところ見られてしまった! マズイ、憧憬の眼差しが、恐怖の眼差しになってる気がする。どうしよ!。

「カゲ! カゲカゲ!!」

「ガア?」

「カゲ!」

なんか向こうでレアとヒトカゲが話し合ってるけどそれどころじゃねえ。

「カゲ！ カゲカ」

「え？ 僕の仲間になる？ いいの？」

「カゲ！ カゲカゲ！」

「ふふ、レア君みて強くなりたいたいと思ったんだね。でも、どうして僕なの？」

「カゲ、カゲカ」

「助けて貰ったから？ 気にしなくていいのに。ああ、なるほどね、うん。いいよ。僕も

レア君と勝負したい。それで勝ちたいね！」

「カゲ!!」

なんか、もうピカチュウいなくても会話成立してるよね。なんで？ なんでなん!?

「はい、モンスターボール」

「カッゲ！」

紅斗君がモンスターボールを出すとヒトカゲは嬉しそうにボールをタッチし、そのまま吸い込まれていった。捕獲完了の合図が出れば、紅斗君はボールを拾い上げもう一度ヒトカゲを出してやる。

俺は一連の流れを呆然と見ていた。

俺のさっきの言動には触れてこない紅斗君。レアの強さに魅せられたヒトカゲ。一

緒に強くなると約束した紅斗君とヒトカゲ。

思考停止と言う名の安寧を俺は求めた。

「帰ろうか……」

「うん！ 海飛さんありがとう！」

「カゲ！」

「グルウ！」

家へと帰って来た俺は、ベッドに寝転ぶなり早々に意識を飛ばした。今日は疲れた。

「どうだ？ ポケモンがいる生活は」

「えっ？ あれ？ アル、セウス……」

「そうだ。質問に答えろ」

「えっと、前より充実してるっていうか、楽しいっていうか」

「そうか」

「ところでここはどこなの？」

俺は疑問を零した。赤い大地に俺とアルセウスは立ち、中心には小さな水たまり。遠くの方では高い山々が連なっていたり、空はまるで空気が無いかのよう宇宙の黒を映

し出していた。

「ここか？　ここは太陽系第四惑星、地球人の言う火星だ」

「な、なんで俺がそんなところに!？」

「大丈夫だ安心しろ。これは私が見ている光景にお前の虚像を作りだし、その虚像に眠っているお前の思念を植え付けて会話をしている。だからお前の体は地球にある」

「そ、そうなのか」

よく分からないが、夢のような世界とでも思えばいいのか。

「でも、どうして火星なんか」

「それは火星を生命が住める星にするための実験をしているからだ」

「火星を、生命が住める星に？」

「この星の地下には膨大な水脈と今は停止しているがマグマだまりがある。それらを活性化させれば、自然と生命が住める星の原初の姿になれる」

なんともまあ、神様は壮大な計画を立てている物だ。

「それって、何億年ってかかる事じゃ？」

「この宇宙の法則に従えば、の話だがな」

「この、宇宙？」

「そうだ、この宇宙だ」

「それってどういう」

「私が作り出した宇宙とは全く別の宇宙ということだ。この宇宙は……忌々しい」

創生神話

「時間は余りあるから教えてやろう」

そういうとアルセウスは何故地球にポケモンを現させたのかを語り始めた。なにも神の気まぐれなのではなかったのだ。

「私は虚無と言って差し支えない場所にいつからか存在していた。私は何も無い空間に飽いたのだ。そこで私の化身を作り上げた。それが、パルキア、ディアルガ、ギラティナだ。そいつらに私はそれぞれが司るものを与えた。空間、時間、反物質。そいつらの力と私の力を使って時の流れを生み出す重力を作り出した。しかし、それは強力すぎたためにギラティナの力で消し去った」

宇宙創成というところでもない話を聞かされてるよな。

「そこで、空間を先に広げる事で重力を生み出しても耐えうるようにした。見事に成功し、空間という箱の中に、重力を利用した時間の流れを作り出すことが出来た。そして、私はその空間に物質を作り出した。様々なものをな。それらはやがて重力に引き寄せられて形作り始めた。私の作り上げた物質を重力が引き寄せ、膨大な熱エネルギーに変換させた。それらを重力は引き寄せ続け、やがて丸い熱の塊を作ったのだ。それが私た

ちの最初に作り上げた太陽となった」

そうか。

「後は同じように作っていき、やがてとある星が一つできた。そこに私は、私たちの様な生きる者を作り出そうとした。確かに成功したが、時間をかけすぎたために星の寿命が持たず、崩壊してしまった。その星を再現したものをまた作り直すと今度は短期間で作り上げ、ポケモンと呼ばれる者達、人間と呼ばれる者達はその星に暮らし始めた」

ふむ……

「寝るでない」

「いたっ!？」

「思念でも痛覚を刺激することは出来る」

理不尽すぎる。こっちは何も抵抗できないじゃないか。

「これが私たちの宇宙だ。宇宙と言うのは淵の知れぬ箱の中にある小さな箱の様なものだ。その小さな箱は無数に存在しており、その数だけ神がいて、それぞれを管理している」

「え、そうなの？ 宇宙ってそんなにあるの？」

「ああ、しかし、一つイレギュラーな存在があった。それがこの宇宙だ。この宇宙に神は存在しない」

「それって?」

「この宇宙の誕生は、終わりから始まった」

「え、えつと?」

「この前の宇宙が超新星爆発の複数同時発生や連続して起きるなど、まあ、悲惨だった。そしてその宇宙はとうとう、宇宙ごと歪み始め、最終的に一点に収束した。そして、それは宇宙一つ分というエネルギーを貯め込んでいた。地球人が言うビッグバンとはこれの内包エネルギーが爆発した事によって引き起こされたものだ」

ふむふむ。半分くらいしか頭に入ってこないけど。

「この宇宙はそういう経緯で生まれたために、今もお誰の制御も受けずに広がり続けている。そして、この宇宙は私たちの宇宙を侵食し始めたのだ。圧壊するのも時間の問題だった。だから私はポケモン達の保存をした。人間達も保存はしたが、既に地球には私の作った人間に似ている者がいたからな。余計な混乱を招かないようにポケモンだけにした」

「ポケモンだけでも大分混乱してますけどね!?!」

「案ずるな。デオキシスに頼んで地球は調査済みだ。一番ポケモンの住みやすそうな国を選んだ」

「デオキシス?」

「ロシア、だったか。そこに隕石が落ちた事があっただろう？ あれはデオキシスだ。途中で爆発したせいで一年ほど再生に時間が掛かったとぼやいていたが。ともかく、念入りに調査を済ませ、この宇宙で私がどれほどの権限を持っているのか調べ終わったのが、2019年頃だ」

あれはデオキシスだったのかよ！ てつきり2020年を境にポケモンが現れたと思っただけど、その前から既にいたんだな。

「しかし、お主も気付いているだろう？」

「なにが？」

「ポケモンの種類が少ない事にだ」

「確かに、まだ、三百種類くらいしか見つけられてなかったな」

「それはポケモン達の生態系を考えて、出現させる種類を限定したからだ。将来的には他の国にも出現させる予定ではあるが……」

「何か問題でも……あ、あれか」

「そうだ、密輸だ。デオキシスに見張ってもらってはいるんだがな。火星を住める星にする事を優先するべきかもしれない。幸いにもポケモン達は私が滅びない限り保存はずつとできる。しかし、伝説になるほどの力を持っている者たちはそう長く管理できないのでな、日本に解き放った」

それって、不味いと思うんだけど。

「カイオーガとグラードンは？」

「坊の岬沖にカイオーガ、阿蘇山にグラードンがいるな。どちらも眠っておるから安心しろ」

「全く安心できないんですが」

「他の伝説ポケモン達は各々が好きな場所で過ごしている。暴れるようなことはないだろう。それと、伝説のポケモン達には私から命令して働いてもらう事もあるから覚えておけ」

「カイオーガとグラードンも？」

「あの戯けどもにこの私が何か頼むとでも思っておるのか？」

「いや、ないです」

急に不機嫌オーラを出すアルセウス様。不機嫌になるだけでこんなにも威圧感があるなんて流石神様は違うな。苦しいんでそろそろ機嫌直してください。

ていうかここまで不機嫌になるなんて、一体あいつらは何をしたんだか。

「もう時間もあまりないから話はここで終いだ。また呼ぶこともあるかもしれないが、基本的にはないと思え」

「はい。こちらは好きにさせてもらいますよ」

「私の機嫌を損ねない程度にな」

「はいはい」

そこで意識は途切れて、また眠りに誘われた。

特訓

ポツポの鳴き声を目覚ましに起きた俺は、まだ陽が昇ったばかりの住宅街を散歩していた。

この時間帯に外へ出ている人は疎らにしかいないが、ポケモンの出現がそれに拍車をかけて誰もいやしない。そのため、のんびりと散歩できる一方で静かすぎるのも退屈だった。

だから、誰も見ていないならいっか。

「レア、ちよつと遊ぼうぜ」

「ガウ」

モンスターボールからレアを出してやり、背中の上に乗ると、駆け足気味に河原を指した。

ここもまた静まり返っていた。車の通る音すら少なく、人はいない。近くの高架橋には電車がいつもなら通っているがこれもまた運休している。

一ヶ月。これと似たような状況が続いていた。最初は不気味に感じていたこの光景も慣れてしまった。人目を憚らずにポケモンを出して遊べることを考慮すれば、都合が

いいと考えることにした。

「イワーク、出てこい」

イワークも出してやると、ウインディであるレアと相対させる。

「これからバトルをして貰う。まあ、本気でやってくれても構わない」

「ガウ！」

「イワ！」

人目がないのなら、九メートルの岩の怪物と炎を繰り出す犬が戦っていたところで何も問題ない。

バトルをさせる目的は、イワークを育てる為だ。野生のポケモンを倒さずとも自分の手持ち同士で戦っても経験値が入るのは確認済み。ポケモンが戦う事で経験を積むのなら、どうして野生やトレーナーのポケモンからしか経験値が入らないのかという疑問が生まれたので、試しに戦わせてみたところ、しっかりと経験値が入っていた。

この現実にはポケモンがいる世界で固定概念を持っていたら損をする事はもう十分に解った。

スパアーとの五十近い群れバトルしかり、戦わずして懐かれゲットすることしかり、効果がない技も戦術に組み込めば十分に役割を果たすことしかり。

ということでは出来ない事、アニメで触れられていないような事で疑問に

思ったことは片っ端から試すことにした。

「岩石封じ」

俺がイワークに指示を出したことを開始の合図とし、レアは動き出す。今回、俺はイワークにしか指示は出さない。レアには自分で判断して動いてもらう。

それに、俺は真剣に指示を出す。これはイワークとレアだけでなく、俺自身の特訓でもあるのだから。

岩石封じを軽々と躲したレアはしんそくでイワークの背後へと回り込む。しんそくは最早人間の目で追う事すらできないので、消えた瞬間にどこへ現れるかを予想して対策を取らなければならない。

後ろへ現れた一瞬、技の反動で隙が出来る。といつても一秒くらいだが。

「振り降ろせ」

イワークが体勢を変えず、レアを見る事すらせず、尻尾を縦に振り降ろす。別に技で攻撃をする必要もない。もしこれを技に当てはめるなら、たいあたりか。

振り降ろした尻尾はレアが躲すことで宙を切り地面にめり込んだ。レアは躲してすぐにきしかいせいをイワークの背中へ叩き込んだ。

前のめりになるイワーク。レアの体力は減ってないので威力も大してないが、体勢を崩された隙は大きい。

「そのまま勢いよく倒れる」

前のめりになっていたイワークはそこから自分の意志で勢いよく倒れていく。結果、砂煙が舞いレアの追撃を防ぐことが出来た。

「左斜め後方にごんせきふうじ」

ポケモンだけと、トレーナーのいるポケモン。有利なのはもちろんトレーナーのいるポケモン。なぜならばフィールド全体を見渡しているトレーナーがいるから。砂煙は確かに舞ったが、それはイワークから離れていたレアの全身を隠すまではいかなかった。俺からは後ろ姿が丸見えだった。

「ガウ!?!」

砂煙に覆われて何も見えない中からいきなり飛んでくる岩石。躲そうと動くが、流石のレアも視界の悪い中から突然と飛び出してくる岩石に反応しきれずに二発、その身に喰らってしまう。

「しめつける!」

すばやさが低下し、なおかつ吹き飛ばされて倒れているレアをしめつけるで拘束するには絶好のチャンスだ。未だ晴れない砂煙から飛び出したイワークはレアを締め付ける。徐々に体力を奪い始めるがレアも抵抗する。フレアドライブの炎を纏って、それを攻撃としている。そんな使い方もあるのかと思いつつもタイプ相性が悪いためにそこ

までイワークの体力を削れていない。

「いわおとし」

イワークが頭上に岩を生成すると、しめつけるの拘束を外すと同時に落とした。見事にレアに命中し、レアは気絶してしまった。

「よくやったな、イワーク！」

俺はイワークを褒めると、レアにいいキズぐすりを使う。体力を削りきったわけではなく、まだ少しはあったようで、効きは良かった。

「グルウ」

「そう落ち込むな。レアも一人にしちやあ、よく頑張った」

目が覚めたレアは目に見えて落ち込んでいた。まあ、イワークと初めて戦った時なんてメガシンカで一方的に勝ったし、スピーアの群れの時も一方的だったからな。少し傲りがあったのかもしれない。今回の敗北は丁度いい薬になっただろう。

「そうだな。反省点としては、もえつきるを使わなかったところかな。タイプ相性が悪いんだから弱点は消さないとな」

「グア」

「後は、距離をとる事だ。敵が見えない時は距離を取って様子を見た方がいい。レアはスピードに関して群を抜いている。敵の攻撃も、距離を取っていれば躲せたと思う」

「グウ」

「しめつけるの時にフレアドライブを使ったことには感心したが、あそこで使うべきだったのはオーバーヒートだったな。さすがにオーバーヒートになると拘束は続けられなかったと思う」

「グ、グア」

あ、流石に言い過ぎたか。項垂れてしまった。よしよし、お前は十分に頑張ってくれているからな。

「イワーク、お前はちゃんと俺の指示を聞いてくれてるし、技もちゃんとできているんだけど……レアが怖いかな？」

「イワ……」

イワークは俺が話を始めようとすると頭を下げて視線を俺に合わせてくれるのは優しさだと思う。たとえレアが頭を撫でられているのが羨ましくてあわよくば自分もそうしてほしいからと言う打算があったとしてもだ。俺はイワークの頭に手を伸ばして撫でながら話すが、撫でる手を止めて少し間を取るとレアが怖いかどうか問うた。

どうやら凶星だったようで、少し震えたのが分かった。

「怖い気持ちもわかる。でも、卑屈になるなよ。レアを負かせてやる。圧倒的な力で捻じ伏せてやる。それくらいの気概でぶつかっていけ。俺はそれに応えてやるし、お前に

はそれが出来るだけの力があるさ。信じろよ、俺を、そしてお前自身を」
微かに震えた。それは恐怖とは違った、奮起する者の武者震いだった。

波乱の幕開け

進捗

さて、私は今黄色いネズミのポケモンが二匹倒れている前に立っている。黄色いネズミと私の間にはその黄色いネズミを模したであろう着ぐるみを纏った、よく分からない奴がいる。

どちらも同じ大きさなのだが、私と黄色いネズミの間に居る奴からは禍々しいものを感じていた。その着ぐるみの下から覗いた手が明らかに生物のそれとは違うような気がしたからだ。

しかし、この状況だと私は着ぐるみの奴に感謝するべきだ。助けて貰ったのだから。見かけで判断するものではないな。

なぜこのような状況に陥ったのか。それは至極簡単な事。私の住む公邸の庭をいつの間にか二匹の黄色いネズミが住処としていたようで、そこに一息つきたかった私がやってきて敵だと認識したのだろう。熟れた果実の様に赤い頬に電気を迸らせ威嚇をしてきた。

即座に逃げようと考えたが、次の瞬間には黄色いネズミと私の間に音もなく着ぐるみ

の奴が現れて、何かの技を使ったのだろう。一匹ずつ、さして時間をかける事もなく倒してしまった。

「ありがとう」

私を着ぐるみのポケモンへ礼を言うと、こちらへ振り向いてじつと見つめてくる。恐らく、あの夜に見た奴ではなからうか。今回は直ぐに姿を消すこともなく、暫く見つめあっていた。

少し時間が経てば、また消えてしまう。こちらに興味を持つてくれているのか？ だとしたらもう少しアピールしてくれてもいいんじゃないか？ 人見知りなのかもしれないな。

勝手に結論付けて、踵を返す。あの二匹には悪いが、この庭に住ませてやるわけにはいかないんだ。人を呼んで野生に返してもらおう事にした。

私が官邸の執務室で書類を捌いていると、補佐官が報告に来た。

「例の、風見海飛君の事ですが、四日後に会談する事になりました」

「そうか、やつとか。色々と世話になっているからな。直接礼を言いたい。十分にもてなせるように手配もしておいてくれ」

「はい。それと、陸路、海路、空路の内、空路が一番早く安全だという事になりましたので、伊丹空港発、羽田空港着となります」

「なぜ空路が？」

「陸路は新幹線が使えない今、高速道路も封鎖していますし、車で来ても一日、二日はかかるかと。海路はスクリューの破損被害が出ていますし、危険です。その点、空路は上空四万 feet もなればポケモンは居ません。これは事前に調査済みです。前回の様なイレギュラーが起きない限り最も安全です」

補佐官のいう事は尤もだが、一番危険なのは離着陸時の低高度を飛行するときではないか？ バードストライクは離着陸の際が一番多いと思うのだが。たしか、鳥を寄せ付けないようにする仕事もあつたはずだ。

「離着陸時の際、低高度を飛行するがその時の安全対策は？」

「こちらで用意しております。基本的には鳥ポケモンを持つトレーナーで対処します。他には空砲など、実績のある方法も用います」

「トレーナー？ ああ、彼が引き受けてくれた件か」

「はい。上手くいっています」

未知の生物であるポケモンを従えてその能力を引き出す人間、トレーナー。その提案を持ちかけて来た海飛君は既にポケモンを従えていたらしく、彼に任せて百名ほどにポ

ケモントレーナーになるための講習をして貰った。その成果が上々だというのは嬉しい報告だ。

既にポケモンによる被害者はでており、死者も全国で発生している事を鑑みれば少ないかも知れないが三桁に届こうとしている。

これ以上の被害を出さないためにも、恐らくこれから先ずつと日本に居るだろうポケモン達と共存していくためにもトレーナーの存在は必要不可欠だ。

「恙なく会談を始められるよう頼むよ」

「畏まりました」

補佐官は一礼をすると部屋を出て行った。背後のブラインダー越しに外を見れば鈍色の空から後光のように光が筋となって射し込んでいた。どうやら雨は降らなさそうだ。

俺は快晴の街をのんびりと歩いていた。今日は特に何かをする事もない。トレーナー講座は終わったし、市役所からは休みを貰ってる。学校は未だに休校しているし電車は動かない。父さんは仕事場で今後の会議をするとかでないし、母さんは撮りためたドラマを食い入るように見ていた。テレビはポケモンのせいでニュースが多く、ドラ

マの放送もやつと、続きが来週放送されることになったとかで内容を思い出すために見返していた。

俺はと言えば、好きなアニメも放送中止になって再開は未定だし、ゲームは暇人が急増したせいで好きなオンラインゲームのサーバーがパンクし、ポケモンのせいで復旧が遅れていた。パンクしなけりゃ、アツプデートとかは当然見送られていたがサーバーの管理ぐらいはしてくれていたのに。

「ほうほう」

という訳で今は自分の部屋へと戻り、ポケットモンスターJの新機能を試していた。外を歩いても結局何も面白い事なかったからね。

ポケットモンスターJの新機能、それは掲示板である。既にいくつか立ち上がった。さて、ここで採る選択肢は……ひとつ、読むだけ。ふたつ、どこかの掲示板に書き込む。みつつ、爆弾情報を落としまくる掲示板を立ち上げる。個人的には三つ目をしてみたいが、それしたらお偉いさんに何言われるか分からないからね。

このアプリの登録名を既に知られているから、掲示板に書き込めば匿名ではなくプレイヤー名で表示されるから一発でバレるってわけ。もちろん同名の登録も出来るからカイトって名前くらいいるかもしれないけど、爆弾情報を投下なんかしたら真っ先に疑われるよね。

そんな一時の娯楽の為にポケモンスタジアムの夢を諦めたりしない！
豪邸も買いたいから絶対にしない！

けど、掲示板に常識の範囲ないぐらいなら書きこんでもいいよね？

掲示板

結構な数の掲示板が立っているな。特にこれといって興味を惹かれるものはないんだけれども。

取り敢えず一番上のを見てみる。

【ポケモン】各地で起きている【事件】について

1：さつまあげ

ポケモンという生物が現れてから各地で事件、事故が起きているのでここで情報共有を出来ればなと思います。

2：ランボ

金が飛んだ。

3：ヒュージ

》2 え？どういう事!?

4：ランボ

》3 家の、家のランボルニーギがつ！よく分からん岩みたいなが目の前を転がって行ったと思ったらフロントペシヤんこなんだよ!!手と足がついてたから間違いない!

あれはポケモンだ！

絶対許さん。

5：ユキおんな

》4 それは何と申うかご愁傷様。

6：レン

》4 金持ちだったか。まあ、ご愁傷様です。

7：さつまあげ

このスレを上げた理由なんだけど、大きいスズメバチみたいなのが家の近くに居てなかなか外に出られないんだよ。だから他にそんな人いなかなと思つたら、もつと悲惨な人がいたようだ……

8：ユウキ

》7 僕の家つてそこそこ田舎なんだけど、そこにもデカイハチが居たよ。どうにかならないのかなあ

9：キンニク

田舎の方ほどポケモンはいっぱいそうだな

10：さつき

》7 大きいハチつて大丈夫なの？物凄く危険そうなんだけど。

11 : さつまあげ

》10 あれは絶対に危険だな。針の長さがおかしかった。まず、普通の蜂の針なんて遠目から目視できる大きさはじゃないし。

12 : ユウキ

》10 危険だよ。一、二匹くらいなら倒せるんだけど、やつらの巣にはうじゃうじゃいるから。

13 : さつまあげ

》12 え？

14 : キンニク

》12 え？

15 : さつき

》12 え？

16 : レン

》12 え？

17 : チョッキ

》12 はい？

18 : ミート

》12 ええ……

19 : ユウキ

皆してどうしたの？ 何か変なこと言った？

20 : さつまあげ

》19 い、いや、だつて蜂つて、一メートルくらいのやつだよ!?!それを倒したの!?!
どうやって!?

21 : ユウキ

》20 倒したよ。僕の相棒が戦ってくれたんだ。エネコつていうポケモンだよ。

22 : さつき

》21 もうポケモンを持つてるんだ！知り合いから聞いたけど、ペットとして飼っていた犬とか猫がポケモンになって、モンスターボールつてので捕まえたつて聞いた事あるけど。

23 : ユウキ

》22 僕は近くにある洞穴で見つけたかな。凄く人懐っこくてご飯あげてたら仲よくなつちやつて、そのまま捕まえた感じ。

24 : アケチ

俺もポケモン捕まえたぜ！ キヤタピーつてやつ。

25：シブガキ

》24 それってめっちゃ弱い虫だろww あんなの捕まえる奴がいるんだなww
スライム捕まえて喜んでるようなもんだろwww

26：あたるくん

さつき、目玉だけの胴体にU字の磁石が左右についたポケモンがスマホ弄っている時
に通ったんだけど、スマホが逝かれた。

27：キンニク

》26 見た目よw スマホはご愁傷様。

28：さつまあげ

》26 磁力のせいかな？電子機器をそいつに近づけるのは危険だね。

「へえ……自力でポケモンを捕まえて、バトルまでして勝ってる人もいるんだ」

世間ではポケモンに対して、まだ理解が進んでいないので一ヶ月が経った今でも、割
と対処に困っている人がいたりするのだが、自力で解決する人も出てきたようだ。

ポケモンをモンスターボールで捕まえることが出来るというのはアプリの事を発表
した会見で知られたが、ポケモン同士を戦わせることが出来るというのは三日ぐらい前

のニュースの特集で取り上げられたな。俺の講習を受けてポケモントレーナー（駆け出し）になった人がテレビに出てたっけ。

「次は……と」

【ポケモン】を捕まえた人たちの【自慢】スレ

1：ミカツキ

ここは捕まえたポケモン達を自慢するスレです。

ちなみに私の捕まえたポチエナちゃんはマジでかわいい!!

飼っていた犬がなったんだけど、なめらかでしたっけとした毛ざわりに、とっても賢い!!

前よりも絶対にパワーアップしてる!

2：タスヒク

俺も実家の犬がガーディつてのになってた。ふわふわのもふつもふで、しかも凛々しい顔つき。なんか俺の言葉を理解できているみたいでめっちゃ賢くなった。

3：ヒビキ

俺のバックーはかわいい上に最高に強いんだぜ! なんとってあの害……スピアーを

バツタバツタと倒せるんだからな!

あ、バツクーってヒノアラシってポケモンな

4：にくまん

》3 なんか物凄いキャラが濃い奴発見w 　　というかヒノアラシって名前強そうだな

5：ひよつとこ

スピアーと言えば超が付く程の害虫だろ。あれのせいで死人も出てるらしいし、あいつらを倒せるポケモンが欲しいわ。

うちのポケモンはメリープって言うんだけど、これまた羊みたいでもっこもっこでかわいいんだよ。

6：やくまん

》5 羊つてことは牧場に居たのか? 　　うちは飼ってた猫がニヤルマーてのになつてたな。なんか物凄く気難しそうな見た目になった。賢さで言えば、確かに賢くなつた。

7：ひよつとこ

》6 牧場で働いてるからそこで譲ってもらったんだ。なんでも価値が分からないからどうしようもないってさ。牛もポケモンになつてただけけど、どうやら乳は出るみ

たいだから商品になるのか色々試してるって

8：ガリバー

》7 牧場の生き物が全部変わってるとか畜産業は壊滅的じゃないか？農業も畑が荒らされるのが増えてるらしいし、大丈夫か？

9：サラリー

》8 農業以外にも交通インフラが未だに復旧しないから観光業、サービス業……と
 どうか殆どの職種が大丈夫じゃないだろ。

会社は仕事自体がなくなって休みだしな。いつまで続くか分からなけど仕事は休み
 になっても嬉しくないわ。金がないんだよ！仕事くれ仕事。仕事がないと生きられな
 い。

10：ガリバー

》9 社畜ニキは強く生きて

「……ヒノアラシって御三家だよなあ。欲しいな」

その後もうつつかの掲示板をみて回ってみたけど。めぼしい情報はなかった。まあ、
 その代りに今の日本の状況に対する本音がよく分かったと思う。

小さな相棒

今日は自分の手持ちを増やそうと思い、家からほど近い山まで来ていた。もちろんレアに乗って移動してきたので注目の的であったが、もう慣れた。

「出来ればくさタイプで強い奴とかいれればいいんだけど」

今いる手持ちは水、地面に弱点が集中しているからくさタイプは是非欲しい所だ。くさタイプで強い奴と言えば誰だろうか。ジュカインとか？ 補助技で優秀なエルフーンとキノガツサもいるけど、火力が欲しいんだよね。

確かに眠らせれば強いし、やどりぎのタネは優秀なんだけど、眠り状態は一撃攻撃を当てると起きる確率がぐんと上がるんだよね。

この前、講習に来ていた人でキャタピー捕まえた人がもうバタフリーに進化させて、眠り粉の使用感を聞いてみたんだけど、一撃当てると大抵起きるらしかった。起きて暫くは鈍いので二撃当ててくるくらいの際はあるみたいだけど、ゲーム見たいにはいかな

い。
やどりぎのタネに関しては単純に命中率が悪いのではないかと考えている。すばや

い相手にはあてにくそう。

「かつこいいからジユカイン欲しいんだよなあ」

まあ、結局のところジユカインが欲しい。でも、キモリなんているのか？ ヒノアラシやゼニガメを捕まえたって人がいる以上はキモリも居るんだろうけど。

「まあ、何タイプでもいいから強そうなのいいかな」

アルセウスが日本を舞台に選んだ以上カントーとかジョウトで分布が違うのかと思いきや、割と同じようなのを見かける。どうやら、好きな所に縄張りを作っているので、ゲームとは分布が違うようだった。ゲームはあくまでゲームと言うことか。

「何かいいかないかな」

「ガウー」

「お、オレンの実だ」

ポケモンが現れた事で日本の植生も大きく変わっていた。きのみが生る木がそこらじゅうに生えているのだ。南国もかくやといったところか。

おそらくダウジングマシンを使えば地面からポケモンに関係するものも出てくるのだろうが、生憎とダウジングマシンを買う余裕はない。単純にポケマイルが不足しがちだから。

「ガウ、ガウ」

「どうした？」

何かを見つけた様子のレアについて行けば、そこには、なんと。

「コリンク?」

「リウ?」

「ガウ」

「リイーーーー!」

「あ、ちよつと!」

「ガ、ガウ」

おい、レアさんや、脅かしてどうするよ。コリンクが逃げたじゃないか!

せつかく見つけた電気タイプなんだぞ!

「おいかけるぞ!」

「ガウ!」

いそいでレアに跨ると、ちつきいくせに早いコリンクを追いかけるが、木や背の高い草でコリンクを早々に見失ってしまった。

なんとかレアの嗅覚を頼りに探してみるけれど、相当遠くへ行ってしまったようだ。

「仕方がない。諦めるか」

「ガア……」

電気タイプというのは案外貴重である。今のところ、紅斗君のピカチュウと変電所に

いたレアコイルとコイルくらいしか見ていない。是非ともゲットしたかったわけなんだがなあ。

気を取り直して他のポケモンを探し始めるも、オタチ、マダツボミ、オニスズメ、ポツボ、スバメとなかなかピンとくるものがない。

進化前のポケモンが殆どなのは、単純にレベルが1〜5くらいで全ポケモンがスタートしたかららしい。アルセウスによれば、レベルは個体の保存をした時にだけ、リセットされない。主に伝説がこれに当たる。

一方で、普通のポケモン達は遺伝子を保存し、そこから日本で復元したためにレベルは最初からであり、前の世界に住んでいたポケモン達ではないため記憶も無いとの事。因みに遺伝子を保存するための存在がミュウなんだとか。

「ちよつと疲れたな。休憩しようか」

もう三時間ほど歩いた気がしたので、少し開けた場所で持つてきていた弁当をリュックから取り出す。レアのポケモンフーズはアプリのバッグから。アプリのバッグはポケモン関連のものしか預けられないし、容量も制限があった。

「はい、これ。待てよ」

レアをお座りさせて、餌を前に置く。そして俺がよしと言おうとしたところでレアのポケモンフーズは何者かに先に食べ始められていた。

「あ、コリンクじゃん」

「ガウ……」

「まあ、まあ、また用意するから」

よほどお腹が空いていたのか、コリンクは一心不乱に食べ進め、こちらを気にも留めていなかった。レアの分を用意してやり、やつとありつけたレアは小さなコリンクを少し恨めしげに見ていた。

どうして戻って来たのかは分からないが、コリンクを餌付けしてみるか。

「おーい。美味かったか？」

「リ？ リイ！」

「そうかそうか、きのみはいるか？」

「リウ!!」

「ほら、余り焦って食べるなよ」

元気なコリンクはオレンの実をどんどん齧っていく。余程お腹が空いていたのか。

「どうして戻って来たんだ？ お腹が空いてたからか？」

「リイ……」

「きのみなら一杯なってるだろ？」

「リウリ」

「ああ、届かないのか」

懸命にジャンプして取ろうとしているものの、背の低い木であるポケモンのきのみがなる木にも届いてなかった。

ふと、少し離れたところに目をやれば背の届かないキノココにマダツボミが木の実を取ってあげているところが見えた。

「なあ、ああやってお願いしたらよかつたんじやないか？」

「リウ……」

「なにかあつたのか？」

流石に、一ヶ月もずつと取れなかった訳じやないだろうから最近仲が悪くなることでもあつたのだろうか。

「リウ、リウリ、リイ」

「うーん、と空？ 飛ぶ？ ポケモンか？」

「リイリ、リ、リウリウ、リイ」

「どっかに行つた？ 違う？ いなくなつた？」

「リウ……」

どうやら空を飛べるポケモンがどっかに行つたという事を伝えようとしたみたいだな。最近ポケモンとの会話？ も出来るようになって来た気がする。

空を飛べるポケモンにきのみを取ってもらっていたが、ある日いなくなってしまった。相当仲が良かったのか大分落ち込んでるな。それで食欲もなく今まで食べようともしなかったんだらうか。

「コリンク、お前の友達、だよな？」

「リイ……」

「探してやるから元気出せ、な？」

「リイ？」

「ガウ」

「リウ！」

大きな相棒

さて、どこから探したのか。ヒントとしては空を飛ぶポケモンという事くらいしか分かっていない。空を飛ぶポケモンならポツポツやスバメとかだろうか。

「リ、リ、リー」

「ガウ」

すっかり仲良くなったのか、コリンクは元気に歌いながら歩いているし、レアもそれに合いの手を入れている。微笑ましい光景だな。

コリンクは森の奥の方に向かって行っているのだが、そちら方面に行つたきり帰つてこなくなったのだろうか。

「コリンク、友達つてどんな奴なんだ？」

「リ？ リイリ！ リツリツ」

「あー、そうか、そうか」

「リイ！」

なるほど。さっぱり分からん。

気を取り直して進む事十分。そこそこ奥に來たのだが、この辺りからポケモンのレベ

ルが少し高いように感じる。そして血の気も多いような気がする。

「ほのおのきばー!」

「ガウー!」

さつき襲つてきたのはオオタチ。どうやら森の奥ではレベルの高いポケモンが多く、進化をし始めている野生のポケモンも居るみたいだな。だからコリンクは探しに行きたくても行けなかったのか。

となると、探している奴はそれなりに強いポケモンだという事になるよな……

更に進む事二十分。とうとう帰れるか不安なくらい奥に来てしまった。頼もしい相棒がいるからそこまで不安ではないけれど。やはり、森の奥地と言うだけあって不気味な雰囲気を漂わせている。

「ロオオ!」

「ブソツ」

「なんだ?」

ポケモンの鳴き声が聞こえたと思つた次の瞬間、前方で大きな音を立てて木がへし折れた。嘘だろ? 野生のポケモンにもうそこまでの強さの奴がいるってのか?

どうやら戦いの最中らしく、大きな音がいくつも聞こえてくる。

「リー!!」

「あ、おい！ まさか、今戦っている奴らのどっちかが探してる奴なのか？ レア、追いかけるぞ！」

「ガウ！」

いきなり飛び出していったコリンクを追いかけて、走ってみれば、直ぐに開けた場所にてだ。開けた場所は元から開けていたというよりは、戦いによつて開けたと言った方が正しい。なんせあつちこつちに木が倒れていた。

そして、その倒木でギミックチックになつているフィールドでは、軽々と動き回るアブソルと空を飛んで攻撃の機会を窺っているトロピウスが。

確かに、こいつらは強い。もともと進化がないために、低レベル帯では上位に入るくらいには強い。トロピウスは1レベルからリーフストームという強力な技を覚えているし、それ以外にもはつぱカッターやかぜおこしといった、なかなか強い技を覚えている。

努力値上げや、群れバトルに秘伝要因として優秀で重宝していた奴で、よく手持ちに入っていた。

一方のアブソル。こちらも強い。特にきょううんの特性はつじぎりと合わせると急所に当たる確率が跳ね上がる。ふいうちも強力で、きょううんで急所に入ればごっそりと体力を削ってくれる。メガシンカもでているポケモンなだけに、俺も使ったことがあ

る。なによりも見た目がかっこいいよな。

「ロオオ!?!」

「ブソツ!」

空中を旋回していたトロピウスは突然不可視の攻撃が命中して墜落して行く。そこへ追い打ちをかけるようにアブソルはつじぎりを命中させた。急所に入っていれば大ダメージは確実だ。あのアブソル、ハッキリ言つて強い。つじぎりを覚えているあたり30レベルはいつているだろうし、トロピウスをみらいよちで墜落させるなんて戦いにも慣れている。

トロピウスには武が悪い。

問題のコリンクだが、どうやらトロピウスが友達らしくそちらに駆け寄つていく。空を飛べるのはトロピウスだしな。さて、俺的にはアブソルをゲットしたいところなんだが、まずはコリンクとトロピウスを助けないとな。

「レア、あいつらを守れ」

「ガウ!」

レアは倒れて動けなくなったトロピウスと、寄り添っているコリンクを庇うように立つ。俺はアブソルが次にどのような行動をしてくるのか、見ていたのだが予想外の事が起きてしまう。

「ハアアアアアアアアア!!」

「う、な、なんなんだよ!」

一拍、アプソルが息を吸い込んだと思えば強烈な不協和音を周囲にばら撒いた。思わず地面にうずくまって、耳を塞ぐ。いったいなんなんだよ。こんな最悪な技なんかあったか?

まるで命を削るような……うた?

ほろびのうた、か!?

「やばいやばいやばいやばい!! メガシンカ!!」

「ガウ!!」

最悪だよ! さっさと蹴りをつけてしまわないとこの現実にはいてどれくらいの間で最期を迎えるのか全く分からない!

頼むから頑張ってくれ!

「しんそく!! フレアドライブ!!」

しんそくがもろにヒットした! 体勢を崩してここにすかさずフレアドライブがヒット!

「ええで! その調子や! しんそくで決めたれ!」

「ガア!!」

「ブソツ!？」

た、助かった……あのまま気付かんと普通に戦つたら死んでたかもせえへんやん。ほろびのうたの実態はよう分からんけど、あんなもん聞かされて無事でいられるとは思えへんわ!

はっ、関西弁がつい出てしまった。ま、まあともかく助かってよかった。コリンクも無事に友達と再会できたことだし。一件落着かな。

アブソルが逃げていったのは残念だけど。

「ほら、薬だぞ」

「ロオ」

「リー」

さて、おやつにでもしますか。幸い、きのみは沢山あるから交流も兼ねてコリンクとトロピウスの事を知りたい。出来れば仲間になつて欲しいからな。

仲間とお仲間さん

激しい戦闘があつた事を物語っている場所で、倒木に腰掛けながらしばしの休息を楽しんでいた。

先程の戦闘時に感じたトロピウスの勇ましさは鳴りを潜め、穏やかな表情でコリンクとレアと接している。くさタイプには穏やかなイメージがあるからなあ。

もうしばらく楽しみたいところではあつたが、日も沈みかけており、この森の奥地からは早く抜け出したかった。

「森の浅いところまでいかないか？ もうそろそろ日が暮れはじめる」

「ロオ」

「リー」

「ガア」

どうやら皆も賛成してくれたらしい。俺はレアに跨つて、コリンクはトロピウスの上に乗つかった。落ちないのか心配にはなつたが、度々同じことをしていたのか慣れた様子だった。

トロピウスが飛び立つと少し先を進んで先導してくれる。レアは速度を落とすこと

もなくついていき、行きよりも早くに帰ることが出来た。

それでも、もう夕暮れ時であり早めに家まで帰らないといけない。だけどその前には非こいつらには仲間になって欲しいな。

「ありがとうな。おかげで早く家に帰れるよ」

「ロオ」

「リーリー」

「あのさ、お前らがよければなんだが、俺の仲間にならないか？」

「ガウ」

モンスターボールを取り出して見せる。俺の言葉にトロピウスとコリンクは顔を見合わせて一言二言、言葉を交わすところちらに向き直った。

「リーー！」

「ロオ」

「いいの、か？」

「ロオ！」

「リー！」

どうやら俺の仲間になってくれるようで元気よく鳴くと、頭を少し下げた。俺はひこうタイプとでんきタイプのポケモンを手に入れることが出来てものすごくうれしくて、

直ぐさまモンスタールボールを彼らの額に押し当てた。

小さなコリンクも大きなトロピウスも等しくボールに吸い込まれていき、カチャという音と共にゲット出来た。ボールから出してやると改めてよろしくと伝えた。

明後日には東京へ行く予定だし、仲間が増えれば頼もしい限りだ。

伊丹空港はがらんどろだった。飛行機は暫く再開の見通しはたっていないし、電車もモノレールも止まって公共交通機関のアクセスはバスとタクシーくらい。バスは空港が閉鎖状態なのを理由に空港には止まらないし、タクシーで来るか自家用車で来るしかない。

そんな何もない場所に行く人なんているはずも無く、必要最低限の職員が空港のシステムや旅客機を保守管理しているだけだった。

「おはようございます。内閣府特命担当大臣の喜多和広きただかずひろです」

「おはようございます。風見海飛です」

「おはようございます。風見仁です。海飛の父です」

「大まかな説明は事前に行われていますね」

「はい」

「飛行機の中ではもう少し詰めた話をするため、私が来ました」

「今日はよろしくお願ひします」

「息子をよろしくお願ひします」

「はい。責任を持って息子さんをお預かりいたします」

スーツをピシッと着こなした父さんと同じくらいの年の男の人。まさか大臣自ら迎えてくれるとは思わなかったな。この前にも大臣が来ていたし意外と内閣の人達はアグレッシブなのか。

父さんとは別れて、普段は通らないであろうところを通って滑走路へと出てきた。滑走路には使われていないジェット飛行機が数多く泊まっていたが、そのなかでも今向かっている先に在る4発のプロペラ飛行機は他のと比べてやけにずっしりとした印象を受ける。

「あれに乗るんですか？」

「ええ、空自に頼んでC-130を借りました。あれは頑丈ですからそう簡単に落ちるなんてことはありませんよ。それこそ翼をポキッとおられない限りは、プロペラが全部止まってもよっぽど運が悪くない限り死にませんよ」

「あ、あはは、そうならない事を祈ります」

やけに力説してくれるが、フラグを立てまくっている事に本人は気付いているのだろ

うか。まあ、仮にテレビの再現ドラマにあるような飛行機事故が起きててもこれは輸送機らしいので頑丈だし、パラシュートもあるからいざという時は脱出できるらしいし、空中分解したとしてもトロピウスがいるから安心だ。ただ、空中分解となると自分の身を守るので精一杯だけだ。

「でもこんな飛行機をわざわざ使っているんですか？」

「貴方にはそれだけの価値があるということですよ」

「それはどうも」

「では乗りましょうか」

「ええ。……僕が記憶喪失になったらどうします？」

「聞かなくてもお判りでしょう」

「まあ、これに乗る事は出来なくなりますね」

政府の人間なんてそんなもんだ。俺が必要なんじゃなくて俺が持っている情報が欲しいだけだからな。でも、この人の返答は少しまずかったかなあ。俺に警戒心を植え付ける発言は控えた方がよかった。

という訳で東京で行われる会談については表面上のやりとりだけで、あまり深く入り込むのはやめよう。俺が政府にとって価値ある状態を、少なくとも俺が政府の後ろ盾が必要でなくなるまでは維持しないと。でないと情報を吸いとるだけ吸い取られて、あ

とは用なしだなんてことにもなりかねない。

ま、そこまで薄情でもないだろうから政府御用達の天下り先ぐらいは融通してくれそうだな。そんなところに行ってもロクな人間いなさそうだけど。

ヒノアラシは嫉妬深い

快適な空の旅か、と言われたらそうでもない。なんせ今乗っているのは輸送機だからな。

だけど、それなりに過ごしやすいように配慮されてはいた。今は無理やり作られた感満載の部屋の中で、説明を受けている。この部屋から一步出れば無骨な内装が広がり、エンジンの音によって大声で話さなければならなくなる。

「以上で説明を終わります」

「今も毎月振り込まれてるんですけど、いいんですか？」

「はい。情報料や講座の講師料、その他諸々の金額を適正額振り込んでるので問題ないと聞いています」

「二つお願いがあるんですが、あれだけの額を貯金してもあれなんで、金融に詳しくて、投資を行っているような人っていないですかね？ 資産運用を任せたいので」

「は、はあ、掛け合ってみましょう」

ちよつと、人をまるで小学生の皮を被った何かの様に見えるのはやめてくれ。事実っちゃ、事実だけど。資産運用の話をする小学生とか……ないわ。

因みに今、口座には4千億5千万円入ってる。うん、おかしいな。税金差し引いて情報量で4千億円。5千万円の方は役所で働いていた？ 時の分と講師代。

まあ、今日までの世界で発生した損失が千兆円とか何とか言われているから、それに比べれば安いもん。

今は日本がほぼ操業停止状態だから、世界の市場は混乱というか瀕死していて暴落しているところも珍しくないらしいけど、俺はポケモンについての情報を握っている事と、政府の人が一番近いと言ってもいい所に居る訳だから、その気になれば日本関連の市場を操るようなことも出来てしまう。

具体的には鉄道のポケモン対策。これを提案して実行することで成果が出れば日本の経済は回りはじめる。そうすれば回復していくだろうから、その時に株でも持つてれば回復分の利益が出る。

後は一番影響力があるだろう、木の実。木の実をどこの会社に持ち込むかで、変わってくる。例えばAという製薬会社に持ち込めば、それ以外の製薬会社は正直言って軒並み株はさがるだろうな。逆にAはあがる。

因みにオボンの実で骨折が直るのは確認済み。既に政府に話して今は国の管理する研究機関にお預け。なんでも特定の会社を優遇しないためだとか。つまりは、研究機関が発表して民間に実験結果を公表すれば製薬会社は食いつくだろう、当然食いついた製

薬会社はその殆どが株は上がると思う。正直一社だけより何社かの株を持つてた方が安心だから問題ない。

インサイダーに引つ掛かるだろうから、その辺りはキチンとするけど。

さて、どうしてこんなにもお金の話をしているのかと言えば「ポケットモンスター株式会社」でも作ろうと思ったからだ。この世界にはポケモンと言う生物の出現で存在は認知されたが、ポケモンによる産業は一切ない。新規開拓が容易にできるものが目の前に転がっているのだ。やらない手はない。具体例としてはポケモンバトル大会とポケモンコンテストだ。バトル大会に関しては俺自身の夢と希望とロマンが詰まってるから絶対に開催したいな。

これをついでに地域の活性化でも一役買おうと考えている。ゲームで言えばジム巡りが一番適していると思う。リーグも作りたいとは考えているが、そこはまだまだトレーナーがいらないから先の話だな。

「もう直ぐ着きます」

色々妄想している内に東京へ着いたようだ。トラブルもなく安心した。

飛行機から降りれば、そこには黒塗りの高級車が数台。これに乗っていくのか、なんかいやだな。

「こちらにお乗りください」

「はい」

「おつ、漸くきたんか。暇やからバックと遊んどったわ」

「すみません。乗る車間違えました」

「ちよ、ちよつと待ちいや！ 合ってるつて！ 俺もお前と一緒に行動する事になつてんねん」

「はあ、てか誰なん？」

「お、やつと喋る気になつてくれたんか。俺は響、わかがねびびき若金響。よろしくな！」

「俺は風見海飛。まあ、よろしく」

いきなりの展開でよく分からないのだが。関西弁、同い年か一歳下の男の子。膝にはバックと呼ばれたヒノアラシが座っている。それにしても、この組み合わせにこのテーションは覚えがあるような。もしかして掲示板上にいたヒノアラシのことを話していたヒビキか。

「んで？ なんで響君も呼ばれたわけ？」

「呼び捨てでええつて。なんかさあ、親父が市役所で働いててバックと遊んでて分かった事とか報告したら、閑空から連れてこられたねん」

「なんや、そういうことなんか。でも、事前に聞かされてないんやけど……まあいいか。行きしなに説明はもう受けたんやろ？」

「ああ、受けたで。あんま覚えてないけど」

「なんでやねん。覚えとけや」

「いやあ、頭使うんはあかんねん」

大丈夫なのか？ お世辞にも頭がいいタイプだとは思えないんだが。話を聞けば父親に頼まれてスピーアーと闘った事があるんだとか。まあ、ほのおタイプだから圧勝だったらしいけど。それにしても息子をスピーアーと闘わせるなんてどんな鬼畜野郎なんだ。

「バックーはほんまにええ子やで。かわいいし、強いし、最高やわ。そういえば海飛もポケモン持つてるんやろ？」

「うん。でも、デカいから車の中じゃ出されへんな。あとで見せたるわ」

「はよ着けへんかな。めっちゃ見たい」

「そんな事言ったらあかんやろ。めっちゃ睨まれてるんやけど」

「あ、ごめんごめん。俺はバックーが一番やから」

随分と信頼関係も築けているみたいだな。若干ヒノアラシの嫉妬心が痛いけど。

それにしても、こんな子と一緒に総理と会談なんかできるのか？ 響は物置と化して俺がしゃべり続けている事になるか、バカな発言をして場を壊す事しか思いつかないんだが。

旅の仲間

東京は意外と日常に戻りつつあるみたいだ。人はバスや車を使って通勤しているらしい。バスを多用して輸送網を構築しているみたいだ。ただ、そうすれば渋滞は酷い物で、今も足止めを食らっていた。

「なかなか進まんなー」

「仕方ないって。電車は動いてへんやから」

電車は未だに運休中である。ポケモンが急に飛び出して来たり、線路上に居座ったりと、どうにもならないのが現状だ。本家はどうかやって電車を運行していたのか知りた

い。

結局、目的地に着いたのは一時間以上してからだった。通勤時間帯をある程度避けてこれなのだから、酷い物だ。

高級そうなレストランの前に止まると、中へと案内された。物珍しいのか、響はヒノアラシと一緒にあっちこちと目が移っていた。俺もチラチラと視線は泳ぐが、そんなあからさまに見たりはしない。なんとなく恥ずかしい。

個室の中に入ると、テレビでも見たことのある人が座っていた。他にも何人かいる

が、よくは知らない。

「遠路遙々ご苦勞様です。内閣総理大臣の明賀秀二です。本日はよろしく願ひします」

「風見海飛です。よろしく願ひします」

席を立つてこちらに来ると、手を差し出してきた。それに応えて握手をすると、こちらも自己紹介をする。お互いによく知ってはいるが、様式美の様なものだ。

対して、響はさつきから俺の陰に隠れてだんまりだ。まあ、予想通りだな。大抵の小学生在が大人相手に物怖じせず話しかけていける訳がない。

小声で響に取り敢えず自己紹介をするように促してやる。

「ほら、自己紹介しなよ」

「え、つと、わ、若金響、です！ 十二歳！ よろしく願ひします！」

「ははは、元気がよくてよろしいですね。若金君の事はお父様からよく聞いています」

大きな声での自己紹介は子どもらしいというか。年齢を言ってしまうあたり、こういうのには慣れてないんだろうな。政治家の息子って事だから多少は慣れていると思っ
ていたんだが。

まあ、響のお蔭で場の空気は大分緩んだように感じた。それに、どうやら響の父親と総理大臣は知り合いらしいな。この場にいるのも納得できる。

「積もる話もありますが、生憎とまだまだ多忙な身の為、これからの最重要事項を3つに絞って話し合いたいと思います。そして、その前に、風見さん。この度は本当にありがとうございました」

「顔を上げて下さい。対価は貰いましたし。これからについて話しましょう」

俺がした事全てに対してだと思うけど、頭を下げて来た。誰に求められるでもなく自分でやり始めた事だし、それに見合う対価も貰っている事だし、こちらとしては頭を下げられても少し困る。それに、やり始めた以上最後まで責任を持ってポケモン対策の話をしていかなければな。

全員が席に着くと、補佐官が説明を始めた。

「では、この場にお二人をお呼びした事についてですが、風見さんには助手のような役割の人がいるのではないかと思います、こちらに来ていただきました。事前説明が無かったこともあるのでお気づきかも知れませんが、この話はどちらでも構いません。あくまでも選択肢の内の一つとお考えください」

「助手ですか。一人、私としては心当たりがあるのですが」

全国を旅してポケモンを調査して回る事と関係しているのかな。

助手だとは思わなかったが、何かあるのかとは思っていた。でも、助手と考えるんじゃないなくて、仲間と考えればどうだろうか。響きたいな明るい奴と仲間で、ポケモンと

旅をするというのもロマンだな。青春だな。でも、もう一人、紅斗君という心当たりがいる。

「どなたでしょうか。響さんは若金議員の了承も得ているので問題ないのですが」「そうなんです。こちらとしても相手の両親が何と言うのかは分からないので。ただ、響がいいのなら、助手の話は引き受けますよ」

飛行機の中でこれに関しても説明されたな。学校は行かなくてもいいらしいし、調査と言う名目だから毎日一定額支給されるという事だから、こんな美味い話受けない訳がない。そこに仲間も加わるとなれば、既に期待に胸を弾ませている自分がいる。

学校に関しては、子どもには教育を受ける権利が憲法で定められているが、学校に行けだなんてのは書かれてないので問題なし。

親は子どもに教育を受けさせる義務があるとなっている。細かく言えば、教育が受けられる環境を整える義務がある。そこはスマホに教材アプリを詰め込む事によってクリアするらしい。定期的にスマホのアプリを使って試験問題を送って来てその点数で、義務教育レベルの学力があるか判断するらしい。

要するに勉強もきちんとしておけよという事だ。そこは前世から引き継いだ知識があるから歴史の人物名以外はどうにかかなりそうだ。そこは前世から引き継いだ知識があるから歴史の人物名以外はどうにかかなりそうだ。

冒険しながらも勉強をしなければならないのは現代社会で生きる上での宿命だな。

「ええんけ! 俺さ、ほんまはお前と冒険できるって聞いてここに来たねん!」

「そ、そうか。冒険って危険なのは分かってるのか?」

「もちろん!」

「はあ」

全く分かってなさそうな返事にため息が出る。そんな俺たちのやりとりを場にいた大人達は苦笑しながら見ていた。

「危険なのは風見さんですから、こちらとしては護衛や監視の人員を配備したいところですが、既に身を守る事の出来るだけの力は持つておられる。逆に人員を送った方が足手纏いになりかねない。なので、こちらは知識の面でサポートすることになりました。衛星電話の方を用意します。遭難や電波の届かない様な山奥などで用がある場合はこれを使って下さい」

衛星電話でもスマホの方でも、ある電話番号にかけると俺たちをサポートしてくれる部署に繋がるらしい。そこから専門家などを通じて知識を教えてくれると言う事みたいだ。正直、山で遭難した場合とかの対処法を細かく教えてくれるのはありがたい。

「子どもだけで旅をさせるなんて事が知れたらまずくはないですか?」

「そこは大丈夫です。対策として無料動画配信ツールを使った報告みたいなものを定期的にアップしていけたらと思います」

「えっ？ あえて公にするという事ですか？」

意外だな。もっとう政府の人間って裏でこそそそやりそうなイメージなのに。でも、この方法なら、ポケモンの事をもっと知ってもらえるし、将来的にバトル大会を開こうと考えている身としては願ってもない話だ。

「はい。風見さんの脅威になりうる事はそう起きないと思います。それに、我々も学ぶことは多い。もちろん他の方法もあるので、こちらも検討してもらいますが」

「是非それでお願います！ 響もいいよな？」

「おう！」

残りの方法も説明されたがどれもパツとしないので、配信する事で決定した。編集なんかは映像関係の人達がしてくれるようで、俺たちは素材を送ればそれでいいらしい。完成した映像を見て、問題がなければアップロードなんかも全部やってくれるとのこと。

これには、他の人だとデメリットの方が大きいように感じるだろう。顔を晒す事になるし、何より子どもでもある事、そして、その子どもが大きな力を持っている事。これらを危険視されたりして非難的になるのは明らかだが、それはポケモンに対する理解が進んでいないだけで、今後何年か先を考えた時に、俺の利益になってくれる。

いや、利益にしてみせると言った方が正しいか。

お手並み拝見

その後も色々話したのだが、響は大して理解していなかったようだ。そして、ポケモンバトルを見せて欲しいと頼まれてしまった。その頼みに響はめっちゃ喜んでいたけど、まだヒノアラシという事は高くても13レベなんだから、相手の出来そうな手持ちはコリンクくらいなんだよな。

「ポケモンバトルをする前に、折角ですから手持ちの皆を紹介しておきますね」

場所は移動して自衛隊の駐屯地内。ここならイワークも問題なく出せるし、ヒノアラシが炎を出しても問題ない。

俺はボールを四つ投げて、ウインディ、イワーク、コリンク、トロピウスを出した。

ウインディとトロピウスは2メートル程で、イワークに関しては9メートル近くなので、その場にいた皆さんは随分と驚いていた。響もそのうちの一人で、ヒノアラシと口を開けてポカンとしていた。

コリンクだけが抱っこできる大きさだな。10kg近いからちよつとしか出来ないけど。

「す、すげえな」

「まあな。自慢のポケモンたちだ」

「俺はバッククーしかいないや」

「さ、バトルするか」

「おう！」

大体十メートルほど離れて、お互いのポケモンを出す。響は勿論ヒノアラシで、前に出てきたヒノアラシはやる気満々らしい。背中から炎を出している。

こつちはレベル差を考慮してコリンクで。初めてのバトルにはなるが、何とか勝つてみせる。

審判の合図を聞いて、直ぐにヒノアラシは突っ込んできた。こちらは、じゆうでんをする。

「そのまま、たいあたりだ！」

「じゆうでんが終わったらすぐに避ける！」

なんとかじゆうでんが間に合い、ヒノアラシのたいあたりを避けた。コリンクは次いでんき技を使えば威力が2倍になる。そして、そのチャンスを掴まないと。

「でんこうせっか！」

「きた！ スパーク！」

じゆうでんをしたこともあって、スパークは威力が十分。一瞬眩しすぎて姿が見えな

くなつたほどだ。

一瞬のうちにコリンクへとヒノアラシは迫つて来たが、なんとかスパークが間に合
い、コリンクはでんこうせっかによつて吹き飛ばされて、ヒノアラシはスパークをま
もに食らつてその場で蹲っていた。

「まだいけるか？」

「リイ！」

「バックー！　大丈夫か！」

「ヒノオ!!」

ヒノアラシは何とか気力で持っている状態だろうな。多分後一撃で決着は着く。
やっぱり、補助技つてのはしっかりと使えればめちやくちや強いな。

「もう一度でんこうせっか！」

「左に跳べ！」

今度のでんこうせっかは流石にどうすることも出来ずにまともにダメージを受けて
吹き飛ばされてしまう。先制技つてのはやつかいなものだな。

「ひのこー！」

「スピードスターだ！」

吹き飛ばされて距離が出来るも、特殊技で遠距離攻撃をしてくる。少しは考えたみた

いだけど、こっちにもその手段はあるんだよ。

ここで隠し玉のスピードスターが登場。絶対に命中する技で、たまご技だ。コリンクが覚えていたたまご技はこれだけだったが、絶対に命中する技と言うのは避けると言う事が出来るこの現実世界では結構強い。

コリンクが尻尾を振ると、3発の星が打ち出された。スピードスターは射線上のひのこを相殺して、発射された3発のうち2発が命中した。

さすがにこれを耐える体力はなかったのか、気絶してしまった。

「なかなか悪くない動きだったよ」

「うう、バツクう」

「おい、泣くなよ。ほら、早くポケモンセンターに預けてやれ」

モンスターボールにヒノアラシを戻して衝撃の一言。ポケモンセンターってなに。

一瞬怒りが一気に湧き出て来たけど、落ち着いて話を聞けば今までバトルで負けた事が無かったらしい。仕方がないので1から教えてやった。それと、バトルに負けてなかったとしても、疲れは溜まるもんだから偶にはポケモンセンターに預けてやれとも。

どうやらポケモンセンターに預けると、健康面でも見てくれるみたいで体力だけでなく、精神面とか疲労とかもケアしてくれる。だから、俺は結構世話になっている。

スマホの中で一体何が行われているのかは知らないが。

「凄いですね。ここまでは」

「まあ、進化前ですし、序の口ですけど。折角なんで、進化後のポケモンのバトルも見ますか？ 家のポケモンは暇なときに戦い合ってるんで出来ますよ？」

「え、えっと、そうですね。今後の参考のためにも是非」

総理としては時間が限られているので切り上げたいところなのだが、こんな機会はないので逃すのもおしい。それに、進化後のポケモンの脅威を知らなければ対処を間違う場合もあるので、見るしかなかった。

「レア、本気で来いよ」

「ガウ！」

「イワーク、本気で行くぞ」

「イワ」

「こっちは進化後、こっちは進化前です。イワークは進化前から大きいので結構危険です」

ちよつとした説明をしながら、レアと対峙する。どっちもやる気は十分みたいだ。審判の合図を待つ。手が挙げられ、振り下ろされる。その瞬間レアは視界から消え失せた。

「消えた!？」

正確に言うとは視認出来ない速さで動いているだけなんだがな。こうしてバトルをするのは5回目くらいになるんだが、その度にレアのしんそくは見えなくなっている。多分速さは変わっていないと思う。単純に相手に視認されない様な動き方、技術的な部分を発展させているんだろう。その部分に力を入れているのは俺と言う目があるから、俺をまずは欺く、ということなんだろう。

「左」

例えどれだけ見えなくしても、レアはイワーク相手にはしんそくで攻撃はしない。しんそくは移動手段に使う訳だ。そして、次の攻撃に移る瞬間の隙、そこが無くならない限りは意味がない。

「ガウアー！」

「おっ!?!」

いきなりオーバーヒートを放ち、イワークの攻撃をそのまま跳ね返した。イワークの攻撃自体はレアの体勢を崩すことを目的とした、たいあたりなのでそこまで威力は乗っていない。その軽さを、オーバーヒートで力づくで跳ね返したという事か。

「立て直せ！」

次は何で来る？ 特殊だと、俺のアドバイスしたもえつきるかほのおのうず、物理だとフレアドライブ。何で来る!?!

「ジャイロボール！」

レアが炎を纏うと同時にイワークに叫んだ。フレアドライブで突っ込んできたレアはイワークのジャイロボールに弾き飛ばされて、なんとか着地に成功した。効果いまひとつとはいえ、ジャイロボールはすばやさが相手より遅ければ遅い程威力があがるので、恐らく結構な威力だったはずだ。

一方のイワークは、多少ダメージを受けたみたいだが無事なようだ。しかし、どうしてフレアドライブを選択した？

「ステルスロックだ」

距離が離れている内にステロを撒いて、攻撃をさせにくくさせる。こつちじゃ、踏む度にダメージが入るから、なかなか強力だ。

「ガウー！」

ま、一方特殊技で吹き飛ばされてしまう事もあるが。レアがもえつきるをステロに撃つと、3分の1くらいは吹き飛んだ。

それに注意がそれている間に、気付いたらレアはいなくなっていた。今度は手加減しない。

「いわおとしの準備だ………っ、後ろ！」

目の前に現れたレアにいわが落とされ、確かに攻撃が直撃した。しかし、耐えきって

見せ、きしかいせいをイワークに叩き込んだ。そうとう体力が減っているであろうレアの攻撃は随分と効いたらしく、耐えはしたがもう一発は無理そうだ。

「なかなか、レアもやるようになったな」

「ガウウウ」

レアがさつきフレアドライブで突っ込んできたのは体力を減らす為か。なるほどな。次で決着をつける！

「いくぞ！ ……う？ どうした？」

ヒノアラシとコリンク、レアが最初に鳴きはじめ、イワークとトロピウスもそれぞれ始めた。なんなんだ？

スマホが鳴り響いてから約50秒後、地面が揺れた。

地震、津波、○○○○○

紀伊水道沖。和歌山県より約50 km地点。

洋上には白い生物が浮いていた。背中にある黄色の輪は後光を表す様だ。宙に佇む白き神は自身の周りに十七種類の板状のものを展開し、そのなかから幾つかの板を自身の前に並べた。

しづくプレート、だいちのプレート、ふしぎのプレート。それらが輝き始めると、神もまた輝きを纏い始めた。

一方で海にも変化があった。小さな波は消え去り、やがて視界には大きなうねりとなった壁の様な膨大な海水が押し寄せてきた。

それを見咎めた神はプレートの一層の輝きを持って、力を奪い去った。やがて壁の様な海水は力なく重力に引っ張られて落下し、また小さな波となって四方に散っていった。

「記録したか？」

「バツチりつすよ。流していいっすか？」

「ああ。あまり表に出る気は無かったが、事実くらいは見せてやらんと」

どこからともなく現れた、白をベースに赤のラインが奔った体の持ち主は軽い口調で神に話しかけた。

神の許しを受け、先程の映像がインターネットへと流れた。

スマホが鳴り響くと、総理は慌てて車に乗ってどつかにいった。スマホの音が意味するものは地震だ。それも、総理が慌てるほどの。

「響、っつちに来て」

普段は威勢がいくせに、こういう時にはめっぽう弱いようで半べそかいている。しかたがないので、響を庇うように抱き寄せてやった。そばにはレアとトロピウスも寄り添うようにして守ってくれてるし、小さいながらもコリンクも守ろうとしてくれる。

一番デカイイワークは、俺たちの周りを一周するようにとぐるを巻いている。安心感が半端じゃない。イワークは頼りになる。

ここまでしてもらったけれども、ここは建物も遠くてひらけているからそんなに心配してないだけだね。

自衛隊の人達はこの警戒態勢に驚いている様な微笑ましい物を見るような視線をチ

ラチラと送ってくる。建物の中から避難し終えるのは流石に早く、揺れが来る前にはほぼ全員が外に出ていた。

揺れは感じるくらいには大きいけど、建物が壊れるほどかといえればそこまでで、恐らく震度3か4くらいだと思う。取り敢えず情報をスマホで収集しなければ。

「和歌山県沖、南海トラフにて大きな揺れ……震度7!? マグニチュード9.3!?!」

「ええっ!? 南海トラフなん!? お母さんは大丈夫かな? 皆大丈夫かな!」

「ちよつと落ち着け、な。スマホは? LINEは使えるか?」

「う、うん」

異常に慌てている人を見ると逆に冷静になるって言うのが分かった。取り敢えず俺も母さんや父さん、友達とか紅斗君の安否を確認したいな。

災害時に於いて、電話は非常に繋がりにくくなる。なんせ大勢の人間が電話回線を使用するためにパンクしてしまうからだ。2011年の災害の時、殆どの人は連絡が付きにくかったと言っている。そして、その経験を活かして問題を解決しようとして今大勢の日本人が使っているアプリ、LINEが生まれた。LINEはインターネットが繋がっていけば電話も出来るメッセージも送れる。既読機能があればメッセージを返す余裕がなくても生きている事は分かるし、GPS機能でどこにいるのかもわかる。このようにLINEは非常時にも役立つアプリで超が付く程の有能アプリな訳だ。

早速、安否確認の終わった人たちが。父さん母さんは無事。クラスのグループも20人近くは既読が付いているし、紅斗君からも返信が来た。

「大丈夫か？」

「う、うん。お母さんは無事みたい。友達も大丈夫やって」

安心したようで、大分落ちついてきた。しかし、南海トラフとなると問題なのは地震よりも津波。早くに情報を収集したかったので、無料動画配信アプリでライブ配信してくれている災害情報のチャンネルを開いた。

『……が予想されます。今すぐ沿岸地域にお住いの方は避難してください。到着時間は早い地域で約10分と予想されます。早めの避難をして下さい。津波高ですが、和歌山県、高知県で最大20mが予想されます。その他、三重県、愛知県、静岡県で10mが予想されています。高台や……』

これはとんでもない事になった。前から南海トラフの減災へ向けて様々な事が取り組まれてきてはいたが、ここにポケモンによる混乱がまだ続いている事も考えると、相当まずい事態だ。

だからと言って何かが出来るとは限らない。たとえ俺が強力なポケモンを何体も揃えていたとしても津波を止めるなんて出来ないだろうし、それこそ伝説でもそんな芸当は……

「なあ、おい、海飛」

「なに？」

「これ、ヒノアラシを出してやろうと思つてポケモン J ジャパン 開いたら、こんな映像流れ出した」

響のスマホを覗くと、そこにはアルセウスと、バカみたいにデカイ水の壁。そして、それを何かの力で一瞬にして崩壊させる。もしかして。

「ん？ ……はあ？ 何してんの？」

「止めてやったのだ。感謝しろ」

「うわっ!? なんでいるんだよ!？」

いきなり後ろから声ができるから振り返つてみれば、アルセウスが何故かいる。そして隣にはパルキアも。てかお前らなんなの、デカイよ、目立つよ、簡単に出てくんよ。

「少し話があつてな」

「そのガキ、Jはジャパンじゃないつすよ!」

「お前は黙つておれ」

「だって、結構考え……申し訳ないつす」

一瞬アルセウスから光が漏れたかと思つたら、パルキアの方が図体はデカイのに直ぐに黙つた。アルセウスの方が強いってのは分かつてるけど。

「というかJはジャパンじゃないのか。てつきり日本の事を指しているのだと思って
いたんだけど。」

「津波、止めてくれたのか？」

「そうだ。だが、それよりも厄介なものを止められなかった」

「ありがとう。……なに？ 津波より厄介なのって」

「カイオーガだ」

勘弁してくれ。

神託

衝撃的な事を口走ってくれたアルセウスはこちらの反応を見ている様で、何も話そうとはしない。カイオーガを止められなかった。つまりカイオーガが出てくるといいう事か？ それを止める手段は？ 俺の手持ちなんて伝説を相手にできるだけの実力なんてない。そもそも育てきったとして止められる確証もない。

伝説と言うのはゲーム上であればたとえリーヴのコラツタの体当たりであろうと、1ダメージは与えられる。だが、実際はカイオーガとなると近づく事すらままならなくなる。がむしやらだつて攻撃を当てる事が出来ないだろうから論外だな。

「カイオーガつて、どういうことなんだよ」

「地震によつて海底洞窟が崩壊したのだ」

たしか、坊の岬沖だと言っていたな。でも、あそこは震源からは離れていると思うんだが。

「地震も止められなかったのか？」

「止められた」

「ならどうして？」

平然と言い返すアルセウスに思わず突っかかってしまった。本来なら津波を止めてくれただけでも感謝するべきなんだ。

「エネルギーの問題だ。地震を止めるとなると今の私では殆どの力を使う事になる。津波を止めるのはその百分の一で可能だ。まだこの宇宙の法則を理解して間もない。効率が悪いのだ」

「そうか。でも、カイオーガを止めなきゃ結局日本は危ないままだ」

「ああ。その為に貴様には全国を巡って伝説のポケモンを説得してもらおう。カイオーガが目覚めるのは4月頃だ」

「どういう、ことだよ」

伝説を説得する？ まさか伝説ポケモンを従えてカイオーガと勝負をしろと？ そんな事が今の手持ちで出来る筈がない。

「問題ない。奴らのいる場所は私が把握している。力を貸すための条件を提示してくる奴もいれば、力で捻じ伏せてみると言う奴もいるだろうがな」

「そんなの、お前なら全員を説得できるんじゃないのか？ というかお前だけでカイオーガ倒せるんじゃないのか？」

「出来るな。だが、私は全てに力を貸さない。この国の命運を握っているのはお前だ。風見海飛」

一方的な通達をしたアルセウスはパルクアと共に空間の裂け目に消えていった。

日本の命運とか、そんな御大層なものを背負いたくなんてない。だいたい伝説を説得しろつたって、今戦力になるのはレアしかいない。そんな状態であと2ヶ月たらずで全国を回るなんて馬鹿げてる。でも、もしも伝説を一体でも仲間に出れたなら、その後の行動が楽になるだろうことも有りうるが。

その最初が難しいんだろうが。

「海飛、海飛！　なんか物凄い事するんやろ？　それについてつてもいい!」

「いや、危ないし、ダメ」

「なんで！　俺も行くからな！　さつきと話違うやんか!」

「さっきの話とは危険度が違う。ヘタすれば死ぬことにもなる。伝説つてのはそれだけ強いんだよ」

「それならいつそ俺もついてく！　そんな危ない奴に会いに行くのになんで一人でいこうとすんねん!」

何にも分かってない。危ないからこそ一人で行くんだ。誰も巻き込みたくないから、誰にも目の前で傷ついて欲しくないから。だから、俺だけで、俺とこいつらだけでいく。

モンスターボールを握りしめると諦めの悪い響を睨みつけた。俺は今自分の事で精一杯なんだから余り絡まないでくれ。

「お前を巻き込みたくない」

「何言つてんねん。さっきの話聞いてる限りもう巻き込まれてるやんか」

「……危ないんだ。響は来なくていい」

「じゃあ、海飛も行くなよ」

どうして食い下がる。伝説を相手にするってことは命にかかわる事になる。映画でだってサトシが何回危険な目にあつていた事か。俺たちはマサラ人ですらないんだから、映画みたいな事が起きたら一貫の終わりだぞ。

「俺は行く。さっきのバトルで分かっただろ。お前は足手まといだ。着いてくるとお前は死ぬ」

「っ！ 死なない！ 俺もバックも強くなる！ だから俺も行く！」

声を低くして脅かしてみても引く気配はない。もうこうなったら相手をせずに行きしかかない。コネでも何でも使つて着いて来そうだから出来れば納得させたかったけど、俺自身まだ整理が着いてないし、考える為の時間が必要だ。

「必要なのはこれから強くなることじゃない。今強い事だ。じゃあな」

「……………」

もう背を向けたから顔は見えないけど、何も言い返せなくなつたんだろう。お願いだから理解してくれ。納得してくれ。

俺があの時アルセウスにこの世界へ来ることを告げられた日から、俺はアイツの掌上なんだ。ポケモンがいる世界にこうして居られる代償なんだ。転がされるのは俺だけがいい、玩具にされるのは俺だけがいい。誰も俺の領域に入つてこようとすると、待ってるのはアイツの玩具になる未来だけだ。

総理に話をするために車を出してもらい、官邸へと向かった。そこでアルセウスから聞かされた事、カイオーガによる考えられる被害、そして俺自身のこれからの行動。それらを報告した。それらの事について時間が欲しいと言われたが、俺は時間がないと言つて直ぐにホテルへと泊まった。

ポケットモンスターJのアプリ。開いてみると、新しい項目が追加されていてそこに準伝説を含めた伝説のポケモンの位置が示されていた。

今いる関東周辺には4つのアイコンが。ファイヤー、サンダー、フリーザー。そして。「ミュウツー……」

いるのか、お前も。造られたのか、既に。弄ばれたのか、人間に。

伝説をまず捕まえるなんてのは無理だ。なら準伝説を捕まえに行く事になるが、準伝説のなかでも比較的、楽な奴を選ばないといけない。

アルセウスは言っていた、手を貸す条件を提示してくると。それは力かもしれない。だが、裏を返せば力以外の条件を提示される事もあるという事だ。

「決めた！」